

■2019年度横浜市ESD推進コンソーシアム実践報告書

横浜市立ユネスコスクール ESD推進校実践報告

平成31年度文部科学省SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業

2020年2月

横浜市教育委員会

はじめに

横浜市では、2016年度の文部科学省「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」の採択を受けて以来、全ての横浜市立学校で、ESDの理念に基づく教育が広まっていくような取組を展開してきました。事業の推進においては、多様な組織が参加・連携した「横浜市ESD推進コンソーシアム」を立ち上げ、以下のようなESD関連のキーワードのもとで、取組が展開されてきました。

表:「横浜市ESD推進コンソーシアム」で活用されてきたESD関連のキーワード

- 持続可能な開発のための教育(ESD)
- ホールスクール・アプローチ
- 多様な主体とのパートナーシップ
- ESDのレンズ:見直す(批判的)、つなげる(統合的)、変わる(変容的)、地域で世界へ(文脈的)
- SDGsの特徴:普遍性、包摂性、参画性、統合性、透明性
- SDGsを学ぶ、SDGsに学ぶ、SDGsと学ぶ
- カリキュラムデザインと学校運営の連関
- 未来につながる、未来につなげる
- 「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会

本取組では、当初からESDを学校全体で取り組むことを軸に据え、「ホールスクール・アプローチ」のもとで展開をしてきました。「ホールスクール・アプローチ」は、(1)学校におけるガバナンスと能力開発、(2)学校施設の運営、(3)カリキュラムの編成・実施と教授・学習活動、(4)学社連携の4領域に配慮をしたものであり、その相互性が強調されたアプローチと言えるでしょう。本取組においても、カリキュラムデザインと学校運営を連関させたアプローチを採用し、さまざまな取組を「見直す、つなげる、変わる、地域で・世界で」のレンズで考えることを、教職員、学校関係者、保護者、児童生徒とともに深めてきました。地域と世界、学級・学年と学校、教科と総合、能力と態度などのように、一見、異なる文脈で語られることが多い用語を関連づけ、学校全体が持続可能性に向き合う取組を深めてきました。

令和元年度においては、文部科学省「SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業」(教育(学習)効果の評価・普及)の採択を受け、さらに、これらの取組の充実が見られるようになってきました。とりわけ、この数年の「変容」は、教職員、児童生徒らが、持続可能な未来に向けた教育・学習について主体的に考え、関わることにより、各々の学校の個性や文脈が活かされた取組が多く見られるようになってきました。日々の授業研究や教員研修、年度末の報告会などを通して、自身の取組を発表・共有するだけでなく、お互いのいいところを尊重し合いながら、さらに学校の個性や文脈を活かした取組として「変容」させてきている点に特徴が見られるようになってきました。これらの個性ある学校の変容は、当初からESDを学校全体で取り組むことを軸に据えるという「ホールスクール・アプローチ」によるものだと思っています。今日では、ESDは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成を可能にさせるもの(enabler)であると言われています。この冊子に見出される知見が、横浜の、国内各地の、ひいては世界各国の持続可能な未来に向けた教育のさらなる展開の一助になれば幸いです。

横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター
東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授

佐藤真久

本書について

横浜市教育委員会では 2016 年度より、文部科学省の ESD 推進事業の採択を受けて、横浜市 ESD 推進コンソーシアムを組織し、学校と教育委員会だけでなく、大学や行政、NGO や企業などと連携して、ESD の推進を行っています。

これまでの 3 年間は、新たに ESD 推進校を指定して、各校が ESD を教育課程に位置付けるだけでなく、ホールスクール・アプローチの視点からも、様々な ESD の実践に取り組んできました。

今年度は、文部科学省の「SDGs 達成の担い手育成 (ESD) 推進事業」の中でも、「教育 (学習) 効果の評価・普及」という分野で新たに採択を受け、大きく分けて三つの柱で本事業に取り組んでいます。

本書の構成ですが、第 1 章では一つ目の柱である、ユネスコスクール 4 校を含む、ESD 推進校 21 校の今年度の取組について、掲載しました。

ESD 推進校の様々な実践を、学校教育目標や学校として育成したい資質・能力と関連付けたり、SDGs をカリキュラムや児童生徒会活動に位置付けたりすることを中心に研究・推進を進めています。

各校の取組については、「ESD を通して育成したい資質・能力」、「ESD の実践内容」、「ESD による変容の視覚化の手法」、「変容から捉える ESD の良さ」という 4 つの視点で自校の取組について掲載しています。特に「ESD による変容の視覚化の手法」というところが、「ESD を通して育成したい資質・能力の育成」にどのように結びつくのかを、今後も研究していく必要があると考えています。また、SDGs は児童生徒にとっても理解しやすく、それぞれのゴールを学習内容と結びつけて考えたり、ゴール同士をつなげて考えたりしやすいということも、各校の実践から見えてきます。引き続き、「持続可能な社会の創り手」として必要とされる資質・能力とはどのようなもので、それらを教育活動にどのように育成してい

くかを明らかにしていきたいです。

第 2 章では、二つ目の柱である、「協働型プログラム評価」という手法を用いて、ESD の取組についてカリキュラム・マネジメントだけでなく、ホールスクールの視点で学校全体の教育活動の見直しを行っている、「みなとみらい本町小学校」の実践について、東洋大学米原あき教授の分析について掲載しています。この評価手法に関しては、ESD の評価にとどまらず、教育分野における評価観の転換の必要性や学校評価の在り方にもつながる視点が示されています。

第 3 章では、三つ目の柱である、国連大学の委託研究として、東京大学大学院教育学研究科北村准教授の研究チームにより、ESD 推進校を対象に「ESD を通じた学習成果と、それらを育むための効果的アプローチ」に関する質問紙調査を実施し、その集計結果について掲載しています。

第 4 章では、今年度の横浜市 ESD 推進コンソーシアムに関連する内容をまとめて掲載しております。

教育委員会が推進コンソーシアムを組織し、ハブ的な役割を果たすことは、学校の実態を理解しながら、学校の独自性を尊重して ESD の推進が図れることや、東京都市大学佐藤真久教授をはじめ、大学関係者との情報交換を通して世界の潮流を把握し、学校の実態を理解した上で、実践レベルでは NPO や企業などとも連携をし、そこから本市として ESD 推進をデザインできる強みがあることをわかってきました。

最後に、本年度は新たに採択された事業の初年度であり、本書はその研究途中の成果についてまとめたものです。引き続き ESD の推進に資するものとなるように、研究を重ね、教育効果の評価を行うことが、「ESD のよき」として学校の文脈で理解され、価値づけられ、広く普及されるよう願うものであります。

目次

はじめに	横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター 東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久	1
本書について		2
目次		3
第1章 ESD推進校の実践事例（1～4の学校はユネスコスクール）		4
1 永田台小学校		5
2 幸ヶ谷小学校		7
3 市ヶ尾中学校		9
4 東高等学校		11
5 三保小学校		13
6 北綱島小学校		15
7 羽沢小学校		17
8 日枝小学校		19
9 恩田小学校		21
10 港南台第三小学校		23
11 太尾小学校		24
12 荏田西小学校		25
13 中和田中学校		26
14 南本宿小学校		27
15 みなとみらい本町小学校		28
16 新治小学校		29
17 大門小学校		30
18 いずみ野小学校		31
19 西本郷中学校・西柴中学校・横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校（1年目の推進校） 三保小学校の実践例 <目標4>質の高い教育をみんなに 持続可能な社会づくりを担う児童の育成		32 33
第2章 協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメント実践に関する調査研究		34
横浜市ESD推進コンソーシアム委員 東洋大学 教授 米原 あき		35
『協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメント実践に関する調査研究報告書』および『2019年度 研究のあゆみ～ESD BOOK feat.MM～』より活用向け要約		59
第3章 ESDを通じた学習成果と、それらを育むための効果的アプローチについて		64
ESDを通して身につけることが期待される資質・能力とは 東京大学大学院教育学研究科 准教授 北村 友人		65
ESD質問紙調査の暫定的な結果について 東京大学大学院教育学研究科 特任研究員 八木 恵理子		67
第4章 本年度の横浜市ESD推進コンソーシアムの取組と全国大会等への参加報告		72
横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会		73
ESD推進校研修会・情報交換会		78
横浜市ESD推進協力者としての取組 横浜市資源リサイクル事業協同組合 企画室長 戸川 孝則		85
ユネスコスクール全国大会参加報告		88
UNESCO ESD Global Conference（2019 ESD教師教育世界大会） 参加報告		94
UNESCO ESD Global Conference みなとみらい本町小学校提案資料		95

第1章

E S D推進校の実践事例

1 横浜市立永田台小学校

□学校教育目標

一人一人が輝く永田台

- (知) 基礎基本を身に付け、自ら問題解決に取り組み、学び続ける子を育てます。
- (徳) 自分の個性に気付き、他者と豊かに関わり合いながら、共に生きる力を育てます。
- (体) 食や運動への関心を高めながら、(自分の) 心身の健康を保持・増進しようとする力を育てます。
- (公) 地域とのつながりを大切にしながら、夢や目標の実現に向かう力を育てます。
- (開) グローバルな視野をもちながら持続可能な社会の担い手として身近なところから行動しようとする力を育てます。

ESDを通して育成したい資質・能力

本校では、ESD とはケア(Care)の精神であると考えてきた。ケアの精神とは、自分自身を気づかうものであり、親密な他者だけではなく、見知らぬ人や遠く離れた人に対しての思いやり、動物や植物や地球に対する気づかいなど広義にわたる。つまり、自分がかかわる世界との関係性ともいえる。その関係性を互いによりよくしていこうとする態度を大切にしてきた。そして、ケアの精神を大切に、私たちの教育活動を展開していこうと試みてきた。

ケアの精神は永田台小学校に根付き、子どもも大人も元気な学校づくりができています。それを土台に、授業の中で ESD について考えることに今年度はチャレンジしている。

ESD という視点で授業を眺めるとは、目新しいことをするわけではない。教科等の身に付けさせたい力をはっきりさせながら、授業を構成することは従来の授業と変わらない。

ただ、ESD の視点を通して授業づくりを考えると、生きてはたらく知、つまり学んだことが次にも生かせる汎用的な力を中心に据えた授業になると考えている。

本校では、各教科等で身に付けさせたい資質・能力を意識する授業づくりからスタートさせた。各教科等の資質・能力の中に、持続可能な汎用的な力も含まれている。それらを生きてはたらく知として捉え研究を進めている。

ESDの実践内容 Activity

今年度の本校の ESD の取組は、授業づくりに焦点を置いて取り組んできた。具体的には、以下の2つが主な取組である。

- ① 身に付けさせたい力の明確化
- ② 生きてはたらく知を意識した授業づくり

研究主題は、学校教育目標である「一人一人が輝く永田台」に設定し、それを具現化した姿としてサブタイトルを「夢中になって学び続ける一人一人を目指して」と設定した。

子どもは常に自然発生的に夢中になって学ぶとは限らない。そこには教師のはたらきかけが重要になってくる。教材との出会わせ方や、授業展開、目標設定や成果物の設定など、様々なことが考えられる。教師が真に子どもと向き合うことで、どのような授業が子どもを夢中の学びにいざなうのかを考えてきた。

まず授業設計をする際に、教科等の身に付けさせたい力を明確にした。子どもにどんな力を身に付けさせるかが明確であるからこそ、活動だけで終わらない学習計画を立てることができる。

研究を進めていく中で、目標を明確にした授業では、子どもたちは何を学ぶのかの見通しをもち、主体的に学ぶことができることが分かった。

これは目新しい考えではないが、実践を通して

実感を伴った理解につながった。

さらに、各教科等の身に付けさせたい力を ESD の視点で考えた。例えば、生活科の栽培の単元では、相互性という概念に着目した。そうすることで、単元を通して身に付けさせたい知識・技能の基礎として設定した、「野菜の成長には土、水、日当たりなどが関係していることを知り、適切な世話のしかたがあることに気付く」という目標を単元の柱にした単元づくりを行った。これは、生きてはたらく知を意識した単元づくりである。この授業は一例ではあるが、授業研究を通して全職員が生きてはたらく知を中心にした授業づくりに取り組んだ。



<地域のごみ収集の方法を調査しています>



<全学年に向けたおもちゃ祭りをしています>

ESDによる変容の視覚化の手法

生きてはたらく知を意識した授業で、子どもにどのような変容が生まれたのか。前章で取り上げた生活科の授業を例に紹介する。

栽培単元では、「私のピーマンが、元気がない。どうしたのだろう。」という素朴な疑問を解決していく中で、太陽と植物の関係についての知識を子どもたちは獲得していった。また、植物の成長には、日当たりが関係していることも体験

を通して学んだ。

子どもたちの日々の振り返りカードから、教師は子どもが今どのような課題をもち、どのような知識があればそれを解決できるのか見通しをもつことが重要である。そして、教師が知識を一方向的に教えるのではなく、気づきが生まれている子どもをきっかけにして、全員が生きてはたらく知を獲得させていくようにした。

夏野菜の栽培で獲得した知識は、冬野菜の栽培単元で生かされていた。鉢をどの場所に置くのかを考え、日当たりの良い場所を選んだり、水のあげ方を工夫したりしていた。これは、夏野菜の栽培で身に付けた力を汎用させていると捉えることができる。

子どもたちが身に付けた力は、言語化することで確かな学びにつなげていきたいと考え、カードに記入しながらポートフォリオにした。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

生きてはたらく知を授業の中心に据えた研究はスタートしたばかりであるが、汎用的な力をどのように育てていくのかという視点を教員がもてたことは大きな成果であった。

今の学習での学びが、どこにつながっていくのかを教師が理解していることで、授業の質も高まってきた。「授業準備が楽しくなった。」「子どもをみとる意味が分かってきた。」などの教員の声からも、教員の意識が変わってきていることが分かる。

一方で、今年度の課題として、生きてはたらく知を、各単元でどのように設定するのかというものがある。ESDを通して育てたい資質・能力を整理する必要がある。現在、作成している永田台カリキュラムを、資質・能力ベースで整理していきたい。

2 横浜市立幸ヶ谷小学校

□学校教育目標

自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども

ESDを通して育成したい資質・能力

本校では、学校教育目標の達成に向けて、ESDを柱に尽力してきた。特に総合的な学習の時間においては、長年にわたって積み重ねてきた経緯があり、その成果は内外に示されている。

本年度、学校教育目標をビジョンとし、本校の児童の実態を踏まえ、「目指すべき子ども像」の共有に向けて話し合いを行った。どのような資質・能力を本校として育成すべきなのか、その視点に立って協議した結果、図1の「目指すべき子ども像」が生まれた。

図1には、「自分の将来・未来を考える」「異質な他者への寛容」のような能力の育成が示されている。こうした力は、持続可能な社会の創り手として求められるべき資質・能力である。各学年が児童の実態を踏まえて、図1から重点的に育成すべき資質・能力の育成を焦点化させて取り組んできた。

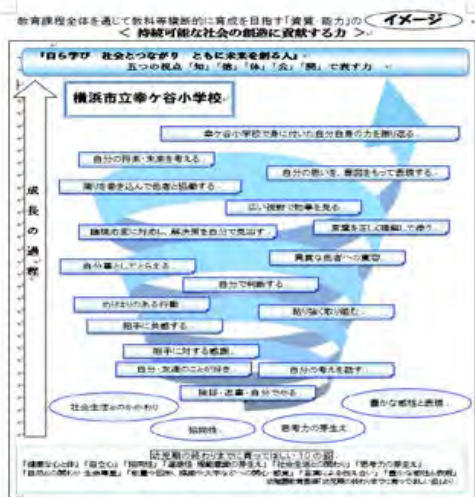


図1「幸ヶ谷小学校の目指すべき子ども像」

ESDの実践内容 Activity

上記の資質・能力の育成に向けて、本年度は「教師と子どもの効果的なリフレクション」をテーマに主題研究を進めてきた。

「リフレクション」とは一般的には振り返り、省察などと訳される。曾我（2019）はESDの「自分自身と社会を変容させるための学び」の特徴をあらわらすキーワードとして「内省」をあげている。また、和栗（2011）は、「「ふりかえり（reflection）」は、価値観が多様化し、変化が激しい社会の中で、他者とかがわりあいながら自主的に生き、学び続けるために必要な能力として昨今注目されている」と述べている。本校では成田（2019）の論を引用し、リフレクションを「問い直し」「見通し」として職員で研修、研究に努めている。主に、自分自身の実践で当たり前と思っていた指導方法や教育観について、子どもと共に実践から「問い直し」を行い、新たな学級経営、授業実践についての「見通し」をもつことを意図している。

さらに、上記のような授業実践を研究協議会で議題にする際に、「協同的なリフレクション」を用いた研究協議会を実践してきた。「協同的なリフレクション」では、従来の研究協議会で課題であった反省を過度に促したり、授業技術の是非に焦点が当たりすぎたりする傾向があった面を見直し、授業者がもつ「問い」を深め、意味を問い直すことで、豊かな子どもの姿に気づき、選択肢を広げることに焦点を当てている。そこに同僚も寄り添い共に問いを深めていくことで、互いに学び、高め合う関係性が築かれていくことを意図しているのである。

つまり、本校では子どもがリフレクションをすることで「持続可能な社会の創り手」へと育成することを目指し、その子どもたちの姿を通して教師が「協同的なリフレクション」をすることを通して、力量形成とともに同僚性の向上をねらい持続可能な学校づくりへと寄与することを目指し実践してきた。

ESDによる変容の視覚化の手法

上記についてリフレクションをテーマにした研修や授業実践、研究会を行っていくのはもちろんだが、視覚を通して変容をわかりやすく理解するために、主に以下の3点を行っている。

① 個人テーマのリフレクション

毎回の研究会、研修会のあとは、個々人が決めたテーマ（学級経営の実践、教師としての成長など）について1年を通してリフレクションを行い、言葉に記して職員室に掲示している（写真1）。日々の忙しい中でも、職員室に掲示した自身のテーマや同僚のテーマについて、目につきやすく日常からリフレクションを促す作用が期待できる。



写真1 職員の個人テーマ

② 子どもたちのリフレクション

変容を促すリフレクションの実践に各教員が取り組んでいる。変容の歩みを視覚的にわかりやすくするために、教室の掲示に子どもたちのリフレクションの記述を掲示したり（写真2）、授業後のリフレクションを定期的にノートに記したりしている。前者に関しては①と同様に、子どもたちの考えや疑問の共有が促進され、後者の実践は自分自身の歩みを認識したり、児童と教員の交流が活発になったりと、日常の授業実践に効果が出てきている。

③ 協議会を通しての変容の姿の共有

また授業研究協議会では、従来の協議会とは違ったあり方を職員で経験することで、変容の姿を共有している。前述の「協同的なリフレクション」の実践を行うことで、授業者の変容の姿を参観者が視覚等を通して実感することを目指した。

例えば、ある回では、講師との対話的リフレク

ションを行った（写真3）。講師が授業者の内省をうまく引き出しながら対話をすすめる姿を職員で共有することにより、ファシリテーターとしての在り方を学ぶ者もいれば、自己と授業者との思考や視点の違いに気付く者もいた。こうした体験は視覚を通して変容の様子を見るだけでなく、思考も促進される。授業者の内省を通して、参観者自身が内省を深め自己の変容を促していたのである。



写真2

児童のリフレクション



写真3

対話的リフレクション

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

以上のように、本校では、ESDの実践を通して、児童、職員の変容の姿が促進されてきた。また、その変容の姿が視覚化を通して共通理解されてきた。上記に記した「リフレクション」を通じた実践以外にも、本校では持続可能な学校づくりを目指し、「ESD推進部」が中心となって、学校経営の「問い直し」にも取り組んできた。従来の校務の在り方を「問い直し」することで、昨年度は60個を超える改善を行ったり、職員室のリニューアルをしたりするなど、その変容の姿は職員のみならず、保護者、地域にも実感が広がっている。

このようにESDは、従来の当たり前を「問い直し」ながら、持続可能な学校づくりへと発展させる可能性をもっている教育である。今後も、幸ヶ谷小学校としてのよさを残しながら、変容を進め学校教育目標の達成に向けて歩みを進めたい。

- ・曾我幸代（2018）『社会変容をめざすESD:ケアを通じた自己変容をもとに』学文社
- ・和栗（2011）『「ふりかえり」と学習—大学教育におけるふりかえり支援のために—』国立教育政策研究所紀要 第139集
- ・成田喜一郎（2019）『グローバル時代を共に生きる子どもを育てる教育実践の推進:教員研修プログラムと教育実践から未来を拓く』

3 横浜市立市ヶ尾中学校

□学校教育目標

教育理念『自立貢献』

○自分で解決する力を大切にします。(知・公・開)

○心豊かに生きる力を大切にします。(徳・体)

ESDを通して育成したい資質・能力

- ・持続可能な社会の創造に貢献する力
- ・グローバル化の中で生きる力
- ・言語能力

ESDの実践内容 Activity

1. ESDの視点を重視する教育活動の展開

・文化学習発表会（環境委員会）

文化学習発表会では、環境委員会がゴミ分別や食品ロスに関する問題をミニ劇やクイズをとおして発表しました。また、海洋プラスチック問題について環境委員の生徒が学習した成果も発表し、「一人ひとりがゴミを分別して捨てるのが、海洋プラスチック問題を解決することにつながる」ということを強く訴え、全校生徒の意識を変える一助となりました。



・募金活動

2019年は自然災害が多く発生し、その被害の様子が連日テレビや新聞で報道された年でもありました。日に日に被害が拡大し、被災者が増えていく状況を目のあたりにし、「中学生の自分たちにできることがないか」と生徒会本部役員会を中心に声が上がりました。「一日も早く行動を起こすことで、被災された方々の役に立つことは何か」と早急に話し合い、「募金活動」を行うこととしました。送金先についても吟味し、被災者の立場に立った視点で行動を起こすことができました。2日間の募金活動ではありましたが、想定していた以上の募金額が集まり、「困っている人には手を差し伸べる」という、全校生徒の意識の高さを感じることができました。



2. 持続可能な社会の実現とSDGs達成に向けて

・市中オリジナルマイバッグ

2年前から「海洋プラスチック問題」について課題意識をもち、学校のリーダー組織である中央委員会を中心に学習を進めてきました。まずは、「海洋プラスチック問題」が世界でどんな問題を引き起こしているのかを知るために、WWF（世界保護基金）の方に講演を依頼し、理解を深めました。次に、そこで得た知識を「学活」や「総合的な学習の時間」を使って、全校生徒に伝え、一人ひとりがこの問題の深刻さを理解した上で、「マイバッグ」の製作に入りました。レジ袋使用を減らすための工夫や市中学生が持ちやすいマイバッグについて全校アンケートを実施したり、デザインを募集したりしました。完成したマイバッグは、生徒一人ひとりに配付し、「自分たちの行動が世界を変えることにつながる」という意識をもって行動しています。今後は、校内だけではなく、地域へもこの活動を広めていく予定です。



・アートマイルプロジェクト

今年度はケニアの高校生とSDGsの達成に向けて協働学習を行い、その成果として壁画を製作させるプロジェクトに有志約50人が関わっています。多様な文化を持つ相手と文化の垣根を越えて話し合い、共に活動することで、お互いのことを知るきっかけとなっています。

まず最初は、ケニアとはどのような国なのか、2か月かけて勉強し、その後、これまで学習してきた「海洋プラスチック問題」を取り上げ、私たちに

できる解決策について、お互い意見を出しながら考えました。

10月に行われた文化学習発表会のステージ発表ではプラスチックに関するクイズを、展示発表ではケニアクイズやプラスチック問題について学んだことを新聞にまとめ、発表しました。

その後、テレビ会議システムを通して協働学習を行い、お互いにそれぞれの国の環境問題について調べたことや改善方法などについて話し合い、より理解を深めました。また、環境問題についてのメッセージを次の世代に残すために、壁画をこのプロジェクトの最終的なまとめとしました。



・市ケ尾ユースプロジェクト（3年目）

市ケ尾中学校と市ケ尾高校の生徒、そして地域で暮らす方で、「持続可能なまちづくり」をスローガンに、活動している市ケ尾ユースプロジェクトは今年3年目を迎えました。青葉区のPR、高齢者や障害のある方との接し方、町の安全、いじめ問題など、さまざまな課題を解決しようとアイデアを出し、それぞれ行動に移しています。

特に、今年度いじめ問題に取り組んだ3年生のチームは、大人のサポーターの力も借りながら、小学校での出前授業にチャレンジしました。授業を受けた小学生は、その話を真剣に聞き、「いじめは良くない」と再認識していました。この取組は、いじめ防止市民フォーラム（南公会堂）で生徒が発表を行いました。



・各教科の授業

各教科の年間指導計画にSDGsの視点を盛り込むなど、それぞれの学年・単元に関連した項目を意識しながら授業を行っています。

特に昨年度は、中央委員会のメンバーで話し合っていた海洋プラスチック問題解決に向けた取組を、「学活」や「総合的な学習の時間」を使って全校生徒へ広め、生徒一人ひとりが「自分事」としてとらえることができるように時間を設定しました。市ケ尾中で取り組んでいるさまざまなESD活動について、どのように関連しているのかを教職員が理解し、指導することの重要性を再確認できました。



ESDによる変容の視覚化の手法

行事や授業後の振り返りには、生徒たちの多くの変容する姿を見ることができました。特に文化学習発表会の振り返りには、「プラスチック問題の深刻さを改めて知り、その改善策として、マイバッグの使用をはじめ、今自分にできることを改めて考えたい」といった、環境問題への関心を示す内容が多く見られました。また、今年度より中期学校経営方針に合わせ、学校評価アンケートの項目を「SDGs（持続可能な開発目標）を意識して、教育活動が行われていると思いますか」と改め、生徒では90%、保護者では76%がそう思うと回答がありました。生徒の認識は高いですが、保護者にはまだ伝わっていないところがあるようなので、今後は保護者や地域にも伝わるよう広報活動を行っていきたいと考えています。また、来年度以降、本校が取り組むESDの達成度や理解度を測ることができるよう引き続きアンケートを実施し、経年変化を確認し、より効果的なESDに取り組んでいきます。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

生徒たちはSDGs達成をめざし、積極的に行動し、何事も「自分事」として考える力が育っています。今後は、キャリア・パスポートにも力を入れ、客観的に変容を見とるだけでなく、一人ひとりが自分自身の変容に気付けるようにし、さらによりよい活動ができるよう、工夫して取り組んでいきます。

4 横浜市立東高等学校

- 教育理念 あたり前のことをあたり前に出来る人間
物事を正しく判断し、他人に迷惑をかけない人間
- 学校教育目標 自ら学び、熱心に学習する生徒を育成します。
豊かな心と健やかな体を育みます。
社会の一員として自らの役割を果たすとともに、国際社会の発展に貢献できる生徒

ESDを通して育成したい資質・能力

- ・確かな学力
- ・課題探究する能力
- ・社会貢献活動を率先して行う行動力
- ・グローバルシチズンシップ
- ・多様性の尊重
- ・外部とつながる力

ESDの実践内容 Activity

◎1年次 ESD×SDGsのシャワーを浴びる

- ・GC キャンプ（2日間 all English でSDGs、シチズンシップについて議論し、発表する。）



▲GC キャンプのようす



・ESD day 関東学院大学で全員が、SDGs についてのレクチャーを受ける。

▲JICA 横浜での交流

◎2年次 知識から知恵への変換（探究と論述、表現）

- ・修学旅行（沖縄での環境学習、平和学習）
- ・ESD day JICA 横浜で研修生との交流

○イーストタイムプレミアムプログラム

- ・企業等のプレゼンと意見交換

○部活動、委員会活動の立ち上げ

- ・サステイナブル研究部
- ・ESD 委員会

○防災教育、社会貢献活動 ▼バカスポプロジェクト

※1・2年の実践を経て
～「変容」から「行動」へ
・「言葉の力」を身に付け、論理的な思考力と高い



コミュニケーション力をもった生徒

・「主体的な学び」の成果をもとに、より高い進路実現にむけて挑戦する生徒

ESDによる変容の視覚化の手法

◎生徒のリフレクションの重視

<GC キャンプ>

○周りとの考え方の共有に関して 変化した。いつもは自分の考えがいかにか正しいか論じて納得させようとしていたが、GC キャンプ後は周りの考え方を聴くようになったと思う。

○世界中の人と関わるには、英語が必要になることが分かった。

○街の広告や看板で SDGs を 探すようになった。

○世界の問題を 自分事としてとらえ、解決していく能力をつけなくてはならないと実感した。

○普段の会話の中で、たまに、「これを英語で言う」と・・・を考えるようになった。SDGs のゴールが今、どんなに必要なものかを考えることが増えた。

○周りの人に、SDGs にむけてどのような事が大切か 伝えて、一緒に実践していきたいと思う。

○GC キャンプを通して、以前より積極的に動けるようになったと思います。普段なら、他の人に任せてしまうような場面で、自分から動くことができました。

○今までの私の知っている世界は狭すぎました。視野を広げて考えることが、これからの時代で大切だと思いました。

○自分の行動一つ一つが 世界につながっている

と感じるようになった。

○自分にとって、大きな自信につながりました。これからは もっと英語の勉強をして、より自分の意見を伝えられるようにがんばりたいです。

○できないからと諦めるのではなく、挑戦することで得られるものがあることを学んだ。高校卒業までに、自信をもって 英語を話せるようにする！！

○あまり話したことの無いクラスの人や、他のクラスの何の接点もなかった人とも 協力してコミュニケーションをとれるようになりました。

<南三陸ボランティアツアー>

○今日感じたのは、実際に自分の目で見ることの大切さです。今回見た光景を一生忘れることはないでしょう。考え方も変わったし、物事のとらえ方も変わっていったので、この経験を 人生にかせる人になりたいです。また必ず南三陸へ行きます!!

<SDGs ボードゲーム終了時 (10月)>

○SDGs というワードを聞くと、体が反応するようになった。また、皆、あまり SDGs についてまだ知らない人が多いので、少しでも教えられるように、私が SDGs についての 理解を深めるようにしている。

○SDGs という具体的な目標を みんなで共有して設定することによって、その目標を達成するために個人が何をしたらいいのかを 逆算して考えることができる。例えば、僕は、フェアトレードの食べ物を買うようにしたりしています。

○お出かけしたときやテレビなどで、SDGs という単語が出てきたときに、こんなことをしているんだなと見たり、調べたりするようになった。自分たちの住んでいる横浜でもたくさんの取組みがされていて、イベント形式のものには参加してみようなど、積極的に前よりなれていると思う。

○コンビニやスーパーで袋をもらわないようにしています。マイ箸、マイ袋、マイボトルを意識している。日本での SDGs の認知度が低いと思う。

○SDGs が企業にも注目されてきているようで、両親と SDGs についての話をするようになりました。

○夏季課題研究で LGBT の差別について調べてレ

ポートにまとめて、LGBTに限らず、私たちの身近にも様々な差別があることに気付いた。

◎アンケート、調査等々の実施

カリキュラムマネジメントに向けて、新入生には入学式当日に、9月に東高校のよさと自分ががんばっていることについて、全生徒のアンケートを実施し、その中から ESD×SDGs に関わることを見てみると次のようなことが分かった。

・ユネスコスクールに関係する項目を見てみると、**1年生の入学時(4月)と10月に調査**を行ったところ「ユネスコスクールのよさ」を感じている生徒の割合は**4%の増加**が見られた。また、**学年による差**については、**1年15%** 2年7.4% 3年5.5%と1年生は入学時からユネスコスクールとしての取組を行っていることが生徒の意識に関係していると思われる。

・東高校でがんばっていることとして、ユネスコスクールとの関連では、1年生の生徒の中で **ボランティア活動15% SDGs14%** をあげている。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

<良さ>

・身近な地域での活動とグローバルな思考を通して、自らを変容させ、表現できる内容であること。

・東高校の教育のグランドデザインの中核に位置付けることが可能な学習内容であること。

・教科横断的な内容であり、これまで東高校の教育が大切にしてきたこととの関連が図りやすいこと。

<展望>

・キャリア教育(自分づくり教育)として、進路選択も含めて ESD を生かしていく生徒が増加すること。

・地域、保護者と協働して取り組む実践の場となること。

・ツールとしての英語学習の場となり、英語学習についての生徒の切実性、必然性が高まること。

・東高校で学んだ生徒が、地域のリーダーとして、グローバルシチズンシップを発揮できる人となること。

5 横浜市立三保小学校

□学校教育目標

互いに思いやり、人や地域とかかわり合いながら、進んで学び、高め合う子 ～元気・勇気・根気～

ESDを通して育成したい資質・能力

- ・興味、関心をもって学び、真剣に取り組む。
- ・児童同士の対話や児童と教師、児童と地域の方などとの対話の機会を通して、自分の考えを広げ、深める。
- ・もっている知識を相互に関連付けてより深く理解する。

ESDの実践内容 Activity

I 全教科等でのESDカリキュラムの開発

本校は、地域の豊かな自然を活用しながら「持続可能な開発のための教育」（ESD）を推進しカリキュラム開発と授業実践を進めてきた。持続可能な社会づくりを担う児童の育成を目指し、環境やキャリアなどの教育課題をクロスカリキュラムにより整理し、全教科等において授業実践を進めてきた。今年度は、9つの教科等で28の授業実践を重ねてきた。その中でも、特に社会科でのESDの推進に力を入れてきた。

例えば、第4学年の「水はどこから」の単元では、浄水場や水再生センターの見学や日常生活での水の使用量の調査などを通して、水を無駄にしないための工夫について考えられるようにした。ESDで育成を目指す「構成概念」【有限性】と「能力・態度」【未来像を予想して計画を立てる力】を意識し、水も限りある資源であることを理解した上で、自分たちができることを考えられるような単元計画を工夫し実践した。学習を通して児童は、「自分が1日の生活の中で多くの水を使っていることがよくわかった。」「水は大切に使用しないといけない。だから、お風呂の残り湯を、洗濯や掃除に使いたい。」等の考えをもった。

第5学年の「森林を守る人々」の単元では、毎年本校の5年生が行っている地域にある学校林の下草刈りの時期に合わせて学習するようにした。そして地域の森林→日本の林業→世界の森林へと目を向けられるようにするために、輸入木材の使用量が増え、日本の森林の手入れがされていない資料を提示し、「世界の森林は大丈夫なのだろうか」という学習課題につなげられるようにした。



各教科等で実践した授業は、本校のカリキュラムとして適切であったかを検証し、ESDカレンダー（年間指導計画）の見直しを行っている。

II SDGsと児童の学習や生活との関連付け

授業とSDGsとの関連を考え、17のグローバル目標をもとに、学習を通して育成したい資質・能力を具体的な目標として設定することとした。また、児童会活動では、各委員会でSDGsを意識した目標を設定し、目標達成につながる活動を行ってきた。各委員会が作成したポスターにもSDGsのマークを入れたり、教室や廊下等にもSDGsを掲示したりするなどして、学校全体に広げてきた。

給食委員会→<飢餓をゼロに>

具体目標「栄養バランスを考えた食生活を送ろう」

福祉委員会→<人や国の不平等をなくそう>

具体目標「みんなが仲良く過ごせる学校をつくろう」

ESDによる変容の視覚化の手法

○児童の発言や記述等をもとにした評価

本校では、ESDにおいて育成を目指す「構成概念」を各教科等における「知識・技能」と、ESDにおいて育成を目指す「能力・態度」を各教科等における「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」とそれぞれ関連させ、単元等の評価規準を設定してきた。そして、学習を通して見られた児童の学習の実現状況を、発言や記述等をもとに分析するようにした。

これまでは、アンケートやウェビングによる児童の変容の視覚化に取り組んできた。これらにより、一定の変化は見る事ができた。しかしながら、アンケートやウェビングを実施する時期や方法について課題も残り、数値化できない部分をどう評価するのかという難しさがあった。そこで、学習を通して見られた児童の発言や記述等をもとにした評価方法を取り入れることとした。

例えば、先述した5年生の「森林を守る人々」の単元では、ESDにおいて育成を目指す「構成概念」【有限性】を受け、評価規準を「林業従事者数の減少や高齢化、木材使用量における輸入木材の割合の増加など、我が国の林業が抱える課題や、森林破壊が進む世界の現状について知り、森林の持続可能な利用の仕方が必要であることを理解している。」と設定した。単元を通して見られた児童の発言及び記述等には「日本の森林を手入れする人が減っていることや、輸入木材を多く利用していることを初めて知った。日本の森林がどうなっていくのか心配になった。」「森林はとても大切な役割をしていることを知ってびっくりした。もし森林がなくなってしまうたら、動物が減ったり温暖化が進んだり土砂崩れが増えたりして大変なことになるから、森林がなくならないようにしないといけない。」などが見られ、森林の【有限性】について概ね理解できていると判断することができると考えた。

また、ESDにおいて育成を目指す「能力・態

度」としては【未来像を予想して計画を立てる力】を受け、評価規準を「森林資源と私たちの暮らしが密接に関連していることを踏まえ、現在の自分の行動が、未来の森林資源に影響を及ぼすことを捉え、森林を守るために自分ができることを考えている。」と設定した。「紙や鉛筆も木からできているから、すぐに捨てないできちんと最後まで使うようにしたい。」「自分が買うものを選ぶことで、日本や世界の森林を守っていきたいと思った。」「今、日本や世界で起きていることが少しだけ知れて、自分でもできることもあるんだなと思って、木でできたものをもっと使った方がよいのか使わない方がよいのか、どうしたらよいかよくわからなくなったけれど、とても考えさせられた。」というような発言や記述等が見られ、【未来像を予想して計画を立てる力】の育成につながったと評価することができると考えた。このように、授業及び授業後の研究協議会等を通して、授業者や参観者が児童の発言や記述等を分析し、児童の変容を捉えるとともに、設定したESDの評価規準と学習内容が適切であったかの検証もあわせて行ってきた。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

本校は、ESDの研究を始めてから8年目となる。カリキュラム開発や見直し、授業実践を重ねてきたことで、本校の自然環境をいかした特色あるESDへの取組がデザインされてきた。ESDを継続することで、世界で起きている出来事への児童の関心の高まりや、自分たちにできることを考え実行しようとする児童の姿勢が見られるようになってきている。今後も、環境、キャリア、健康・安全、福祉、食、国際理解等の現代的な諸課題をクロスカリキュラムにより整理し、各教科等のねらいとの整合性を図ることや、地域人材等の活用にも積極的に取り組んでいきたい。さらに、ESDで育成を目指す「構成概念」や「能力・態度」を、学年の発達段階に合わせて焦点化して実践を重ねることで、児童の変容がより明確になるのではないかと考える。今後もESDの評価の在り方についての研究を深めていきたい。

6 横浜市立北綱島小学校

□学校教育目標

心をあわせ 明るくのびる 北綱の子

ESDを通して育成したい資質・能力

- ・伝え合うことで自分の考えを深化させる力
- ・協働的に行動する姿勢
- ・地域に貢献する姿勢
- ・主体的に社会参画する姿勢

ESDの実践内容 Activity

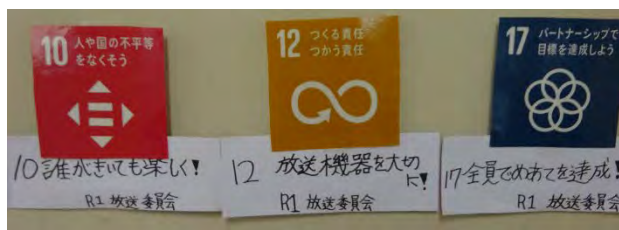
①委員会活動とESD



(資料1)

ESDの実践として、高学年を中心に委員会活動とSDGsを関連付ける活動に取り組んだ。6年生児童が日常の自主学習で、SDGsについて調べていた。その中で「委員会のSDGs」（資料1）というアイデアをもち、教師に提案した。

その児童が、活動したい内容をまとめ、全校に向けて呼びかけた。各委員会では、それぞれの活動内容を振り返り、どんな活動がどうSDGsに関連付けられるかを話し合った。関連付けられた活動やその場所に「SDGsカード」を掲示し、まずはSDGsが具体的に見て分かるような形で全校に広めようとした。(資料2)



(資料2)

②総合的な学習の時間とESD

本校は生活科と総合的な学習の時間において1～6年生まで系統的に安全防災学習に取り組んでいる。6年生は総合的な学習の時間に「目指せ!防災リーダー!」という単元名で学習を進めた。その中で地域の方々と関わり、安全防災学習に取り組みながら、協働的に「地域づくり」をしていくこと・地域や社会に貢献・参画する姿勢を育てることをねらいとしている。

地域の方々と出会い話を聞く中で、夏に行う「北つな夏祭り」は顔の見える関係性をつくる『小さな防災訓練』であることを知った児童たちは夏祭りを一緒につくりたいという願いをもった。そして運営者の方にオファーし、看板や垂れ幕の作成をすることになった。



また、10月には、毎年行われる地域防災拠点訓練にブースを出し、そこで非常持ち出し袋の中身や地域のハザードマップ等についてプレゼンテーションを行った。こちらも参加するだけでなく、地域に貢献・参画したいという児童の願いからスタートしたものである。

このプレゼンテーションを聞いた地域の方々や保護者、他学年からのアンケートを参考に内容や伝える手段を改善し、もう一度プレゼンテーションをするという計画で、本単元の学習を進めた。

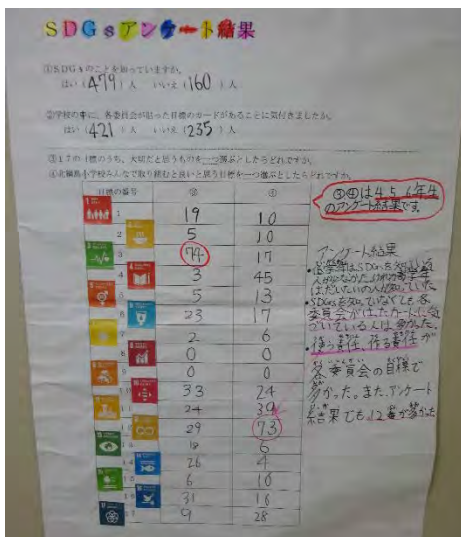
ESDによる変容の視覚化の手法

① 委員会活動とESD

この活動を提案した計画委員会が中心となり、全校にアンケートをとることで、変容を視覚化することを試みた。設問は、

- ①SDG sのことを知っていますか。
- ②学校の中に、各委員会が貼ったSDG sのカードがあることに気付きましたか。
- ③17の目標のうち、大切だと思うものを1つ選ぶとしたらどれですか。
- ④北綱島小学校みんなで取り組むと良いと思う目標を1つ選ぶとしたらどれですか。

(①～②は全学年、③④は高学年のみで実施)



このアンケートの結果を受けて、来年度も継続していきたいと考えた計画委員会の児童たちは、どのような取り組みができるかというアイデアを各学級に募り、5年生が中心となって案をまとめている。

② 総合的な学習の時間とESD

総合的な学習の時間の中で、今までの活動を写真やポートフォリオで振り返り、「できるようになったこと・変化成長/なぜできるようになったのか・理由」について個人で考え、付箋に記入した。その後、「友達から見た変化成長」について付箋に記入し、その成長を伝え合う活動を行った。最後にはその付箋の中で「自分が重要だと思うも

の」を2つに絞り、なぜその2つにしたのか理由を記入した。

この振り返りで今の自分と今後の自分、成長を発見する前後の自分を比較しながら、なぜその成長が自分にとって価値があるものなのかを考えることができた。また友達からの客観的な意見を聞くことで、新しい発見も多くあった。



毎時間のポートフォリオに、気づきや自分の成長を書き込むことを継続する。その積み重ねた振り返りを、一度立ち止まって、自ら価値づけたり、成長を実感したりする。そのことで、「持続可能」な問いや疑問が生まれていくのではないかとこの実践を通して感じた。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

①の実践は「SDG sを知る」という点ではほぼ達成できたが、ESDの理念や考え方という点ではまだ不十分と言える。今後はさらに意識して、取り組む必要がある。

しかし、児童たちが話し合う中で、「知るだけで終わってはいけない。理解したりつなげて考えたりできるようになりたい。」という意見が出てきていた。これは、大きな成果と言えるのではないだろうか。

変容から捉えるESDの良さととは、自分自身の行動を「振り返る」ことができ、そこに「価値づけ」ができる。そして、世界と自分自身を「つなげる」ことで、社会参画の意識が高まることではないかと考える。

7 横浜市立羽沢小学校

□学校教育目標

笑顔いっぱい(E) すこやかいっぱい(S) 大好きはざわの人とまち(D)

ESDを通して育成したい資質・能力

- 最後まで取り組む力 (主体性)
- 他者に働きかけて解決策を実行する力 (進んで参加する態度)
- 自分の考えをもちながら他者の考えをしっかりと聞く力 (多様な他者と協力)
- 地域の人たちに働きかけようとする力 (持続可能な地域社会)

ESDの実践内容 Activity

地域に農業地域を抱えているという特性を生かし、ESD (持続可能な開発のための教育) のカリキュラム開発と実践を進めて2年目になる。

環境・健康・福祉・食育等、現代的な課題を整理し、「教科横断的な学習」を意識したり、地域人材を積極的に活用したりしながら、生活科、総合的な学習の時間を核にして、課題解決型の学習を進めている。

3年生 「ジャムでハッピースマイル大作せん！ ～羽沢のたからをつたえよう！～」

校庭で実のなる果実があることに気が付いた子どもたちは、実として食べる他に活用する方法はないか調べ、夏みかんのジャム作りに挑戦した。ジャム作りの達人との出会いによって、自分たちが育てたキャベツでジャム作りにも挑戦することができた。ジャム作りを通して、ジャムの保存食としての価値、本来なら捨てる果実の皮まで利用できるよさを知り、地域に発信している。



関連 SDGs12 「つくる責任 使う責任」

5年生 「つながれ、ひろがれ、ボッチャの輪」

パラスポーツである「ボッチャ」の魅力を感じ、本活動に取り組み始めた子どもたち。障がい者の方が取り組むスポーツであるという認識から、地域のスポーツ推進委員の方や横浜ボッチャクラブの方々とのボッチャ交流を通して、誰もがみんなで楽しめるスポーツであることに気が付いていった。障がいの有無とボッチャの強さは関係ないということに気づき、自分たちができる範囲でボッチャを広めていこうとする意欲をもった子どもたちは、校内へ、地域へ、共に楽しめるボッチャを紹介する活動に取り組んでいる。



関連 SDGs3 「すべての人に健康と福祉を」

6年生 「夢の羽沢鉄道 ～輝け！未来のはざわ～」

子どもたちは、学区内にできる新駅「羽沢横浜国大駅」が開通することに興味をもった。その開通により、羽沢のまちにどのような変化をもたらすことになるのかについて、地域の方々にアンケートをとったり、相模鉄道取材したりして、羽沢のまちのよさや課題について話し合い、子どもサミットで発表することができた。自分たちのまちの未来は、自分たちによって変えられる可能性があることを学ぶことができた。

関連 SDGs11 「住み続けられるまちづくりを」

○子ども・教職員全体で行う ESD レンズを通した活動の見直し

SDGs について校内研修を行い、教職員が SDGs への関心を高めたり、理解を深めたりした。

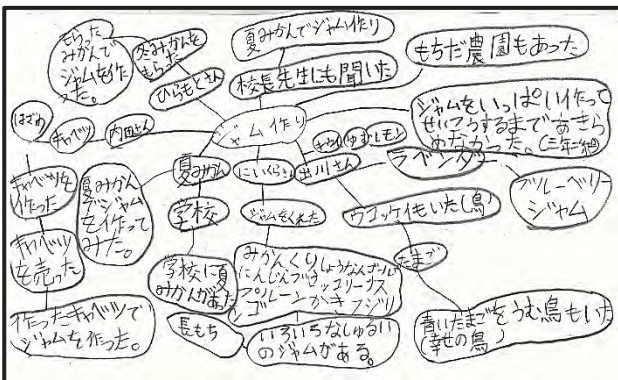
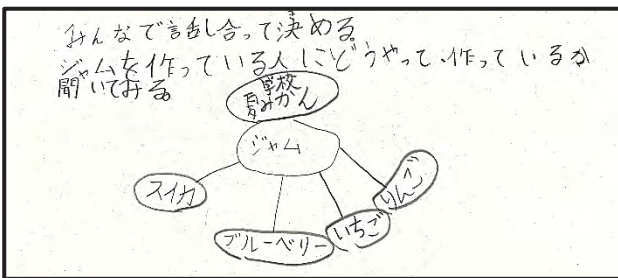


委員会の活動内容と SDGs をつなげて考え、表にまとめた。各委員会の日常活動、「世界を変えるための17の目標」とのつながりを意識して活動できるようにした。

ESDによる変容の視覚化の手法

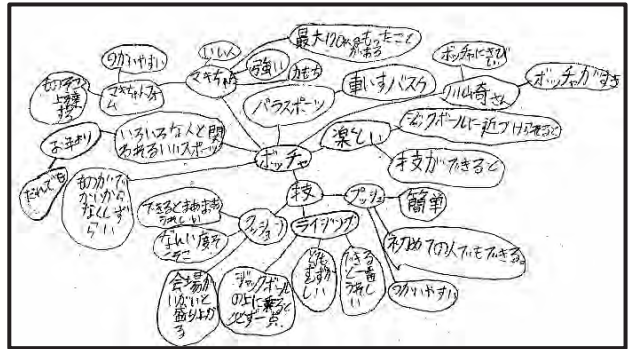
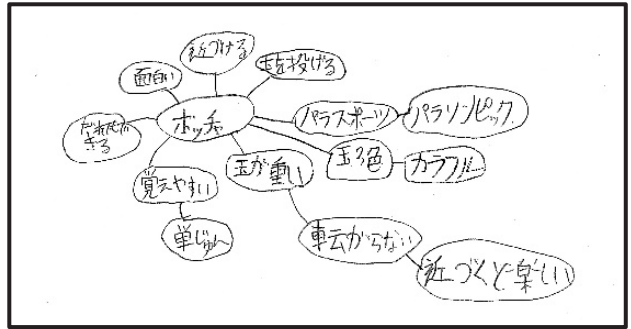
○単元始めと終わりのイメージマップの比較による評価

3年生 「ジャムでハッピースマイル大作せん！
～羽沢のたからをつたえよう！～」



変容した資質・能力：他者に働きかけて解決策を実行する力（進んで参加する態度）

5年生 「つなぐれ、ひろぐれ、ポッチャの輪」



変容した資質・能力：自分の考えをもちながら他者の考えをしっかりと聞く力（多様な他者と協力）

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

教師や児童が地域の人、もの、ことに関心を持ち、つながろうとする意欲が高まってきている。さまざまな学習活動の中で他者と協力したり、コミュニケーションを積極的に行ったりしようとする態度が育ってきている。

教師が ESD の視点を明確にもって取り組み、児童の変容をしっかりと見取することは、さらに子どもたちが自ら課題を見出したり、課題解決的に追及したりする学習を展開するうえでは重要である。今後もイメージマップや他のツールを活用し、ESD を通して育てたい力や身に付きつつある力を視覚化しながら学校全体で取り組んでいきたい。

地域とのつながりや関わりを大切にしたい体験活動を充実させ、地域の方々の思いや願いにふれることで、羽沢のまちを大切に思う子どもたちをさらに増やしていきたい。

8 横浜市立日枝小学校

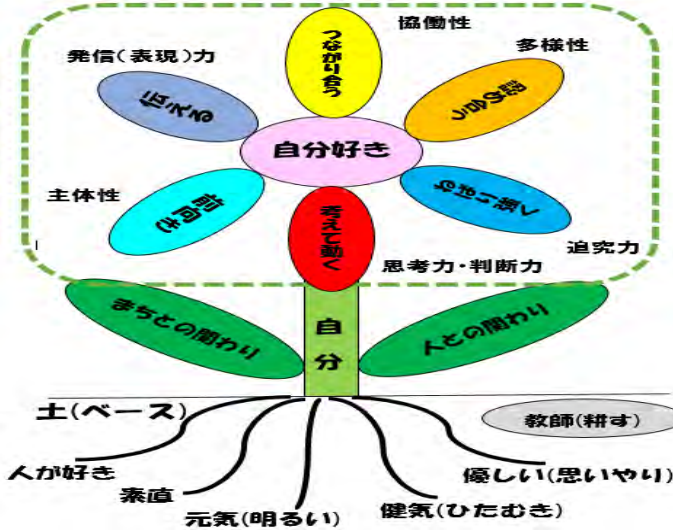
□学校教育目標 **生き生き日枝っ子**

ESDを通して育成したい資質・能力

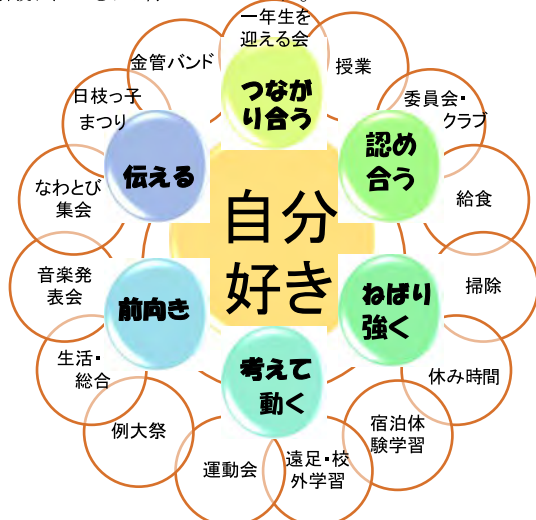
学校教育目標からおろしてきた、つながり合う力（協働性）・認め合う力（多様性）・粘り強さ（追究力）・考えて動く力（思考力判断力）・前向き（主体性）・伝える力（発信力表現力）

ESDの実践内容 Activity

下の図は日枝小学校の学校教育目標「生き生き日枝っ子」を具現化させるために年度の始めに全教職員でワークショップをして作ったイメージ図です。
学校教育目標「生き生き日枝っ子」のイメージ図



花びらにある6つの能力を育てることによって、自分好き（自尊感情の高い）子に育つとしています。さらに、その能力も学校での教育活動のみで育てるのではなく、これまで培った能力を活用しながら、まちや多様な人との関わりによって育てていくイメージをもっています。児童・保護者・学校運営協議会でも共有しています。



ESDの取組は、すべての学校教育活動を通じて行っています。授業のみならず、様々な行事、地域とつながって行う生活科や総合的な学習の時間、日々

の給食や委員会活動などです。左下のホールスクールの図は立体的であると捉えています。ESDを通して育む資質・能力は、様々な活動の中で育てられ発揮していきます。特に、生活科や総合的な学習の時間を通じて行われています。

1年生2年生は生活科の年間カリキュラムを通して資質能力の育成に励んでいます。3年生以上は、クラスの子も達と教師で選んだ材をもとに、総合的な学習の時間を立ち上げます。それぞれの探究課題を通して、資質・能力の育成に励んでいます。

＜各学年単元名及び探究課題＞

個別支援学級「ヒエンジャーズメーターMAX 育ちの森」
 探究課題 身近な自然環境、環境保全に取り組んでいる人々の思いや願い

3年1組 「日枝のまちを花でいっぱいしよう」
 探究課題 まちづくりや地域のために取り組んでいる日枝の町の人々や組織、その思いや願い

3年2組 「3-2 にここおりがみ製作所」
 探究課題 まちの子どもたちのために折り紙を通して仲良くなろうとする人々の思いや願い

3年3組 「まちにえがお33 ウォールアート大作戦」
 探究課題 学校づくりやまちづくり、地域活性化のために取り組んでいる人々の思いや願い

4年1組 「水でつながる七色世界41」
 探究課題 日本と発展途上国における水と衛生の環境、それに関わる人々の思いや願い

4年2組「ぼいすて NG！プラスチックごみゼロ大作戦」
 探究課題 身近な自然環境や環境問題、環境保全に取り組んでいる人々の思いや願い

4年3組 「石けん作りでリサイクル！まちもえがおに4-3！」
 探究課題 廃油石鹸作りを通して自然や環境を守っていかうとする人々の思いや願い

5年1組 「目指せ！日枝小PC！～同窓会の方と共に～」
 探究課題 学校づくりや地域活性化のために取り組んでいる、日枝のまちの人々の思いや願い

5年2組 「開館！スマイル図書館！」
 探究課題 本の魅力を伝えるために取り組んでいる日枝のまちの人々や組織、その意義や連携

5年3組 「まちを元気で笑顔に パラスポ発信隊」
 探究課題 スポーツを通して地域活性化のために取り組んでいる人々の思いや願い

6年1組 「めざせ 虹の鬼ごっこマスター ～鬼ごっこでまちをえがく～」
 探究課題 鬼ごっこの継承やそれによるまちの活性化に努める人々の意義

6年2組 「中村橋商店街応援プロジェクト」
 探究課題 まちづくりや地域活性化のために取り組んでいる日枝のまちの人々や組織、その意義や連携

6年3組「ようこそ！ひえまち喫茶」
 探究課題 まちづくりや地域活性化のために取り組んでいる日枝のまちの人々の思いや願い

また、2割の外国につながる子どもたちのために、国際教室でも常に自分を好きになる子どもへの教育

を目指しています。その言葉の壁を乗り越え、交流級でも生き生き活躍できるように支援しています。

さらには事務室や図書室でも SDGs への興味関心を高めるために工夫がなされています。

【事務室前の受付】

事務職員が管理している場所ですが、子どもたちがよく通る廊下に面しています。黒板には FSC のマークを掲げ、何のマークか問いかけています。

図書室のコーナー



事務室前受付

【図書室の中】

学校図書館司書が中心になって図書室の中に SDGs のコーナーを作っています。図書室は大きな発信場所になっています。

ESDによる変容の視覚化の手法

様々な体験活動を通じ、子ども達は日々変容しています。子ども達の自由学習ノートには、「僕たちがやっている活動は SDGs で言えば 12 番と 14 番、15 番。特に僕は 14 番にとってもきょうみがある。プラゴミを魚が食べるかもしれないから、それをふせぎたい。」と記しています。

水について学ぶ子ども達は、冷房の室外機から出される水のため、育てている植物への水遣り活動を行いました。ま



「将来もずっと使っていけるようにしていきたい。」「そのために自分たちができることを考えたい。」と発言していました。交流することを通して、水の価値について考え、日常のあたりまえが



あたりまえでないのではないかと、思いを深めていました。

廃油石鹸について学んだ子ども達は、捨てられる廃油から自然に優しい石鹸を作る意義について学びました。また、自らも石鹸作りにチャレンジし、その難しさに触れ、物の価値を体感し、環境に良いものが市場に出回りにくいわけと、ものの価値と値段について考える姿が見られました。わからないこともあるけれど、考え続けたいと振り返る子どもの姿が見られました。



また、海外の環境問題や日本の山奥にポイ捨てされているゴミなどについて、持続可能を意識する大人の環境絵日記に触れ、自分たちも生き物の一つだから、人間だけでなく生き物全体について考えなければいけない。もっと SDGs を周りの人にも広めたほうが良い

と円形ホワイトボードに記していました。

エコプロではステージに立ち、ビニル傘が年間1億2千万本もポイ捨てされている現状について、作る側も使う側も考えなければいけないことであって、これは SDGs の 12 番につながると訴えかける姿が見られました。



変容から捉えるESDの良さと今後の展望

ESD の変容を見るための具体的な方法などは試行錯誤中です。しかし、子ども達から SDGs に触れる発言等が増えるとともに、学びに対しての興味関心が広がっています。また、教職員でプロジェクトチームを作り、SDGs サーベイの開発にも取り組んでいます。この SDGs サーベイは子どもの SDGs に対する意識を可視化するアンケートであり、子ども達のこの先の活動につながっていくと考えます。また、教職員の学びにもつながっていきます。今年度は2月末から3月に実施予定。来年度は年度当初と年度末に行い、子どもの変容を可視化するツールの一つにしていきたいと考えています。

9 横浜市立恩田小学校

学校教育目標

「自ら学びともに豊かな生活を創り出す子どもの育成」

～思いやり すすんで行動 だれとでも協力 恩田の子～

ESDを通して育成したい資質・能力

- ・多面的・総合的に考える力
- ・コミュニケーションを行う力
- ・他者と協働する態度
- ・つながりを尊重する態度
- ・進んで参加する態度

ESDの実践内容 Activity

総合的な学習の時間・6年

【学校リニューアル大作戦】

SDG s 目標 ⑪×⑫×⑧

＜単元目標＞

自分たちが通った学校を修繕したり、きれいに整えたりする活動を通して、感謝の心を大切に育てる。また、様々な職種の方をゲストティーチャーとして迎え、その人の生き方や経験を知り、将来の自分に必要なことを実践していこうとする心情を育てる。

ESD 視点

＜構成概念＞ V連携性

「答えのない問い」に立ち向かうために、学習を通して視野を広げ、様々な人たちと協働することができる持続可能な社会の構成員になることが重要であるということを気付かせる。また、謙虚な心を持ち、自分と異なる意見や立場を大切にしてい進めた。

＜能力・態度＞

- ②未来像を予測して計画を立てる力
- ③多面的・総合的に考える力

自分たちの活動に対して、無計画に進めるのではなく、他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てたり、役に立たないものは不要だと考えるのではなく、資源になると捉えたり、様々

な物事を関連付けて考えてきた。

具体的な活動

- ① タブレット端末を持って校内を観察し、現状を把握



- ② 自分たちの思いや願いの確認

- ③ 児童や教職員へのアンケート実施(実態把握・自分たちの思いや願いとの比較)



- ④自分たちの活動への価値づけ

『学校リニューアル大作戦』本格始動
○階段の段差(壁)を活用し、学びへの意欲付け
九九・地図記号・理科実験器具などの表示をPCやタブレット端末を使って作成。取り付ける際には、ラミネートをし、強力な両面テープで固定。作成したデータを残し、ボロボロになってしまったときには、貼り替えができるように準備。SDG s ⑫つくる責任・つかう責任を意識した活動。環境委員会に引き継いでもらうように提案書(依頼書)を作成。
○亀裂の入った壁を修繕し、恩田小学校をきれいにして、よりよい空間へ(環境づくり)
→ゲストティーチャー：港北塗装組合
授業参観・懇談会のある日に作業日を設定することに。保護者や教員へ、作業のお知らせとともに、動線について考え提案を行う。作成は、タブレット端末やPCを活用する。

○昇降口のステンドグラスづくりをして、過去と現在、未来をつなぐ（創立以来、誰も手を付けてこなかった場所をリニューアル）

→ゲストティーチャー：広告美術

まずは、掃除をする。
新聞紙を使って、きれいに磨き上げる。



先輩たちの作品の想いや願いを想像し、自分たちの想いや願いをのせる。（制作当時のことを覚えている卒業生がいなかったため）

【1】ビオトープ



【3】教室



【2】図書室



【4】裏門



⑤活動したことを学校に発信する

【1】ビオトープ



【3】教室



【2】図書室



【4】裏門



⑥ゲストの生き方に学び、自分の将来につなげる

⑦自分の将来像（なりたい自分）を卒業感謝の会で発表する。

ESDによる変容の視覚化の手法

「SDGs 17の目標につながる活動についてのアンケート」の実施

本校は重点研究として、「自分の思いや願いをもって、身近な課題に主体的に取り組む子どもの育成～つながりを大切に、学びを自分事とする生活科・『横浜の時間』の学び作りのあり方～」をテーマに、生活科及び『横浜の時間』の

学習で、ESDの視点をもった授業研究を進めてきた。また、今年度は、校内の委員会活動でもSDGs 17の目標とつながる活動を展開することで、より児童の日常に関わる取組を進めることができた。

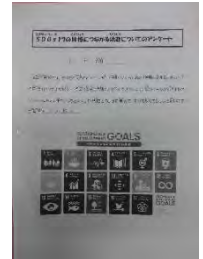
こういった活動を進めてきたことで、児童の中に、どのような変容があったのかを探りたいと思い、全校児童にアンケートを実施した。

SDGs 17の目標につながる

活動についてのアンケート

<アンケート項目>

- ①：SDGs 17の目標について知っていますか？
- ②：学校の中に、SDGsのマークがはってあるのを知っていますか？
- ③：学校の中に、SDGsのマークがはってあることで、自分の気持ちや行動で変化したことはありませんか？
- ④：授業で、SDGsに関する学習をしたことがありますか？
- ⑤：それはどんな授業でしたか？
- ⑥：その学習で、嬉しかったことや楽しかったこと、できるようになったことは何ですか？
- ⑦：その学習をしたことで、自分の気持ちや行動で変化したことはありませんか？
- ⑧：すべての人々にとってより良い世界をつくるため、今の自分に出来ることで、何かやってみたいことや興味のあることはありますか？



変容から捉えるESDの良さと今後の展望

アンケートを実施してまず実感したことは、学年を問わず、持続可能な社会づくりに対する興味や意識が向上しているということである。委員会活動による校内の掲示物等から興味をもった児童も多く見られた。

また、ESDの取組を3年間経験してきた6年生からは、項目⑥の回答として、「みんなと協力することで、難しい問題も解決できた。」「小さな積み重ねにより、世界を変えられるのは嬉しい。」といったものや、⑦の回答として、「今まで考えなかったようなことに取り組むようになった。」「以前よりも他人の意見を取り入れるようになった。」といった回答が複数見られた。

これらは、ESDを通して育成したい資質・能力の『多面的・総合的に考える力』や、『他者と協働する態度』、『つながりを尊重する態度』につながるものであり、本校の教育目標の中にある、『ともに豊かな生活を創り出す子ども』の姿にも通じるものである。ESDに取り組んできたことで、本校が目指す子どもの姿が日常の中で見られるようになってきたことは、大きな成果だと感じている。

ESDで育ってきた子どもたちが、これからの世界をより良いものに創り上げていってくれることを期待している。

10 横浜市立港南台第三小学校

□学校教育目標

夢・夢中・共に輝く
心豊かな子

ESDを通して育成したい資質・能力

- ・ 思いや考えを表現する力
- ・ 身近な事象に積極的に関わる態度
- ・ 持続可能な社会の創造に貢献しようとする態度

ESDの実践内容 Activity

○委員会活動の話合いやふり返りの充実

主体的、協働的に委員会活動に取り組めるように、年間計画作成時に SDGs を選択し、各委員会での取組をふり返り、自分たちの言葉で SDGs を位置づける活動を設定した。

○総合的な学習の時間を核とした教科等横断的な学習展開

6年（総合的な学習の時間・理科）

「目指そう！プラスチックスマート港南台」

「生物のくらしと環境」

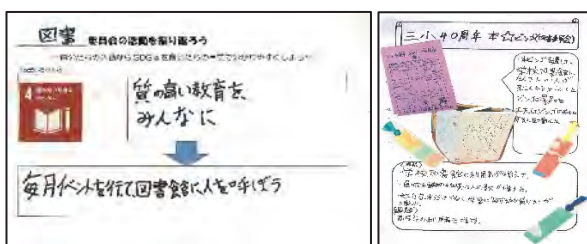
「持続可能な社会づくり」の構成概念・ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度を明確にした学習展開を行った。

理科の学習においても、評価規準の中に構成概念、能力・態度を位置づけ、授業での発言やふり返りを通して個の変容を見とるようにした。

ESDによる変容の視覚化の手法

○委員会活動の話合いやふり返りの充実

SDGs は地球規模の問題なので、具体的な活動を設定し、実践するようになった。また子どもたちの言葉で SDGs を捉え直すことで、次の活動の見通しをもつことにつながることができた。



○総合的な学習の時間を核とした教科等横断的な学習展開

<ESDの視点を明確にした単元構想>

単元名：プラスチックスマート港南台	
授業内容：プラスチックに関する問題を自らの課題として捉え、プラスチックを減らす工夫や努力の方法について議論する。	
関連するSDGs	SDGs12 つくる責任つかう責任 SDGs13 気候変動に具体的な対策を SDGs14 海の豊かさを守ろう
持続可能な社会づくりの構成概念	連携性 責任性
ESDの視点に立った学習指導で重視する能力	批判的に考える力 多面的・総合的に考える力
ESDの視点に立った学習指導で重視する態度	進んで参加する態度

単元名：生物のくらしと環境	
授業内容：酸素や二酸化炭素に着目しながら地球の未来像を予測し、持続可能な地球環境について考え、議論する。	
関連するSDGs	SDGs13 気候変動に具体的な対策を SDGs14 海の豊かさを守ろう SDGs15 陸の豊かさを守ろう
持続可能な社会づくりの構成概念	相互性 責任性
ESDの視点に立った学習指導で重視する能力	未来像を予測して計画を立てる力 多面的・総合的に考える力
ESDの視点に立った学習指導で重視する態度	つながりを尊重する態度

自分達にできる解決方法について考える場面

連携性・責任性の向上

学習評価の視点として、構成概念、能力・態度を位置づけることで、単元で身につけたい資質・能力を明確にすることができた。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

ESDを学習に取り入れることによって、子どもが SDGs につながる問題意識を高め、課題解決に向けて構成概念に着目し、思考する姿が見られた。児童会活動を軸とした ESD の取り組みを学校全体に広げるべく、カリキュラムの改善を図る。

11 横浜市立太尾小学校

□学校教育目標

豊かに学び ともに未来をひらく 太尾の子

ESDを通して育成したい資質・能力

＜持続可能な社会の創造に貢献する力＞

＜問題発見・解決能力＞

＜言語能力＞

ESDの実践内容 Activity

【6年生(学級ごと全員)】

- SDGsを意識した国際平和スピーチの取組。
- 日本の食文化や竹細工、防災学習など、総合的な学習の時間での取組。

【5年生(1学級)】

- 企業の「服のチカラ」プロジェクトを中心とした、エコや節約につながる学習の取組。



【4年生(1学級)】

- 鶴見川の生き物を考えたビオトープ整備の活動を中心とした取組。



【3年生(1学級)】

- 学区商店街とタイアップした、地域理解やイベント協力などの取組。

【全校児童(10/18~24)】

- 横浜カーボンオフセットプロジェクトに参加。

ESDによる変容の視覚化の手法

- 取組前・後に児童と担任が、6つの構成概念と7つの能力・態度などについて自己評価した。

＜評価アンケート(児童用)＞

いつまでもみんなが幸せに暮らせる社会につながる学習を自分で評価しよう～		年 級	番 氏 名
【学習テーマ】	学習の(前期・後期)	月	日
いつまでもみんなが幸せに暮らせる社会につながる問題の解決にむけて大切にしたい考え			
1	いろいろなこと(多様性)	3	2 1 0
2	関わり合ってること(相互性)	3	2 1 0
3	限りがあること(有限性)	3	2 1 0
4	一人ひとり大切にすること(公平性)	3	2 1 0
5	みんなが幸せにできること(連帯性)	3	2 1 0
6	役割や責任をもつこと(責任性)	3	2 1 0
		合計(0~18)	
		平均(合計÷6)	
今の自分ができること			
1	批判的に考えること	3	2 1 0
2	未来像を予測して計画を立てること	3	2 1 0
3	力を合わせるということ	3	2 1 0
4	コミュニケーションを行うこと	3	2 1 0
5	他者と協力すること	3	2 1 0
6	つながりを尊重すること	3	2 1 0
7	誰かに参加すること	3	2 1 0
		合計(0~42)	
		平均(合計÷7)	

- 6つの構成概念と7つの能力・態度については、児童にわかる言葉に変えるなどの工夫をした。
- 取組前・後の自己評価からは、偏りが見られたものの、児童のできることや意識の変容(成長)を見取ることができた。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

- ESDに取組むことで、多くの児童が「自分とは関係がない」と思っていた社会の大きな問題について「自分とのつながり」を考えることができ、視野が広がったようだ。また日頃から、これらの問題を解決するために「自分にできること」を意識する児童が増えてきた。
- 今年度は主に総合的な学習の時間で取り組んできたが、これからはより多くの教育活動において実践していきたい。

12 横浜市立荏田西小学校

□学校教育目標

◇心豊かにかかわり、互いに高め合いながら学び続ける子に育てます◇

- 知 課題解決に向け、自ら学びねばり強く取り組むことができる子を育てます。
- 徳 善悪をきちんと判断し、正直に生き感謝の気持ちをもてる子を育てます。
- 体 命を大切にし、豊かな心と健康な体を育んでいく子を育てます。
- 公 人や自然、荏田西のまちを大切にし、思いやりをもって進んでかかわる子を育てます。
- 開 様々な人とのコミュニケーションを通し、視野を広げ、考えを深める子に育てます。

ESDを通して育成したい資質・能力

現代社会における課題の解決に向けて、地域の人や友達と協力しながら、社会に主体的に働きかけようとする子どもの育成。

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○感じたことを言葉にする力【言語能力】 ○家族や友人を愛する気持ち【グローバルの中で生きる力】 ○身近な事象に積極的に関わろうとする態度【持続可能な社会の創造に貢献する力】
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ○互いの考えの違いに気付き、自分の考えを伝える力【言語能力】 ○他者の考えや思いに対する受容性や協調性【グローバルの中で生きる力】 ○自然や文化に感動し、思いや考えを表現する力【持続可能な社会の創造に貢献する力】
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを深化させ、他者に的確に分かりやすく伝える力【言語能力】 ○人々と協働・協調するコラボレーションする力【グローバルの中で生きる力】 ○リーダーシップを発揮し、考えを出し合って新提案する力【持続可能な社会の創造に貢献する力】

ESDの実践内容 Activity

本校では、ESDを通して育成したい資質・能力を育むために、今年度から委員会活動でSDGsを取り入れて活動してきた。昨年度と変更したことは、SDGsを取り入れた振り返りカードを使用したり、教員が委員会活動とSDGsの関わりを話し合い、ねらいを決めたりして取り組んできた。また、児童が今までの委員会活動を振り返り、SDGsとどのように関わっていたのかを話し合いながら、活動の意味を考え活動してきた。本校での委員会活動の具体的な例を挙げる。

○図書委員会

SDGsと関わりのある本の紹介やポップの作成



○情報委員会

SDGs新聞の作成、朝会でのSDGs紹介、SDGsの解説付きポスターの作成



○国際交流委員会

オーストラリアの姉妹校の交流、SDGsポス

ターの作成

- 保健委員会
 - 安全マップの作成、けが防止のためのリズムジャンプ運動の推進
- 給食委員会
 - 残食の量を減らすための取組、保健委員会と合同で健康に関することを全校に向けた紹介

ESDによる変容の視覚化の手法

いつまでもみんなが幸せに暮らせる社会につながる問題の解決に向けて大切にしたい考え		達成している	達成している	達成している	達成している	
1	いろいろなこと(多様性)	○自分と違う考えがあることに気付いた。自分と友達にはちがうところがあると気付いた。	3	2	1	0
2	関わり合っているということ(相互性)	○地域の人や友達と協力しながら活動しようとした。友だちと進んだり、勉強したりするよきことがあることに気付いた。なにかしらの助けや協力を受けようとした。	3	2	1	0
3	限りがあるということ(有限性)	○本来のことを考えて活動に取り組もうとした。使うものには、限りがあることを意識して活動しようとした。水や食べ物等を大切にしたり、時間を守って生活しようとした。	3	2	1	0
4	一人ひとり大切にすること(公平性)	○自分や友達、地域の人の意見を大切にしようとした。友達に優しく話しかけたり、進んだりしようとした。	3	2	1	0
5	力を合わせることに(連携性)	○みんなが幸せに生活できるように協力しようとした。意見が対立しても、それぞれの立場を考慮して話し合おうとした。	3	2	1	0
6	役割や責任をもつということ(責任性)	○自分で考え、自分から進んで活動しようとした。委員会活動の自分の仕事に、人生にせよ責任をもって取り組もうと意識した。そのご担当や、担当業務のやり取り関係にこの大切さに気付いた。	3	2	1	0

今の自分ができること		よくできている	できている	できている	できている	
1	批判的に考えること	・友達や考え、本やインターネット、テレビなどの情報を「本当かな？」と自分なりに考えたり、他の方法でも調べたりすることができる。	3	2	1	0
2	未来像を予測して計画を立てること	・自分で調べた情報をもとにして、進んで課題の解決方法を考えることができる。	3	2	1	0
3	多面的、総合的に考えること	・課題に対して、見通しをもち、目的や目標をもって計画を立てることができる。	3	2	1	0
4	コミュニケーションを行うこと	・関わりの人ができるように受け止めるかを考えながら、計画的に行動することができる。	3	2	1	0
5	他者と協力すること	・何かについて考えるとき、いろいろな視点や立場から考え、今までに学習してきたことと関連付けることができる。	3	2	1	0
6	つながりを尊重すること	・自分や考えや思いを分かりやすくまとめて友達に伝えることができる。	3	2	1	0
7	進んで参加すること	・自分の考えや意見を聞き、考えや意見を聞き取り入れて自分の考えを深めることができる。	3	2	1	0
8	役割や責任をもつこと	・友達の話し合い、助け合いなどから活動することができる。	3	2	1	0
9	相手の立場や状況を理解すること	・自分の立場や状況を理解して、前向きな行動をとることができる。	3	2	1	0
10	自分からいろいろな人と進んでかかわること	・自分からいろいろな人と進んでかかわることができる。	3	2	1	0
11	人はいろいろなもの(自然、文化など)がつながって生きていることを理解して行動することができる	・人はいろいろなもの(自然、文化など)がつながって生きていることを理解して行動することができる。	3	2	1	0
12	自分の役割を理解し、進んでクラス・学年・学校のために行動することができる	・自分の役割を理解し、進んでクラス・学年・学校のために行動することができる。	3	2	1	0

ESDによる変容を見取るために、本校で目指す資質・能力に沿って、児童自身が評価できるアンケートを作成した。視点に沿った具体的な行動も示して児童が理解しやすいように工夫した。

	よくできている	できている	できている	できている
関わり合っているということ(相互性)	70	54	8	0
限りがあるということ(有限性)	51	59	20	2

6年結果一部抜粋
(11月時点)

アンケート結果から、相互性に関わることを意識して活動していることが分かった。課題としては、地域の実態もあるが、物事の有限性の意識が低いことも分かった。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

一年間の委員会活動で、児童は自分たちの生活とSDGsの関わりが深いということが分かってきている。そして、ESDの良さは、児童の振り返りから「自分たちの生活を変えてみたい。」「他国でボランティアをしてみたい。」「他国でボランティアをしてみたい。」「他国でボランティアをしてみたい。」など自分の行動の変容を児童自身が感じることができていることである。アンケート結果から分かる課題を委員会活動や教育活動全体で改善出来るようにしていきたい。

13 横浜市立中和田中学校

□学校教育目標

自ら学び、自他を大切にして、社会に貢献する生徒

を育てます。



ESDを通して育成したい資質・能力

今年は、健康に生きていくために「睡眠・食事」について理解し、日頃の睡眠のとり方や食事のとり方を見直す活動を通して、主として次のような資質・能力を育成する。

- ・意思決定したことを実践し続けていくために必要な行動の仕方（知・技）
- ・自己の課題を見だし、解決方法を見通し考え、話し合う力（思・判・表）
- ・将来にわたって自他の健康で安全な生活を送ろうとする態度（主体的な態度）

ESDの実践内容 Activity



令和元年度は、活動テーマを「睡眠」にしました。いきなり、「睡眠」について、学ぶということではなく、まずは「和中生元気大作戦！」と題し、1日の生活のリズムや睡眠・運動・食事について日本体育大学教授 野井真吾先生をお招きし、全校生徒が講演を聴きました。その中でも睡眠は生きるために必要であるということへ目を向けました。

第1回の学校保健委員会は、野井先生の講演会で話の中心にあった「睡眠」に焦点を当てました。そこで、講師として、日本体育大学大学院生の渡辺さんをお招きし、中和田中の生徒の睡眠調査結果と全国の子どもたちとを比較したりし、課題発見をしました。

次に、3年生の特別活動の時間では、生徒にこれからの生活の中で意識してほしい睡眠について、各担任の先生と保健室の先生で睡眠～元気大

作戦～という授業を行いました。まず、自己の課題を見いだす力、問題の発見・確認をし、次に、自分の課題に気づき、解決方法の話合いをしてきました。6人1グループごとに分かれて、睡眠をとらなかつた経験や、普段の寝る前にすることや、休養のとり方の意見を出し合いました。



第2回の学校保健委員会は、「食」に焦点を当て、「講師として、ダノンの管理栄養士、久保田さんをお招きし、スポーツと栄養の話や補食や分食、夜食の話をしていただき、その話をもとに課題発見をしました。

ESDによる変容の視覚化の手法



グループの話し合いやスケジュールを記入し、見直すことで自分の生活の課題を見出すことにつなげています。講演や授業を行ってから、保健室来室者数が減り、担任との会話の中で、カーテンを開けて寝てみたなど1つの行動を試してみたことや日中の食事のタイミングを分食してみたことにより、勉強や運動の質が上がったと実感したことが声に上がってきました。今後は、コミュニケーションをとり、対話の中で次の課題を見つけることに取り組みます。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

年間を通して様々な、教科や行事とつなげることで、関連性を見直し、振り返ることができるようになります。学校だけでなく、地域や社会にもひろがった取組につなげていきます。

14 横浜市立南本宿小学校

□学校教育目標

輝けいのち のぼそう力 みんな大好き 南本小

ESDを通して育成したい資質・能力

周りの人々や環境に積極的にに関わり、持続可能な社会のために自分の考えを進んで表現できる力

ESDの実践内容 Activity

①南本フェスティバル2019（全校）

毎年の学校行事である教育水田活動の収穫祭（フェスティバル）を12月に行った。今年度の学習会では、各学年で「教育水田と里山」をテーマにして話し合った。2年生では、教育水田と、その周囲の生き物との関係を知り、里山に棲む生き物にとって田んぼが重要な役割を果たしていることを理解した。また、6年生では、里山の土地利用について知り、里山を守ることは教育水田活動を持続可能にするためにも大切であると実感した。また、里山では生き物、植物、人々の生活が循環していることや、水田が生物多様性に貢献していることについても学んだ。

②インドを軸にしたSDGsの学習（5年）

担任の海外派遣をきっかけにして、インドの調べ学習を行った。その時点ではSDGsへの広がりが見られなかったが、現地の資料や話を通して子どもたちは関心を深めた。そして、SDGsの各目標のランキングについて、インドの方の答えと比較することで、それぞれの国が抱える課題を解決するために努力することの大切さに気づき、“Think globally”の視点の獲得へとつながった。また、国語の学習では、意見文のテーマとしてSDGsを設定し、各目標の達成水準について論じた。

③ダンボールマスターになろう！（3年）

学校図書館で使えるものをダンボールで作る活動をしている。理科で学んだSDGsを生かし、様々な視点から自分たちの活動について考えた。

ESDによる変容の視覚化の手法

【ワークシートの活用】

フェスティバルの学習会では、各学年に応じたワークシートを作成して学習に用いた。2年生では、夏に行ったプールでのヤゴ取りを扱うことで、ただ「ヤゴが捕まえられる」という事実を理解していた状態から、ヤゴと水田とのつながりに対する言及する姿への変容を見取った。6年生



では、全学年を通して行ってきた教育水田活動と里山との関係をワークシートで振り返ることで、里山を守るこの意味をSDGsの観点から考えている様子を把握することができた。

【マッピング分析】

インドについての学習の前後で、同じ「インドの交流」というテーマでマッピングを行った。それらの全体項目数や階層数などを比較する分析を行った。特にSDGsに関わる項目数については2.7倍となっており、子どもたちがSDGsに関するより多くの視点を獲得し始めていることが確認できた。

【単元を貫く問題意識の設定】

国語の意見文において、単元を貫く問題意識として「SDGs」を設定したことで、各目標に対する達成水準についての認識の変容を、導入とまとめの段階で比較することができた。

【行動の比較】

3年生の理科において、複数の単元でSDGsにふれていくことで、子どもたちの変容が、休み時間の遊び方として虫調べを行う子どもたちの姿として見られるようになった。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

各教科等で、「SDGsで考えると」というつぶやきが多く聞かれるようになった。各教科等と、SDGsとのつながりを見つけやすいというのが、ESDを考える上での良さと言える。今後も意図的・計画的・弾力的に授業にSDGsを取り入れていくべきであると考えます。

15 横浜市立みなとみらい本町小学校

□学校教育目標

「みな」と「みらい」を創る子

ESDを通して育成したい資質・能力

- 「多様性を認める」
- 「多面的・多角的に物事を捉える」
- 「問いを見い出して学び続ける」
- 「まちに愛着をもつ」
- 「豊かな心をもつ」

ESDの実践内容 Activity

I ESDを軸とした「スクールマネジメント」

(⇒ ホールスクールアプローチ)

小学校学習指導要領において、「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられており、本校でも環境、平和や人権等のESDの対象となる様々な課題への取組をベースにしつつ、環境、経済、社会、文化の各側面から学術的かつ総合的に取り組むこととした。そして、世界を変えるための17の目標SDGs達成に向けて、子どもたちの発達段階に合わせ、地域の課題と関連付けて取り組んできた。

II 持続可能な社会の担い手を育てるための

「カリキュラムマネジメント」

地域特性を活かし、豊かな外部リソースを活用した教育活動の実践を目指した。生活科・総合的な学習の時間を中核とし、教科横断的な学習(教科ベースから能力ベースへ)で推進する課題解決型の学習を進めた。

生活科では、学習活動とSDGsを関連させながら、身近な生活やまちから課題を見出したり、友達と協働して解決に向かって取り組んだりして、できることから行動しようとする資質を養うことを目指した。そして、持続可能な社会の担い手の素地を養うことを目指してきた。

例えば、2年生では給食室などで廃棄される野菜の切れ端を用いた「再生野菜」に取り組み、自分たちの生活を豊かにしようとしていた。

総合的な学習の時間では、自ら見出した課題解

決に向けて、試行錯誤しながら粘り強く追究し、発展的な課題解決学習を進めることで、社会参画しようとする資質の育成を目指した。また、相手意識をもち共感的に見たり聞いたりして、自分と異なる他者と協働しながら、よりよい未来の在り方を考えようとする資質の育成を目指した。

例えば、各学級において海洋教育やパラスポーツ等で体感したことから、まちや生活をよりよくするために行動できることを考え、『『みな』と『みらい』を語る会』で保護者・地域に発信した。まちや海的环境から海洋プラ問題を捉え、ウッドストローを広める活動を推進するなど、Think Globally Act Locally を実践することができた。

ESDによる変容の視覚化の手法

ロジックモデルを用いたプログラム評価

包括的と言われるESD/SDGsの達成度合いを測るために、より具体的な活動(資質・能力)を明らかにした指標を作成し、カリキュラムマネジメントに活かすこととした。

そこで、先述したESDを通して育成したい5つの資質・能力に向けて、「子ども」「地域」「保護者」「教職員」がそれぞれ何をすべきかを明らかにしたロジックモデルを作成した。

また、ロジックモデルの文言とリンクしたアンケートを児童・地域・保護者・教職員それぞれに実施し、本校が取り組むESDの達成度や理解度を図ることとした。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

アンケート結果を分析してみると、子どもたちはESDを通じた学びに楽しさを感じていることが分かった。検証することを通して、何が身に付いたかを実感させていきたい。

また、保護者・地域にもロジックモデルを提示することで、ESDの中身を共有し、さらなる協働を図っていきたい。

16 横浜市立新治小学校

□学校教育目標

ひびく心 はずむ体 みつめる目

ESDを通して育成したい資質・能力

- ・自ら学び、主体的に学んでいく力
- ・自他を大切にし、社会と関わる力

ESDの実践内容 Activity

持続可能な社会の担い手を育てるための

「カリキュラムマネジメント」

地域の特性を生かし、地域の力を活かした教育活動を実践していこうとした。生活科・総合的な学習の時間を中心に、課題解決型の学習につながるように、カリキュラムを見直していった。

生活科では、身近な生活やまちに住んでいる人々の願いや思いから課題を見つけ、協力して解決しようと取り組んだり、自分たちにできることから行動につなげようとした。

例えば1年生では、来年度入学する園児に向けて、楽しみにしていることや心配に思うことを考え、自分たちの発表を豊かにするだけでなく、園児とのコミュニケーションを大切にする活動に取り組んだ。

総合的な学習の時間では、活動をして浮かんだ疑問を解決しようと試行錯誤する中で、地域の方の協力を得て、意欲的に進めることでESDを通して育成したい資質・能力の育成を目指した。

例えば5年生では米作りの学習を通して、一つひとつの活動を行い、その活動のもつ意味を考えるだけでなく、作業を教えてくれた方の思いを知ることによって学習の幅を広げていった。自分で講師にお願いに行くことで、自ら学んでいく力につながるだけでなく、地域を見る目も変わっていった。

4年生の竹細工の学習では、学校中の児童が竹にもっと関心をもってもらうための活動を行った。いろいろな学年に竹のよさを知ってもらうためには、どのような竹細工がよいかを考え、作ってみた。安全性や遊ぶ楽しさを考えながら進める際には、外部の講師を招き、アドバイスをもらい

ながら改良を進めた。昔からある遊びと地域との結びつきをとらえ、主体的な活動につなげることができた。

ESDによる変容の視覚化の手法

ESDを通して育成したい資質・能力に向けて、子どもたちが積極的に地域の方々と関わるように、支援を行った。

11月に総合的な学習の時間の発表会を行ったが、そこに至るまでの過程で、講師となる地域の方への依頼、活動を進めるための話し合いなどを児童自身で行っていった。

その発表会でも地域の方から教わったことを十分に発揮することができ、地域コーディネーターや講師の方からの話でも交流が増えたとの評価もあり、社会と関わる力が伸びたと感じる。また、児童のワークシートによるふり返りを見ても、「ていねいに教えてくれた〇〇さんへお礼を言いたい」という言葉や、「自分たちがやった発表でみんなが喜んでくれた」などの記述が見られ、自分たちのこととして考えており、変容が見られた。

今後は、資質・能力への到達度をより客観的にとらえられるようなアンケートなども検討していきたい。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

身近な活動を通して自らを変容させる。その結果を表現できるのがESDの良さであると感じる。地域に生きる児童には積極的に取り組んでほしい課題も多い。

また、受け身になっていた学習のとらえ方を変えたり、つなぎ直したりすることで、自分の中で能動的に取り組む学習にすることにつながる。活動をよりよくしていこうとする意欲・態度を育てていくことが、児童の力になっていくことを認識しながら、今後も進めていきたい。

17 横浜市立大門小学校

□学校教育目標

大門大好き いい仲間 進んで学ぼう 元気な子

ESDを通して育成したい資質・能力

- 地域の一員としてまた持続可能な社会を創っていく社会の一員として生きようとする心
- 体験したことや学習したことを生きた知識として身に付け、課題解決に向けて行動する力
- 人との関わりの中で、多様性を認め合い、自らを高めていく力

ESDの実践内容 Activity

○生活科及び総合的な学習の時間

今年度は ESD のテーマを「地域とつながる未来へつなげる大門小」とし、各学級で具体的に ESD の視点をもたせながら生活・総合的な学習の時間に取り組んだ。

事例としては、瀬谷のまちのよさを発見し伝える写真展の開催、海洋プラスチック問題につながる使用済みの歯ブラシの回収の取組、ユニクロ・GU・地域と協力し古着を難民に届ける取組、和食のよさや食品ロスの問題への取組等、それぞれの学級で教科や行事等から課題を発見し、実際に課題を解決していく活動に取り組んできた。11月の校内フェスティバルでは、子どもたちが自分の思いをもって取り組む様子が見られた。

○農園活動

今年度から農園委員会を立ち上げ、収穫祭や毎週の農園活動等に取り組んだ。児童から SDGs を意識した発信を行い、食や環境問題等についての意識を高めながら取り組むことができた。

○児童会活動（各委員会・代表委員会の取組）

各委員会活動については、年度当初に各委員会の活動がどの SDGs のゴール達成につながるかを考えて取り組んだ。年間を通してポスターを掲示し、発信を行った。

また、校内フェスティバルに合わせ、運営委員会から SDGs 週間の取組を提案し、代表委員会でどのような行動ができるかを話し合った。水を大

切に使う、ごみを減らす等について毎日振り返りを行い、SDGs を意識する習慣づけを行った。

ESDによる変容の視覚化の手法

○生活科及び総合的な学習の時間及び農園活動

各学級で取り組んできた SDGs を意識した活動について、11月の大門フェスティバル終了時に子どもたちの達成感や意識について「友だちと協力してがんばれたこと」（人との関わりの中で自らを高めていく力）や「SDGs の活動を通して思ったことや今後がんばりたいこと」（持続可能な社会の一員として課題解決に向けて行動する力）などについてアンケートを行った。

また、活動の中で行った振り返りカードなども活用し、児童の変容を見とった。

○児童会活動（各委員会・代表委員会の取組）

SDGs を意識したためあてについて、自分自身を見つめ、自己の生活と SDGs とのつながりについて後期の振り返りを行うようにした。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

まず、SDGs のゴールを知ることで、課題意識が高まり、解決に向けて行動しようとする意欲の高まりが見られた。さらに「日本は平和だけれど、世界には難民のようにつらいことがたくさんあることを知った。今後でもできることをしていきたい。」など、自己有用感や使命感につながる姿、学習で終わりではなく、実生活で意識しようとする言葉も多く見られた。

また、様々な取組の中で地域の方々や全校児童と関わったり、協力を呼びかけたりしていく中で、感謝の気持ちをもったり人との関わりの方の良さを感じたりしている様子も多く見られた。

今後としては、どの学級も取り組めるよう教員間の情報共有や研修等の機会を増やし、共同で単元開発に取り組んでいくようにしたい。

18 横浜市立いずみ野小学校

□学校教育目標

「自分が好き、友達が好き、学校が好き、このまちが好き」

～ 心豊かに学び合い、ともによりよく生きようとする子供 ～

ESDを通して育成したい資質・能力

〈持続可能な社会の創造に貢献する力〉

〈協働して課題解決する力〉

〈思いや考えを表現する力〉

ESDの実践内容 Activity

- 40年間続いている米作りを持続可能な活動にするために、水田を貸してくださる農家の方の思いを大切にしながら、水田の面積や地域ボランティア・教職員・保護者の仕事分担を見直した。
- 本校教育課程をESDの視点から作成した。各単元や活動における主たるSDGs（SDGsとの関わり）及び構成概念、能力・態度を明示し、授業で検証を行った。
- ESDの視点による教育課程編成・他校の実践例による研修「ESDわくわくワークショップ」を開催した。
- 校内にある観察池のビオトープ化を行った。和泉川在来生物が生息する観察池を作った。また、池の中にミニ田んぼを作った。
- 人権・福祉の視点から、平和で民主的なコミュニケーションの大切さを学ぶ学習を行った。

ESDによる変容の視覚化の手法

- 教育課程に、いもと米作りの生産活動をまとめ、本校の特色ある教育課程を作成した。持続可能な活動にするために水田の面積を変えた。本年度の米作りの取組については、第5学年が全校集会で成果をまとめ発表した。その中で、自分たちの育てた稲を「一粒残らず脱穀するんだ。」という思いや、「他学年と協力して稲刈りを成功させた。」という達成感を報告した。協働して課題解決していこうとする力の大切さや、米作りを持続可能な活動として、本校の伝統にしてほしい思いを全校に発信した。

- 「ESDわくわくワークショップ」を本校で開き、ESDに取り組む4校の実践発表から教育課程作成の参考になる活動を知ることができた。博報堂の「未来を変える買い物企画Earthmall 問いかけ編・認証ラベル編」を家庭科の授業で実践し、全校に向けてポスターを作成した。普段何気なくしている買い物の仕方が、認証ラベルの学習を通して、未来の地球環境に影響を及ぼすことに気付いた。一人一人が今自分にできることを表現したポスターは、持続可能な社会の取組の一つとして、全校児童が見られるように掲示している。
- 校内の池には和泉川在来の黒メダカを放流しビオトープ化を図った。また、池の中にはミニ田んぼを作り、稲の成長を常時観察できるようにした。
- ESDの一環として、教育評論家 水谷 修先生の特級授業を企画した。将来持続可能な社会の担い手となる子供たちが、人権・福祉の視点から今大切にすべきことは何かを考え、これからの人生を大切にかつ主体的に生きていこうとする気持ちを育むことをねらいとした。本校4・5・6年生および、同じ中学校ブロックの2校の6年生を対象に行い、授業後は自分の思いを手紙に書き送付した。「命を大切にしなければいけない。」「人を幸せにできるようにがんばる。」等、持続可能な社会に貢献する力の源となる内容が多くあった。

変容から捉えるESDの良さと今後の展望

生活の様々な場面でESDとの関わりを意識し、持続可能な社会の創造に関する課題の解決に向けた、実行力を身に付けることができる。

今後の展望は、教職員一人一人がESDに対する意識を深め、教育活動の中でつながりを考えていくこと、そこから世界の課題にも目を向けていくことができるようになることである。

横浜市立西本郷中学校

校内研修

本校が取り組んできた活動を SDG s の 17 の目標に価値づけ、ゴールの姿を明確化する。小中学校企画課前田主任指導主事による講義^①を受け、**全職員**で問題意識^②を共有。

②教育課程を 17 の目標でとらえなおす。

①講義風景



教職員の取組

生徒会指導部で来年度の取組について検討
研修会での情報収集

生徒の取組

SDG s 17 の目標の周知^③

③学校のシンボルツリーに SDG s のゴール



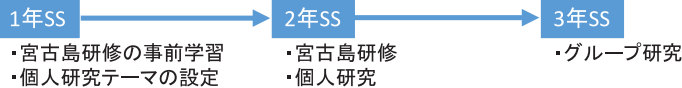
横浜市立西柴中学校

今年度は、「SDG s」という言葉自体の周知を図り、生徒には、学校で今まで行っている様々な活動が「持続可能な社会を作っていく」こと、大きな力を期待するのではなく、「SDG s の視点」を持って自分から小さな活動をしていくことが大事であることを、図書館、保健室、学校だより等で発信することに力を置いた。



横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校

総合的な学習の時間「サイエンススタディーズ」では、自然科学や社会科学を中心とした課題探究型の学習や教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習を進めている。
SDGsの17のゴールを意識し、研究テーマの設定を行い、個人研究、グループ研究に取り組む。



宮古島における課題について、SDGsの17ゴールと関連して考える。
宮古島の課題を通して、個人の研究テーマを設定する。

研究者によるテーマ設定講義 I
生徒相互によるテーマ設定ゼミ I
研究者によるテーマ設定講義 II
生徒相互によるテーマ設定ゼミ II
個人研究テーマ決定



事前のアンケート(9月)では研究テーマが漠然としていたが、講義 I、テーマ設定ゼミ、講義 II を通して発表と議論を重ね、課題の見つけ方、研究への観点や手法について明確にすることができた。

今年度は、講義 I と講義 II の間(2か月)の、生徒の研究に対する意識の変化をアンケートによって分析した。

Q. 研究テーマが明確になってきた
19.0% → 68.3%

三保小学校の実践例



<目標4>質の高い教育をみんなに

持続可能な社会づくりを担う児童の育成*

各教科及び『横浜の時間』等で進めるESDの学習内容(探究課題)例 第6版(平成31年度)

SDGs の視点	内容	学年	低学年	中学年	高学年
		具体的な内容例	生活科・学活等で	総合・各教科・学活との関連で『横浜の時間』	
 	環境*1	①生活環境	公園や緑地、川や池での活動、身の回りの放射能	川や池の汚染、空気の汚れ 放射線の影響	水の確保と循環 水源の保護、地球温暖化、放射線
		②資源・エネルギー	電気・水などを無駄にしない	資源の節約 省エネルギー	森林破壊・緑化・植林、新エネルギーの利用、原子力
		③人と自然	身近な生物とのふれあい 愛護会との交流	地域の自然の理解 生物の多様性	自然保護と保全 エコアップ、ビオトープ
		④人と社会	自分を取り巻く身近な人・もの・出来事	水・電気等の確保 地域の生産や販売	我が国の農業・林業・水産業及び工業生産と課題
		⑤生産と消費	ごみの分別と減量 地域農家との交流	地域のごみと処理 再利用・再資源化 地産地消	生産・流通・消費・廃棄 地産地消、エコラベル フードマイレージ
 	健康・安全	①健康な生活	早寝早起き	基本的な生活習慣	心身の健康 薬物の乱用と健康
		②学校安全	安全な過ごし方 通学路の遵守	危険な遊びの禁止 交通安全	自分の安全確保 不審者対応
		③防犯・防災	気を付ける場所 声かけの対応	安全マップの利用 避難訓練	防犯を含む生活安全 地域防災への関心
 	福祉	①福祉社会への理解	福祉的な心情や態度を 培う	社会福祉についての知識 理解を深める	社会実践に取り組む力を 育成する
		②福祉体験と実践	視覚障害者と盲導犬	アイマスク体験 車椅子体験	手話体験 点字体験
		③高齢者・障害者及び福祉施設との交流	地域老人会と「ふれあい給食」での交流	区内の福祉施設での交流・体験	行事への高齢者・身体障害者の方の招待・交流
	食*2	①食の重要性 心身の健康	楽しく食べる 日常の食事への関心	規則正しい食事 食事と好き嫌い	食事と心身の健康 食事が体に及ぼす影響
		②食品選択能力 社会性	食べ物の名前 食事のあいさつ	料理の種類と名前 楽しく食べる工夫	食品の安全・衛生 外国の食文化とつながり
		③感謝の心 食文化	食べ物を大切に 季節と料理	多くの人の努力と食事 行事にちなんだ料理	自然の恵みへの感謝 食事を通じた思いやり
	国際理解	①国際理解	外国の文化・習慣に親しむ	外国の文化・習慣の理解	自分の生活と外国とのつながり
		②多文化共生	異なる文化をもつ人々との交流	異なる文化をもつ人々の理解と尊重	人権・平和等の課題と自分のかかわり
	キャリア	①自分の生き方	学校で過ごす自分 学ぶことの大切さ	地域で過ごす自分 学ぶことの意味	未来の自分 学びと生活のつながり
		②他者の生き方	学校で働く人々 自分が世話になっている	地域で働く人々 他の人に役に立つ	未来の社会 世の中に役に立つ
 	地域	①町の自然・発展	町たんけん 地域を知る	地域の理解と愛着 地域発展に尽くした先人	三保の自然 三保の開発や横浜の未来
		②伝統・文化	むかし遊び 地域の方との交流	地域に受け継がれた行事	町に残る歴史発見 地域の文化財
			低学年との接続	『横浜の時間』等内容	



三保小学校は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

*三保小学校の研究主題

*参考1: 環境教育指導資料第4集 横浜市教育委員、2008

*参考2: 食教育推進計画 横浜市教育委員会、2008

© 横浜市立三保小学校 2019

第2章

協働型プログラム評価によるESDスクール・
マネジメント実践に関する調査研究

平成 31 年度（令和元年度）

SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業：教育（学習）効果の評価・普及
横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム

協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究

報告書（理論編*）

米原 あき（東洋大学）

*本報告書は、別冊のみなとみらい本町小学校編『2019 年度 研究のあゆみ ～ESD BOOK feat.MM～』を「実践編」とする二部構成になっています。本編の実践事例の詳細は、「実践編」をご参照ください。

目次

1. はじめに——本調査研究の目的
2. 評価観の転換——ESD 評価を考える視点
3. 協働型プログラム評価とは
4. 横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
 - (1) 【P】 ニーズ評価・セオリー評価——“自分たちの” ロジックモデルづくり
 - (2) 【D→C】 プロセス評価・アウトカム評価——指標に基づくデータ収集と分析結果
 - (3) 【A】 改善に向けてのアクション——『研究のあゆみ』と全体研修による具体的改善
5. 今後の展望——教育委員会を中心とした「協働システム」と現場の当事者性

資料 I. ロジックモデル

資料 II-a. アンケート調査票(低学年用)

資料 II-b. アンケート調査票(中高学年用)

1. はじめに——本調査研究の目的

本報告書は、文部科学省『SDGs 達成の担い手育成 (ESD) 推進事業 (平成 31 年度/令和元年度)』におけるカテゴリー (3) 『教育 (学習) 効果の評価・普及』(受託者:横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム) の一部として行われた、評価に関する調査研究事業『協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究』の成果をまとめたものである。

後述の通り、ESD をはじめとする、「(具体的な教科ではなく) 教育の方向性のみを示す取り組み」の評価は極めて困難であるといわれている。SDGs の 17 ゴール・169 ターゲット・230 指標の中でも、ESD を含むゴール 4 ターゲット 7 (以下、ゴール 4.7) の指標は、国連の場でも「指標化困難」を暗示する Tier 3 と呼ばれるカテゴリーに分類されており、グローバルな議論の中でも未だ明確な評価指標が定義されていない。そもそも活動内容自体が多様で、期待される達成度も動的である、ESD のような教育活動の評価を検討する際に、従来型の実績評価の考え方を適用しようとすることに無理があるのではないか——換言すれば、従来型の評価の枠組を乗り越えて、異なるパラダイムで評価を捉え直す必要があるのではないか——本調査研究は、このような問題意識のもとに計画された。

具体的には、本報告書で後述する「協働型プログラム評価」という考え方を導入し、参加型の形成評価によって、ESD の理念をスクール・マネジメントに活用するという試みに取り組んでいる。この評価活動の目的は、児童の達成度を総括評価・相対評価することや、学校のパフォーマンスを監査することではなく、(1)ある具体的な理念・教育目標のもとにスクール・マネジメントおよびカリキュラム・マネジメントを行うための道具を提供することと、(2)学校が取り組む ESD プログラムを包括的に計画し、改善するための情報を提供することにある。本研究は、このような(1)マネジメントの道具、そして(2)改善のための情

報提供こそが、まさに「評価」と呼ばれる手続きの本質的な機能であるという考え方に立脚している。本事業のモデル校として横浜市立みなとみらい本町小学校（小正和彦校長）が選定され、現在進行形で「協働型プログラム評価」が実践されている。

本報告書の構成は以下のとおりである。まず次節にて、評価のそもそもの定義や考え方を概説し、SDGs/ESDの文脈で、評価の考え方が本質的なパラダイム転換を迫られていることを指摘する。続いて3節にて、「協働型プログラム評価」と呼ばれる評価のアプローチを紹介し、4節でみなとみらい本町小学校における実践事例を報告する。最終節では本事業の取り組みから得られた教訓を抽出し、今後の課題を整理する。また、本報告書は、みなとみらい本町小学校編『2019年度 研究のあゆみ ～ESD BOOK feat.MM～』を「実践編」とする二部構成になっており、本報告書は主として「理論編」を担っている。本報告書の実践事例の詳細については、「実践編」を参照されたい。

なお、本報告書の内容は、筆者個人の責任によって執筆されたものであり、横浜市教育委員会及びみなとみらい本町小学校の立場や考え方を表明するものではない。

2. 評価観の転換——ESD 評価を考える視点

SDGs の評価について考えるとき、ESD が含まれるゴール 4.7 に注目すると、従来の評価観との本質的な違いが端的に表れている。すなわち、MDGs などに代表される従来のグローバル教育目標は、就学率や識字率といった、理論上 100% が想定できる、測定可能な目標が掲げられていたのに対し、ゴール 4.7 は以下のように記されている。

2030 年までに、持続可能な開発と持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化、グローバル市民、および文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解などの教育を通じて、すべての学習者が持続可能な開発を推進するための知識とスキルを獲得するようにする。

この目標を評価するための指標として、以下のような指標が提案されているが、これはいわゆる Tier 3 指標と呼ばれる、「未だ定義が明確でない指標」であり、したがって具体的なデータの収集は行われていない。

ジェンダー平等および人権を含む、(i)地球市民教育、及び(ii)持続可能な開発のための教育が、(a) 各国の教育政策、(b) カリキュラム、(c) 教師の教育、及び(d) 児童・生徒・学生の達成度評価に関して、全ての教育段階において主流化されているレベル

UNESCO Institute of Statistics などは、目下、新たな複合指標の開発に注力していると言われているが、そもそもゴール 4.7 や ESD のような、100% のゴールポストが理論上存在しないような教育活動の評価を考える際に、指標をたててその達成度を測るという評価の方法のみを前提にしてよいのだろうか。

筆者はかつて、ESD 評価の難しさは次の 3 点にあるのではないかという指摘を行った(米原 2016)。すなわち、①ESD 自体の定義が明確でないため、評価指標の立てようがない、②ESD を評価したところで、それが何の役に立つのか分からない、③ESD の諸活動は学習者個人のレベルから学校や地域を含む重層的な広がりを持つが、どのレベルの評価を検討すればよいのか不明確である、という点である。これらの問題は、裏を返せば、①それぞれの主体が ESD の定義を行い、評価指標を設定する必要がある、②ESD 評価の結果が、ESD プログラムの改善に役立つような評価活動を導入する必要がある、③多様なレベルを包括する評価のデザインを検討する必要がある、ということになる。これらの点を検討するに際して、先の報告書(米原 2016)でも指摘したことだが、ここで改めて評価の原義に立ち返り、ESD 評価の本質を再考しておく必要があるだろう。

評価(Evaluation)の原義は「価値を引き出すこと(Extract-value)」にある。評価活動を通じて可視化しなければ看過されてしまうかも知れない価値を可視化し、検討可能な状態にすることが評価の本来の存在意義なのである。特に ESD 評価の場合、上述のとおり、そもそもの定義が定かでないため、学校の現場では「何をすれば ESD になるのか」が分からず混乱する傾向にある。UNESCO は 2016 年に“Unpacking sustainable development goal 4 education 2030 guide”というガイドラインを公表し、ESD の概念が各国の文脈の中で“unpack(開封)”されることの必要性を指摘しているが、多忙を極める昨今の日本の学校現場に、unpack のための機会と場が十分に確保されているとは言い難い。評価の原義に立ち返れば、「価値を引き出すこと」——ESD の文脈に照らせば、unpack すること——を、評価活動の一部として位置づけ、そこに教員や関係者の知見を結集することが、ESD 評価のスタートラインとなる。

このような形成型の評価観は、従来の事後評価を中心とする評価のアプローチの中には見られなかった志向性であるといえよう。ESD 評価を考える際の枠組みとして、事後の達成度に注目する振り返り型(retrospective)の評価観から、これからの取組みの方向性や改善の方途を模索する未来志向型(prospective)の評価観への転換が求められる。

では、(1) なんのために(評価の目的)、(2) 誰が(評価の主体)、(3) どうやって(評価の方法)、「価値を引き出す(Extract-value)」のか、以下のとおり整理しておこう。

(1) 評価の目的：総括評価と形成評価

Scriven (1991)によれば、評価の目的には総括的な評価と形成的な評価の二つがあり、総括的な評価は、ある取り組みが行われた後に実施され、その取り組みの成果を明らかにして、その取り組みに対する説明責任を果たすことを目的とする。一方、形成的な評価は、ある取り組みが実施される前あるいは最中に実施され、その取り組みの計画が十分に練られているか、あるいはどうすればその取り組みがもっと良くなるかなど、その取り組みの開発や改善に資することを目的とする。

一般に「評価」と聞くと、PDCA サイクルの「C (Check)」の段階をイメージして、前者の総括評価を思い浮かべることが多いと思われるが、それは評価の目的の一面に過ぎない。

そもそもゴールポストが設定できないような対象を評価する際には、総括的な評価よりも形式的な評価の方が、文脈に適合しやすい可能性がある。

(2) 評価の主体：評価専門家と取り組みの当事者

評価専門家が中心となって行う評価は、評価者の専門性が活かされるというメリットがあるが、一方で、第三者評価などに代表される外部評価は、内部でその取り組みに直接かわる当事者にとってはあまり有用な情報とならないことが多い。これは、外部に対する説明責任を果たすために有用な情報と、内部的な改善のために必要な情報との間に求める情報の違いがあるためである。

参加型評価と呼ばれる、評価者と当事者が協働で行う評価は、内部の事情に精通した当事者が、評価専門家の知見を活用しながら行われる評価活動で、改善に有用な情報が得やすいというメリットがある(源 2016)。その一方で、個々の対象に特化した評価情報があがってくるため、複数の対象を比較して相対評価を行うことが難しくなる傾向がある。両者はいわばトレードオフの関係にあるが、ESD の特性を踏まえると、各学校や地域の独自性・個性を尊重し、むしろその多様性を推進する必要があると考えられる。このような観点から、ESD 評価には参加型の評価アプローチが適しているといえよう。

(3) 評価の方法：ESD スクール・マネジメントとしての評価

上述の①～③の課題を踏まえると、また、上記(1)(2)の整理を踏まえると、形式的な評価を参加型で行うことによって、ESD をそれぞれの文脈で unpack し、その取り組みの改善に資する評価活動が実現できると考えられる。つまり、評価活動に当事者が参加する(2)参加型評価)ことで、①当事者にとっての ESD が定義され、同時に評価専門家の助力を得て、当事者にとって必要な評価指標を考案し、当事者にとって必要な評価情報を可視化することができる。これによって必然的に、②プログラム改善につながるような、形式的な評価活動((1)形成評価)が実現されることとなる。また、参加型で評価計画を立てる際には、次節で概説するロジックモデルなどの評価ツールを用いて、③学習者個人から学校全体、そして地域全体の取り組みまでを視野に入れた、包括的な評価デザインをつくることができる。このような評価のアプローチを「協働型プログラム評価」と呼ぶ。

本調査研究において、アクションリサーチとしてみなとみらい本町小学校で実践されているこの取り組みは、地域を巻き込みながら学校全体で ESD に取り組む当該小学校のスクール・マネジメント／カリキュラム・マネジメントを、評価活動を通じて支援しようとするものである。

3. 協働型プログラム評価とは

プログラム評価は、1980 年代のアメリカで考案され、普及した評価の考え方である(Rossi et al. 2004=2010)。取り組みの成果が予想し難い、教育や保健医療などの社会的介入プログラムを評価するための方法として考え出された(安田 2011)。プロセスにおける変化やダイナミクスに適應するため、PDCA サイクルの「C」を評価の段階ととらえる「点の評価」

とは異なり、「P」の段階から活動の流れに沿って並走する「線の評価」である(米原他 2016)。

プログラム評価には、以下の 5 つの評価段階が含まれ、これらの段階が対象となる取り組みの計画段階から実施、評価、改善への流れに沿って、一連の評価活動として機能していく(Rossi et al. 2004=2010)。プログラム評価実践の中でも、一般的な「参加型」以上に当事者との協働を重視するアプローチを「協働型プログラム評価」と呼んでいる(源 2014)。

- 1) ニーズ評価：受益者のニーズを明らかにする。例えば、「この学校の状況を踏まえると、どのような ESD プログラムが必要か」を当事者間で検討する。
- 2) セオリー評価：ニーズ評価の結果に基づき、具体的にどのようなプログラムを策定するのかを検討する。次節で紹介するロジックモデル等のツールを用いて、「自分たちが ESD を通して実現したい価値や目的(アウトカム)は何か、その目的を実現するためにどのような教育活動(手段)を行うのか」といったことを当事者間で具体的に検討し、「この学校の ESD プログラム」を可視化する。同時に、ロジックモデルに照らして「この目的や活動はどのような指標で成果を判断するのか適切か」についても当事者間で議論し、独自の評価指標を策定する。
- 3) プロセス評価：セオリー評価を通じて策定したプログラムを実行に移し、その成果を当事者が策定した指標でモニタリングする。
- 4) 効率性評価・アウトカム評価：モニタリングによって得られた評価情報を分析し、ロジックモデルに照らして改善に向けての検討を行う。効率性を重視しない性質の取り組みの場合は、効率性評価(費用便益分析など)は行われなくてもある。本取り組みにおいては、取り組みの特性に照らして、効率性評価は行わない。

4. 横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント

横浜市みなとみらい本町小学校(以下、MM 本町小学校)は、2018 年 4 月に開校したばかりの公立小学校で、6 学年 15 学級に 300 名強の子どもたちが学んでいる。開校宣言の中に「豊かな資源を活かし持続可能な社会の担い手を育む小学校として発展する」という文言が含まれている通り、開校当時から学校全体で ESD に取り組んでいる。

しかしながら、開校当時の当校には、ESD についての知見を持たない教員も多数おり、開校当初から小正和彦校長や外部の研究者などが ESD についての研修を実施していた。これらの研修と並行して行われてきたのが評価に関する研修やワークショップである。MM 本町小学校の独自性は、ESD の考え方をスクール・マネジメントやカリキュラム・マネジメントに取り入れ、全校的に活かそうとしている点にある。この点においてプログラム評価との親和性が高く、開校当初からプログラム評価の導入が検討されていた。本事業は、開校 2 年目の MM 本町小学校に導入されたものである。

(1) 【P】 ニーズ評価・セオリー評価——“自分たちの” ロジックモデルづくり

MM 本町小学校では 2018 年 4 月の開校早々から重点研究として ESD が取り上げられてきた。具体的には、「持続可能な社会の担い手を育てる小学校」として、どのような子どもたちを育てたいのか、その大きな目的（最終アウトカム）を意識化・言語化することから着手した。当事者である MM 本町小学校の先生方と、評価の支援者である筆者の協働で、何度かワークショップを重ね、学校教育目標（『みな[皆]とみらい[未来]を創る子』）と、育てたい 5 つの資質が言語化され、ホームページやフライヤーに可視化された。



写真 ワークショップの様子(筆者撮影)

当事者である先生方が自ら作成した最終アウトカムのもと、それらを実現するためのより具体的な目的（中間アウトカム、直接アウトカム）と具体的な教育活動（手段）を可視化・言語化するためのワークショップやミーティングをさらに重ね、最終的に資料 I のようなロジックモデルが策定された。ロジックモデルには以下のような 4 点の機能がある。

① 上位のアウトカムを明確化・具体化・自分事化する

ESD の上位アウトカムは抽象的な概念で示されることが多い。例えば「グローバル人材を育成する」というアウトカムは、「グローバル人材とはどのような人物か」という定義が具体的に言語化されていなければ達成不可能な目的である。MM 本町小学校では、セオリー評価を重ねる中で、「社会課題の解決に向けて行動することができる子（最終アウトカム）」、「社会に変化を起こせる子（中間アウトカム）」を育成することを教育目標として共有し、そのような子どもを育成するための手段を検討していった。上位の目標が具体化されたからこそ、ロジックモデルにある直接アウトカム 01～05 がより具体

的なアイデアとして創出され、教育目標がお題目化することなく、日々の教育活動に活かされることとなる。また、その言語化の過程が関係者の間で共有されることに重要な意義があり、関係者の間で時間をかけてコミュニケーションすることによって納得感が生まれ、目標が自分事になる。

② 上位のアウトカムと具体的な活動との関係を論理的につなぐ

ESD の教育活動は、その多様性ゆえに、個々の活動の質が高くても、学校全体・学年全体として見たときに有機的な関連性に欠けるケースが多い。ロジックモデルで全体の関連性を可視化することで、個々の活動の位置づけや意味付けが明確になり、「様々な活動の単発・やりっぱなし状況」を「異なる活動間のシナジー効果の創出」へ転換することができる。さらに、「総合学習の活動」と「遠足や運動会などの学校行事」など、種類の異なる教育活動を同じ目的に向かう手段としてみることができ、異なる手段を連携させるなど、より有機的に教育活動を計画することができるようになる。

③ 異なる当事者間のコミュニケーション・ツールとなる

ESD の教育活動は、その包括性ゆえに、学校内外の多くの主体を巻き込むことがあり得る。例えば、「PTA の活動」や「地域との協働」などの取組みについては、PTA や地域の関係者とのコミュニケーションが必要となる。ここで求められるコミュニケーションは、活動の日程などに関する単なるロジスティックではなく、どのような教育意図をもってこの活動を行おうとしているのか、この教育活動の成果をどのような目的につないでいきたいと考えているのか、といった大きな方向性についての相互理解を深めるためのコミュニケーションである。

MM 本町小学校では、学校運営協議会の場でロジックモデルを資料として配布し、学校としての ESD の取組みの共有を図った。ロジックモデルを通じて視覚的・直感的に取り組みの全貌を共有することで、PTA や地域の関係者から、「自分たちに期待されていることが分かった」といった声や、「このような活動があるならば具体的に〇〇といった機会の提供ができる」といった提案が挙がった。このようなコミュニケーションから、学校内の議論だけでは生じえなかった新たな活動がロジックモデルに付加されることも大いにあり得る（創発機能）。さらに、教育委員会や他校など外部とのコミュニケーションにおいても、各学校がどのような目標のもとにどのような活動を行っているのかを一望することができる（説明責任機能）。

④ 指標策定の基礎となる

上述の通り、ESD の評価に際しては、当事者が自分たちの価値観に従って評価指標を策定し、自らが考案した教育活動の成果をモニタリングすることが望ましい。既存の指標は「数字にしやすいもの」や「一般化しやすいもの」に偏る傾向があり、その文脈・その目的に応じた指標は、それぞれのロジックモデルに基づいて作成するほかない。ESD 評価を行う際の重要なポイントは、既存の指標にとらわれず、「自分たちが実現したい価値」をどう具体化するのかについて、関係者の間で十分に議論と考察を重ねるこ

とである。このときにロジックモデル上のすべての項目に指標を付けようとする必要はなく、レバレッジ・ポイントとなりそうなところや、相乗効果が期待できそうなところ、あるいは取り組みのコアとして大切にしたいところを焦点とすればよい。

さらに、「指標」は必ずしも既成の数値である必要はなく、記述的な指標や、主観的な指標があっても構わない。その一方で、いわゆるペーパー試験が不要・不適切ということも全くなく、ロジックモデル中の目的に照らして適切と判断されれば、例えば、「テストの点数」が知識定着を測る指標の一つとなることもあり得る。「指標が多様でありうる」という設定自体が、子どもたちや関係者に対して、「価値の物差しは多様でいい」というメッセージを発信することになると考えられる。

MM 本町小学校では、ロジックモデルをベースに様々な指標が検討され、それらをアンケート調査票（資料 II - a, b）に反映して、評価活動を行っている。

上記の①～④の機能を図示すると以下ようになる。

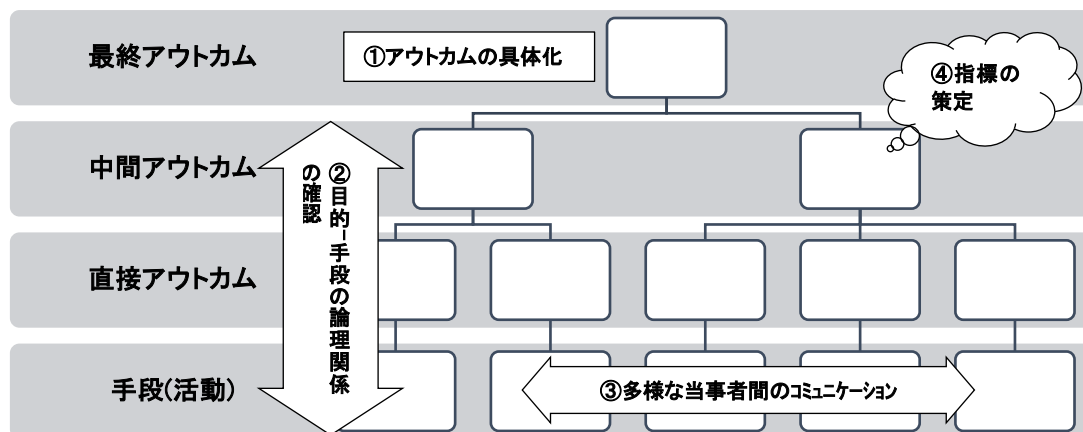


図 ロジックモデルの機能(筆者作成)

(2) 【D→C】プロセス評価・アウトカム評価——指標に基づくデータ収集と分析結果

MM 本町小学校では、資料 II-a, b に示したアンケート調査票を用いてデータの収集を行っている。そのデータを統計的に、あるいはテキストマイニングによって、科学的に分析し、エビデンスに基づくプログラム改善を実践している。上述の通り、アンケート調査票に掲載されている項目は、ロジックモデルに基づいて策定された指標であり、したがって、収集されたデータは、ロジックモデルに示されたプログラムの進捗状況をモニタリングするための情報源となる。定期的に同一のアンケート調査を行うことにより、期待する変化が実際に起こっているかどうかを、統計的な検定のもとに確認することができ、ここから、具体的な改善に資する情報提供が可能になる。2019年度の調査は以下のとおり実施された。

	第一回目調査(事前調査)	第二回目調査(事後調査)
実施時期	2019年10月23日実施	2020年1月15日実施
調査対象	低132人、中107人、高82人	低131人、中105人、高81人

第一回目調査データと第二回目調査データのうち、数値的なデータには統計分析（対応サンプルの t 検定：SPSS ver.25）を適用し、自由記述欄のテキストデータにはテキストマイニング（User local）を適用した。結果は以下のとおりである。

① 低学年アンケート（資料 II-a）の分析結果

低学年アンケートの質問 1～7 のうち、1～5 は 5 件法による主観評価である。低学年の集計結果から、事前と事後に統計的に有意な違いがみられたのは、とい 5 「おうちのひとやちいきのひとにべんきょうをおしえてもらうことがありますか」である。活動のあと、お家の人や地域の人に勉強を教えてもらっていると回答した児童は増えている。

低学年		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 p (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の標準 誤差	差の 95% 信頼区間				
					下限	上限			
とい 1	bf_q1 - af_q1	-0.096	0.664	0.092	-0.281	0.089	-1.043	51	0.302
とい 2	bf_q2 - af_q2	-0.118	1.032	0.145	-0.408	0.173	-0.814	50	0.420
とい 3	bf_q3 - af_q3	-0.154	0.849	0.118	-0.390	0.083	-1.307	51	0.197
とい 4	bf_q4 - af_q4	0.020	0.787	0.110	-0.202	0.241	0.178	50	0.860
とい 5	bf_q5 - af_q5	-0.269	1.031	0.143	-0.556	0.018	-1.883	51	0.065*

(* p<0.10)

さらに、以下の結果より、1 年生と 2 年生では回答の傾向が異なることが分かった。1 年生は活動の前後で、「違う学年の友達と、一緒に活動するのは楽しい（とい 4）」「お家の人や地域の人に勉強を教えてもらっている（とい 5）」という回答が統計的に有意に増加しており、2 年生は、「自分のめあてをもって学習した（とい 1）」「違う学年の友達と、一緒に活動するのは楽しい（とい 4）」という回答が増えている。

1 年生のみ		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 p (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の標準 誤差	差の 95% 信頼区間				
					下限	上限			
とい 1	bf_q1 - af_q1	0.100	0.788	0.176	-0.269	0.469	0.567	19	0.577
とい 2	bf_q2 - af_q2	-0.053	0.911	0.209	-0.492	0.387	-0.252	18	0.804
とい 3	bf_q3 - af_q3	-0.150	0.875	0.196	-0.560	0.260	-0.767	19	0.453
とい 4	bf_q4 - af_q4	0.474	0.841	0.193	0.068	0.879	2.455	18	0.025**
とい 5	bf_q5 - af_q5	-0.650	1.268	0.284	-1.243	-0.057	-2.292	19	0.033**

(** p<0.05)

2年生のみ		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 p (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の標準 誤差	差の 95% 信頼区間				
					下限	上限			
とい1	bf_q1 - af_q1	-0.219	0.553	0.098	-0.418	-0.019	-2.239	31	0.032**
とい2	bf_q2 - af_q2	-0.156	1.110	0.196	-0.557	0.244	-0.796	31	0.432
とい3	bf_q3 - af_q3	-0.156	0.847	0.150	-0.461	0.149	-1.044	31	0.305
とい4	bf_q4 - af_q4	-0.250	0.622	0.110	-0.474	-0.026	-2.273	31	0.030**
とい5	bf_q5 - af_q5	-0.031	0.782	0.138	-0.313	0.251	-0.226	31	0.823

(** p<0.05)

とい6「がっこうやまちのために、できることがあるとおもいますか」については、事前調査では「はい」という回答が90%（有効%）であったのに対し、事後調査では95.9%に上昇している。最後に、とい7「がっこうやまちのためにおこなったことがあるひとは、どんなことをおこないましたか」という自由記述欄については、テキストマイニング（単語の出現比率）の結果、以下のような分析結果が見られた。

名詞			動詞			形容詞		
事前：低学年 (1, ...)	単語	事後：低学年 (1, ...)	事前：低学年 (1, ...)	単語	事後：低学年 (1, ...)	事前：低学年 (1, ...)	単語	事後：低学年 (1, ...)
50	ゴミ	50	50	拾う	50	50	ひろい	50
100	活動	0	100	考える	0	100	小さい	0
58	ごみ	42	20	育てる	80	100	気持ちよい	0
100	学年	0	6	使う	94	0	楽しい	100
20	リボ	80	0	増やす	100	68	高い	32
94	参加	6	0	広める	100	0	悪い	100
0	リポページ	100	0	そだてる	100	---	---	---
58	学校	42	0	いく	100	---	---	---
0	SDGs	100	0	あげる	100	---	---	---
100	そうじ	0	0	教える	100	---	---	---
54	公園	46	0	むつ	100	---	---	---
66	きれい	34	0	すてる	100	---	---	---
28	高島中央公園	72	100	植える	0	---	---	---
0	まつり	100	69	ひろう	31	---	---	---
0	水筒	100	36	行く	64	---	---	---

事前調査の回答に比して、事後調査の回答の方が、動詞の語彙が顕著に増加している。「どんなことをおこないましたか」という「行動」を聞く質問に対して、動詞の出現比率が増加していることから、この教育活動によって低学年児童に行動変容がもたらされたことが分かる。

②中高学年アンケート（資料 II-b）の分析結果

中高学年アンケートの質問1～9のうち、問1、2、4、5-①、6～9-①②は5件法による主観評価である。中学年の分析結果から、事前と事後に統計的に有意な違いがみられたのは、問1「自分でめあてや課題をつくり、自分から学習にのぞむことができましたか

($p < 0.05$)」と問9②「友達や学年の違う人と一緒に活動することを、どう思いますか ($p < 0.05$)」である。活動のあと、自主的に学習にのぞめるようになった、あるいは、異学年の友人たちとの活動を楽しめるようになったと回答した児童が増えている。

中学年		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 p (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の標準 誤差	差の 95% 信頼区間				
					下限	上限			
問 1	bf_q1 - af_q1	0.231	0.806	0.100	0.031	0.430	2.309	64	0.024**
問 2	bf_q2 - af_q2	-0.016	1.031	0.129	-0.273	0.242	-0.121	63	0.904
問 4	bf_q4 - af_q4	-0.046	1.007	0.125	-0.296	0.203	-0.370	64	0.713
問 5①	bf_q5_1 - af_q5_1	0.081	1.106	0.140	-0.200	0.361	0.574	61	0.568
問 6	bf_q6 - af_q6	-0.078	0.783	0.098	-0.274	0.117	-0.798	63	0.428
問 7	bf_q7 - af_q7	-0.111	1.002	0.126	-0.363	0.141	-0.880	62	0.382
問 8	bf_q8 - af_q8	-0.127	0.852	0.107	-0.342	0.088	-1.183	62	0.241
問 9①	bf_q9_1 - af_q9_1	0.094	0.921	0.115	-0.136	0.324	0.814	63	0.419
問 9②	bf_q9_2 - af_q9_2	0.270	0.827	0.104	0.062	0.478	2.590	62	0.012**

(** $p < 0.05$)

一方、高学年の児童は、中学年とは異なる傾向を見せている。高学年の分析結果から、事前と事後に統計的に有意な違いがみられたのは、以下の 4 項目であった。また、高学年では、有意な変化が数多く見られたことも特徴的である。

問 2 「めあての達成や課題の解決に向かって、学習計画を立てて活動できましたか。($p < 0.1$)」

問 4 「新しい課題や方法にも、チャレンジしましたか。($p < 0.01$)」

問 7 「家や地域の人に、自分たちの活動へ協力 (参加) してもらっていますか。($p < 0.01$)」

問 8 「自分たちの活動が、まちの人や社会の役に立っていると思いますか。($p < 0.05$)」

活動のあと、上記の 4 点についてポジティブな回答をする児童が増加していることがわかる。なかでも、新しい課題や方法にもチャレンジするようになったという変化を感じている児童、そして、家や地域の人たちの協力を感じている児童は、1%の有意水準で増加しており、これらの変化が顕著であることを示している。

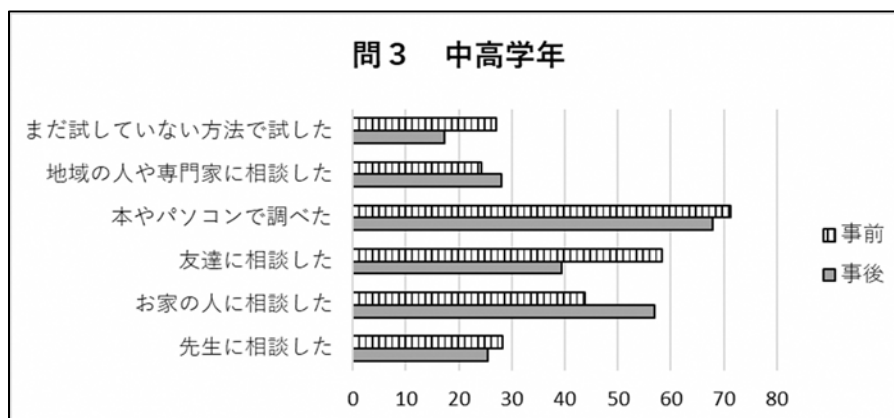
高学年		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 p (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の標準 誤差	差の 95% 信頼区間				
					下限	上限			
問 1	bf_q1 - af_q1	-0.269	0.827	0.162	-0.603	0.065	-1.659	25	0.110
問 2	bf_q2 - af_q2	-0.308	0.788	0.155	-0.626	0.011	-1.990	25	0.058*
問 4	bf_q4 - af_q4	-0.538	0.905	0.177	-0.904	-0.173	-3.035	25	0.006***
問 5①	bf_q5_1 - af_q5_1	-0.192	0.634	0.124	-0.448	0.064	-1.547	25	0.134
問 6	bf_q6 - af_q6	0.000	0.693	0.136	-0.280	0.280	0.000	25	1.000
問 7	bf_q7 - af_q7	-0.600	1.041	0.208	-1.030	-0.170	-2.882	24	0.008***
問 8	bf_q8 - af_q8	-0.385	0.941	0.185	-0.765	-0.004	-2.083	25	0.048**
問 9①	bf_q9_1 - af_q9_1	-0.231	0.815	0.160	-0.560	0.099	-1.443	25	0.161
問 9②	bf_q9_2 - af_q9_2	-0.038	0.999	0.196	-0.442	0.365	-0.196	25	0.846

(* p<0.10; ** p<0.05; *** p<0.01)

中高学年アンケートの問3では、「いろいろなことを試したり調べたりして、最後まであきらめずに学習に取り組みましたか」という質問のもと、以下の選択肢を複数回答式で選ぶ項目になっている。

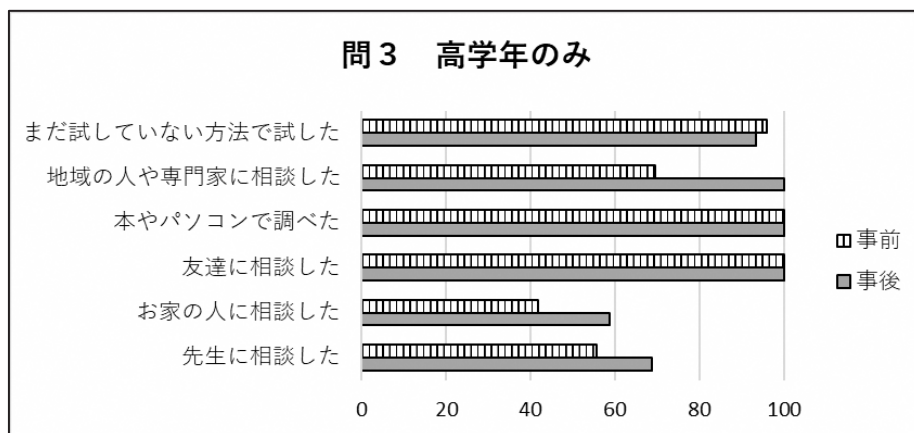
先生に相談した ・ お家の人に相談した ・ 友達に相談した
 本やパソコンで調べた ・ 地域の人や専門家に相談した
 まだ試していない方法で試した ・ その他 (_____)

事前調査と事後調査の変化をみると、下図にみるように、保護者や地域の人・専門家など、外部のリソース・パーソンを活用しようとする児童が増えていることが分かる。



さらに高学年のみに絞ってみてみると、地域の人・専門家や保護者、先生に積極的に相談しようとする児童が増えている。分からないことに出会ったときに、それを放置せず、身の

しようとする児童が増えている。分からないことに出会ったときに、それを放置せず、身の回りの大人たちに相談するという習慣がついてきていることが読み取れる。



最後に、問5②「課題を解決していこうとする学習を振り返って、自分にどんな変化があったと思いますか」と、問9③「(異学年交流活動について)どんな良さがあると思いますか。また、もっとしたいことはありますか」は自由記述回答であった。これらの回答データをテキストマイニングによって分析した結果は、以下のとおりである。

問5②の中学年の単語出現比率は以下のとおりである。事後の方が名詞・形容詞の語彙が増えており、動詞に注目すると、事前の「見える、分かる、聞ける」という表現から、「言える、考える」という、より「発信」や「主体性」を示す動詞に移行しているのが読み取れる。

名詞

問5:事前_中学年	単語	問5:事後_中学年
50	意見	50
54	解決	46
32	課題	68
43	考え	57
0	友だち	100
21	学習	79
12	変化	88
100	疑問	0
0	海	100
0	外国	100
0	いしき	100
0	体育	100
0	きょう	100
59	気持ち	41
29	あきらめない	71

動詞

問5:事前_中学年	単語	問5:事後_中学年
50	できる	50
52	思う	48
60	考える	40
53	いく	47
73	聞く	27
63	変わる	37
50	調べる	50
50	あきらめる	50
25	言える	75
0	かんがえる	100
43	もつ	57
100	見える	0
100	分かる	0
100	聞ける	0
67	あげる	33

形容詞

問5:事前_中学年	単語	問5:事後_中学年
50	楽しい	50
0	つまい	100
100	新しい	0
0	いい	100
100	難しい	0
40	強い	60
25	よい	75
0	高い	100
0	きたない	100
0	面白い	100
0	くわしい	100
40	やすい	60
100	上手い	0
100	ねばり強い	0
100	嬉しい	0

また、高学年に注目すると、事後の動詞語彙が豊かになっていることが分かる。「わかる、

知る」だけでなく、「生み出せる、変える」などの表現が出ている点に、児童自身に成長の実感があったのではないかと推測できる。

名詞			動詞			形容詞		
問5：事前_高学年	単語	問5：事後_高学年	問5：事前_高学年	単語	問5：事後_高学年	問5：事前_高学年	単語	問5：事後_高学年
45	いろいろ	55	50	できる	50	50	楽しい	50
33	協力	67	39	考える	61	66	いい	34
55	意見	45	0	持つ	100	100	くわしい	0
75	解決	25	26	思う	74	57	強い	43
14	活動	86	19	増える	81	0	我慢強い	100
33	課題	67	58	調べる	42	0	難しい	100
100	記入	0	10	わかる	90	40	新しい	60
100	目標	0	10	知る	90	100	広い	0
60	達成感	40	0	心掛ける	100	100	つまい	0
50	相談	50	0	受けとめる	100	100	少ない	0
50	地球温暖化	50	0	話す	100	100	やすい	0
100	しよう	0	0	集まる	100	100	粘り強い	0
100	考える力	0	0	生み出せる	100	100	よい	0
100	途中	0	0	変える	100	---	---	---
100	大切さ	0	0	持つ	100	---	---	---

問9③の単語出現比率は以下のとおりである（中高学年全体）。形容詞に注目すると、事前事後ともに「いい、楽しい」といった前向きな表現が使われているが、事後の方には、「楽しい、なかよい」といったポジティブ表現と同時に、「むずかしい、～にくい、気まずい」といったネガティブ表現もあらわれている。異学年交流によって、きれいごとだけではない人とのかかわり合いを経験できたのではないかと推測される。

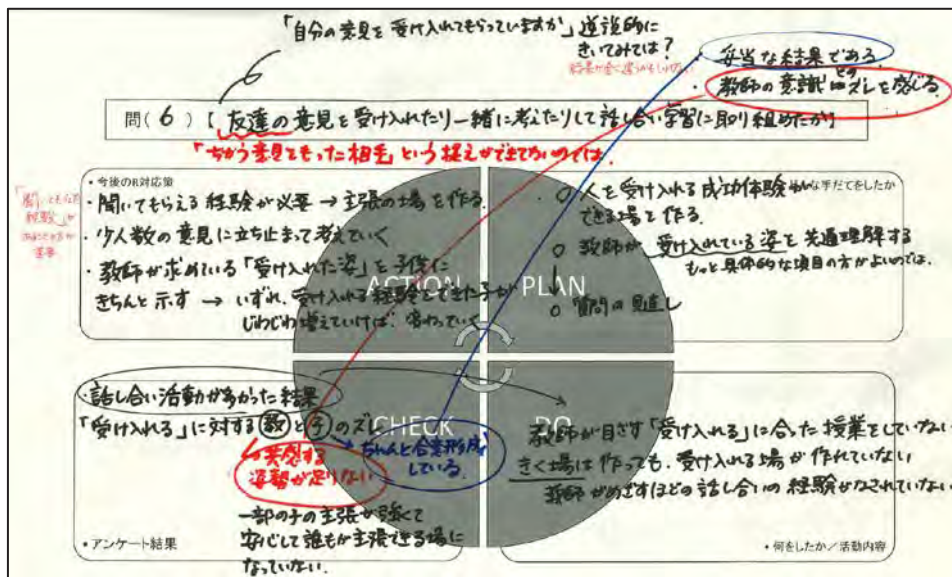
名詞			動詞			形容詞		
問9：事前	単語	問9：事後	問9：事前	単語	問9：事後	問9：事前	単語	問9：事後
50	字年	50	50	できる	50	31	いい	69
70	仲	30	45	思う	55	71	楽しい	29
67	活動	33	65	深まる	35	43	良い	57
61	いろいろ	39	46	なれる	54	0	すごい	100
86	意見	14	63	知る	37	81	新しい	19
80	考え	20	66	遊ぶ	34	57	やすい	43
73	学校	27	24	ちがう	76	0	たのしい	100
57	良さ	43	48	深める	52	0	なかよい	100
68	交流	32	64	関わる	36	47	よい	53
67	一緒に	33	64	違う	36	100	ほしい	0
13	友だち	87	0	おちう	100	0	むずかしい	100
64	自分たち	36	16	くれる	84	0	温い	100
100	声	0	25	かかわる	75	0	にくい	100
100	6年	0	100	かける	0	0	まるい	100
100	色々	0	62	考える	38	0	気まずい	100

(3) 【A】改善に向けてのアクション——『研究のあゆみ』と全体研修による具体的改善

以上の分析より、概して、ロジックモデルに示された目的に貢献するような教育効果が得られていると考えられる。ここに示された調査結果が、すなわち、MM 本町小学校の ESD 戦略に対する評価となる。教育活動に対するアンケート調査自体は、一般的に多くの学校現場で実施されている活動であるが、ここで最も重要なことは、これらのアンケート項目がロジックモデルに紐づいており、改善のための情報源になっている点にある。すなわち、上記で紹介した調査結果から、教育現場の当事者である教員が、具体的に教育活動の改善の方途について検討できる状態になっているということである。また、それが可能になるためには、このアンケート票およびそのベースとなるロジックモデルが、教員自らのアイデアによって作成されたものになっている必要がある。外部の評価専門家や上位の行政組織が「外から」あるいは「上から」提示したものでない、「自分たちの ESD」の評価にはならない。

これらの調査結果——すなわち、評価結果——を受けて、MM 本町小学校では、改善に向けてふたつの具体的なアクションがとられている。ひとつは本報告書の実践編でもある、『2019 年度 研究のあゆみ ～ESD BOOK feat.MM～』の編集と出版である。ロジックモデルの策定から、具体的な教育活動の実施、アンケート調査の実施、そしてその結果を踏まえての来年度の教育計画の策定という、一連の活動を担ってきた教員自身が執筆者・編集者となって、自らの活動を振り返る機会となっている。さらにこの冊子を学校運営協議会のメンバーや保護者、地域住民、他校の関係者などに配布することによって、MM 本町小学校の ESD 活動についての理解を深めてもらい、一層、協働関係を深めることを意図している。

また、振り返りを教員間で共有し、具体的に次年度の計画改善に活かすための活動として、研修の機会も設定されている。下図は、調査の結果を受けて、PDCA サイクルの「C (評価結果)」から「D (実施した教育活動)」を振り返り、「A (改善点・反省点の抽出)」を、来年度の「P (来年度の計画)」に繋げるためのワークシートである。年度末には全校研修のかたちでこのような研修会が開催されることになっている。



評価活動の主眼は、評価そのものではなく、その結果を次の改善に活かすことにある。換言すれば、次の改善に生きるような評価情報が収集できる評価活動を行わなければ、評価を行う意味はないということである。本節で概観した通り、MM 本町小学校では、「実現したい価値 value（ロジックモデルの上位目的）」を具体的に引き出す（extract）ための評価（extract-value: evaluation）が行われていることが分かる。

5. 今後の展望——教育委員会を中心とした「協働システム」と現場の当事者性

本報告書では、ESD 評価に際して評価観の転換が求められていること、また、ESD 評価の具体的な方法として協働型のプログラム評価という考え方が有効であることを概説し、本事業のモデル校である MM 本町小学校における『協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント』の取組みを報告した。MM 本町小学校の取組みのより具体的な内容は、本報告書の実践編である『2019 年度 研究のあゆみ ～ESD BOOK feat.MM～』を参照されたい。

最後に本研究調査をとおして抽出された、二点の主要な知見について言及したい。一点目は、教育委員会を中心とした「協働システム」の重要性についてである。横浜市の ESD コンソーシアムの特徴として、大学ではなく、教育委員会が中心になっているという点が挙げられる。例えば、横浜市では 4 年前から毎年 1 月に「ESD コンソーシアム交流報告会」として、ESD 推進校（小中高校）の児童生徒・教職員・保護者・その他関係者 200 名程度が一堂に会し、各校のポスター発表や校種縦割りで行うワークショップおよび教員研修を実施しているが、このような機会が実現できるのは、教育委員会がその企画運営を担っているためである。この交流報告会に MM 本町小学校も参加し、その取組みを他校と共有することができており、このような交流から特定の取組みが広がり得る体制ができている。

また、本事業の ESD 評価およびマネジメントを今後ヨコ展開していくためには、この取組みの広報だけではなく、実際に取組みをはじめようとする学校現場へのアドバイス

やサポートが必要になる。大学など専門機関のリソースの有効活用も含め、さまざまな学外の関係者・関係機関を繋ぎ、ESD 実践の協働システムに組み込んでいくプラットフォームが不可欠となる。教育委員会には、学校の現場を熟知し、自身も教員としての経験をもち、かつ、外部リソースとの連携推進もできる立場にある人材が揃っている。特に本事業の場合、学校教育企画部小中学校企画課が、学校現場 - 行政 - 大学を有機的に繋ぐ、協働システムの中心としての機能を果たしていた。当課の担当者は、2019年11月のUNESCO ESD Global Conference^(注1)への応援参加や、2020年1月のESD コンソーシアム交流報告会^(注2)においても、本事業を効果的に推進するための重要な役割を担ってきた。今後、教育委員会内の担当部局が、ESD 評価マネジメントに専従できるような環境づくりも求められるだろう。

二点目に指摘したいのは、現場の当事者意識の重要性である。本報告書の前半に述べた通り、ESD 評価を考える際には、その目的や主体、そして評価の方法を再考する必要がある。本調査研究では、PDCAの「C」の段階で総括的に達成度を測る評価ではなく、「P」の計画段階からセオリー評価（ロジックモデルづくり）を経て、参加型で行う協働型プログラム評価を実践してきたが、その質を維持していたのは、小正和彦校長をはじめとするMM本町小学校の教員の方々の高い当事者意識である。例えば、本報告書の実践編でもある『2019年度 研究のあゆみ ～ESD BOOK feat.MM～』の編纂や、2020年3月にAction（改善）に向けて実施される予定の教員研修は、MM本町小学校が自ら考案したものである。

協働型プログラム評価の手法は、即時的に児童生徒や学校の評価が実施できるようなツールではなく、現場の関係者たちが大切だと考える価値を、時間をかけて可視化するプロセスを支援する仕組みである。したがって、本事業の中でMM本町小学校が開発したロジックモデルやアンケート調査票が、そのまま他校でも使用できるという類のものではない。今後、他校に展開していくべきは、調査票などの具体的なツールではなく、現場がもつ潜在能力や価値観を引き出すための、新たな評価観である。各校それぞれが描く、それぞれのESDのかたちが、それぞれの当事者によってロジックモデル等のかたちに可視化され、教育委員会が提供するプラットフォーム上で共有され、改善され続けることが望まれる。本事業がそのきっかけとなることを願いつつ、今後も引き続きMM本町小学校および横浜市の取り組みを支援していきたい。

¹ 2019年11月22-25日にかけて岡山大学にてUNESCO ESD Global Conferenceが開催された。当国際会議のセッションESD in RCE（座長：岡山大学・柴川弘子、東洋大学・米原あき）において、MM本町小学校の松比良聡夫副校長、高原洋介教諭、堀江加奈子教諭が“ESD Program Evaluation × MM”というタイトルで本事業の取り組みを発表している。この会議に上記企画課の前田総一郎氏、渡辺徹氏も駆けつけて対応して下さった。

² 2020年1月25日に行われた、横浜市ESD コンソーシアム交流報告会では、教員研修の部にて、ESD 評価をテーマに、筆者による導入講義、有識者と小中高の教員によるパネルディスカッション（MM本町小学校・高原洋介教諭登壇）、参加全教員によるESD 評価ワークショップを、上記企画課が実施し、ESD 評価の推進を図った。

引用文献

- 源由理子 (2014) 「地域ガバナンスにおける協働型プログラム評価の試み」『評価クォーターリー』30、pp.2-17。
- 源由理子 (2016) 『参加型評価：改善と変革のための評価の実践』晃洋書房。
- 安田節之 (2011) 『プログラム評価：対人・コミュニティ援助の質を高めるために』新曜社。
- 米原あき (2016) 「『学び』の一環としての『評価』：協働型で行うプログラム評価の可能性」岡山大学編『文部科学省「日本／ユネスコパートナーシップ事業」ESDの教育効果(評価)に関する調査研究報告書』pp.52-61。
- 米原あき、丸山緑、澤田秀貴 (2016) 「ODA 技術協力プロジェクトにおけるプログラム評価の試み：トルコ国防災教育プロジェクトを事例に」『国際開発研究』25(1-2)、pp.91-105。
- Rossi, P. H., Lipsey, M. W., and Freeman, H. E. (2004). Evaluation: A systematic approach (7th ed.). Sage publications.
(=大島巖、平岡公一、森俊夫、元永拓郎監訳 (2010) 『プログラム評価の理論と方法』日本評論社。)
- Scriven, M. (1991). Evaluation thesaurus (4th ed.). Sage publications.
- UNESCO. (2016). Unpacking sustainable development goal 4 education 2030 guide. UNESCO.

資料 I. みなとみらい本町小ロジックモデル

みなとみらい本町小 ロジックモデル (案) ver1.23

最上位目的

スーパーゴール	学校教育目標【「みな」と「みらい」を創る子】 「多様性を認められる」「多面的・多角的に物事を捉える」「問いを見い出して学び続ける」「まちに愛着をもつ」「豊かな心をもつ」の5つの資質を育成する。
---------	---

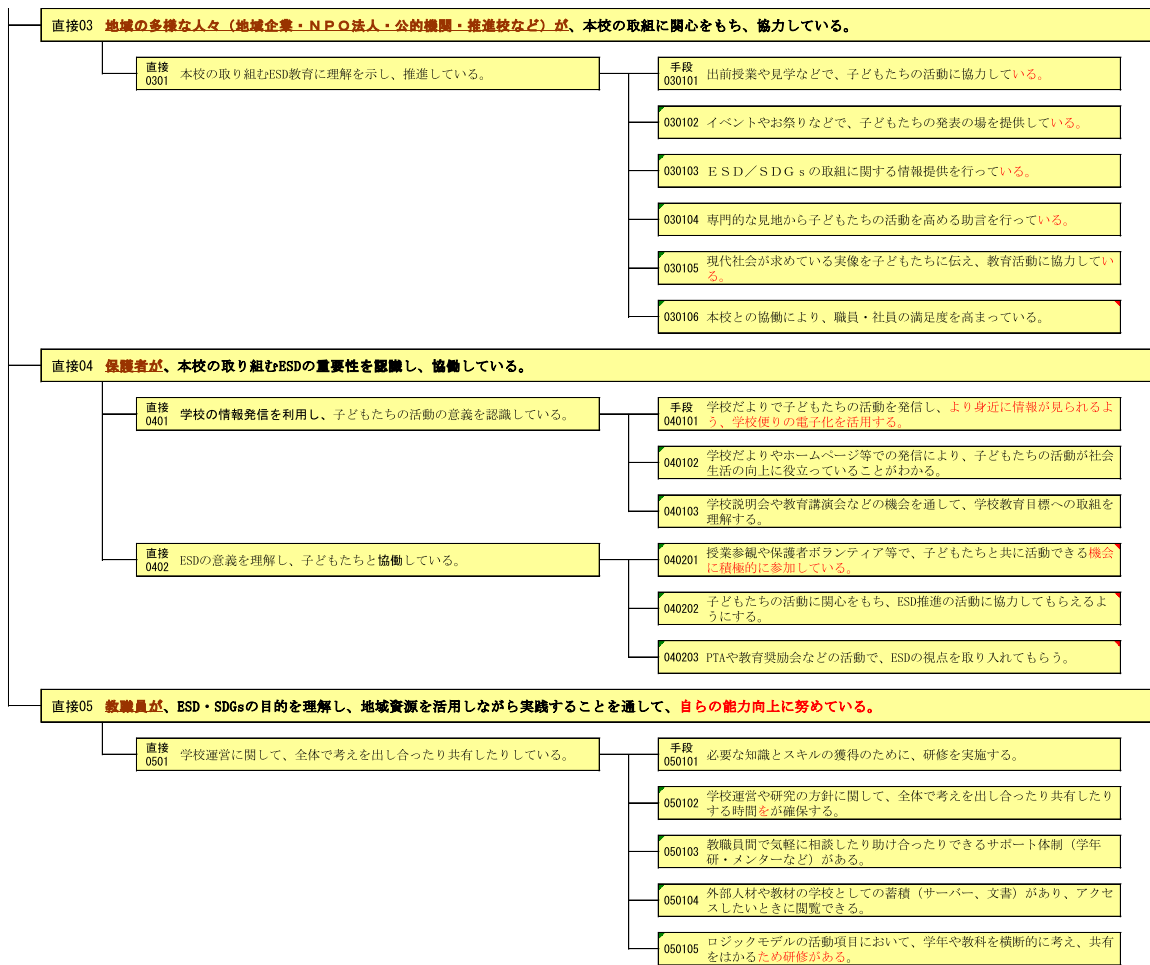
上位目的

最終アウトカム	社会（まち・ひと）とつながり、多様な文化や価値観を取り入れながら広い視野で物事を捉え、現代社会における課題の解決に向けて行動できる、持続可能な社会形成を担うグローバルな人材が育成されている。
---------	---

戦略目的

中間アウトカム	「みなとみらい」の豊かな資源を活かした教育活動から、社会（まち・ひと）の課題解決に向けて、さまざまな視点や立場に立ち、多様な他者の考えを共有しながら、地域・保護者・企業をはたらきかけ、社会に変化を起こせる子*1が育っている。 *1 社会に変化=実態
---------	--





ていがくねんアンケート

ねん くみ なまえ（ ）

がっこうせいかつのようすについてしつもんします。

とい1：じぶんのめあてをもって、がくしゅうしましたか。

→0101 発達段階にあった課題を【自ら/主体的に】見出している

[5とてもそうおもう 4そうおもう 3どちらともいえない 2そうおもわない 1まったくそうおもわない]

とい2：にがてなことにてであったとき、どんなふうにかんじますか。

→0102 具体的な解決方法を試しながら、粘り強く追及している。

[5できるようになりたい 4もうちょっとがんばろう 3とくになにもおもわない 2どうしよう 1もうやめたい]

とい3：グループかつどうや、ペアがくしゅうでは、ともだちのいけんをききながら、がくしゅうするのはどうでしたか。

→0201 相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いのよさに気付いている。

[5とてもたのしかった 4たのしかった 3どちらともいえない 2たのしくなかった 1まったくたのしくなかった]

とい4：ちがうがくねんのともだちと、いっしょにかつどうすることをどうおもいますか。

→0202 年齢や考えが自分と異なる他者と協働している。

[5とてもたのしかった 4たのしかった 3どちらともいえない 2たのしくなかった 1まったくたのしくなかった]

とい5：おうちのひとや、ちいきのひとにべんきょうをおしえてもらうことがありますか。

→0203 地域・保護者と協働している。

[5とてもそうおもう 4そうおもう 3どちらともいえない 2そうおもわない 1まったくそうおもわない]

とい6：がっこうのために、できることがあるとおもいますか。（1ねんせいのみ）

→0204 地域社会の課題を理解し、よりよい未来の在り方を考えている。

[2ある 1ない]

まちのために、できることがあるとおもいますか。（2ねんせいのみ）

[2ある 1ない]

とい7：がっこうやまちのためにおこなったことがあるひとは、どんなことをおこないましたか。

じゅうかいてください。

中・高学年アンケート

年 組 名前 ()

学校生活のようすについて質問します。当てはまるものについて、丸をつけてください。
問5と問9については、その理由を自由に書いてください。

問1：自分でめあてや課題をつくり、自分から学習にのぞむことができましたか。

→0101 発達段階に合った課題を [自ら/主体的に] 見い出している。

5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない

問2：めあての達成や課題の解決に向かって、学習計画を立てて活動できましたか。

→0102 具体的な解決方法を試しながら、粘り強く追究している。

5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない

問3：いろいろなことを試したり調べたりして、最後まであきらめずに学習に取り組みましたか。

→0102 具体的な解決方法を試しながら、粘り強く追究している。

・先生に相談した ・お家の人に相談した ・友達に相談した ・本やパソコンで調べた

・地域の人や専門家に相談した ・まだ試していない方法で試した

・その他 ()

問4：新しい課題や方法にも、チャレンジしましたか。

→0103 自分たちの考えや課題を更新しながら、発展的な課題解決学習を進めている

5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない

問5-①：課題を解決していこうとする学習を振り返って、どう思いましたか

→直接 01 子どもたちが社会 (まち・ひと) から課題を見い出し、解決に向かって試行錯誤しながら活動を進め、自分たちの成長を感じている。

→0103 自分たちの考えや課題を更新しながら、発展的な課題解決学習を進めている

5 とても楽しかった 4 まあまあ楽しかった 3 楽しかった 2 楽しくなかった 1 あまり楽しくなかった

—②：課題を解決していこうとする学習を振り返って、自分にどんな変化があったと思いますか。

問6：友達の意見を受け入れたり、一緒に考えたりして、話し合いに取り組みましたか。

→0201 相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いのよさに気付いている。

5 よくしている 4 だいたいしている 3 たまにしている 2 ほとんどしていない 1 全くしていない

問7：家や地域の人に、自分たちの活動へ協力（参加）してもらっていますか。

→0203 地域・保護者と協働している。

5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない

問8：自分たちの活動が、まちの人や社会の役に立っていると思いますか。

→0204 地域社会の課題を理解し、よりよい未来の在り方を考えている。

5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない

問9—①：友達や学年のちがう人と、かかわりあうことはできましたか。

→0202 年齢や考えが自分と異なる他者と協働している。

5 よくできた 4 だいたいできた 3 できた 2 あまりできなかった 1 できなかった

—②：友達や学年のちがう人と一緒に活動することを、どう思いますか。

→直接 02 子どもたちが、多様な他者とコミュニケーションをはかり、活動の価値に気付いている。

5 とても楽しい 4 まあまあ楽しい 3 楽しい 2 あまり楽しくない 1 まったく楽しくない

—③：どんなよさがあると思いますか。また、もっとしたいことはありますか。

みなとみらい本町小学校 教諭 高原洋介
 東洋大学 教授 米原あき

ESD の評価はむずかしい…？

そもそも ESD って何なのか良く分からないものを評価すると言われても…
 ●まずは「自分たちのESD」が何なのかを明らかにしよう！

指導要領も評価指標もないのに、誰がどうやって評価するのか…
 ●「自分たちのESD」で実現したい価値を自分たちの指標で測ろう！

評価って、児童個人の達成度を測ることでしょ？
 ●評価には、個人の達成度を測る評価(総括評価)だけではなく、ESD の取組自体を改善するための評価(形成評価)もあります！
 ●その取組から児童にどんな変化が起きたのが(行動変容)をみるのも評価のひとつです！

みなとみらい本町小学校では『ロジックモデルを用いたプログラム評価』によるESD 評価・マネジメントを実践しています！

ロジックモデルを用いたプログラム評価って？



ESD や SDGs って、包括的すぎ。何からやればいいのか？
 学校教育で SDGs を推進するとはどういう意味なのだろう？

確かに、ESD は包括的すぎて、また抽象的すぎて実践に導入するのは難しいとよく言われます。この学校で ESD を始めるときにもこの問題に直面しました。この ESD という不思議な箱の中身を理解するために、ESD という概念を、自分たちの言葉で「unpack (開封)」しましょう。さもなければ、私たちは何をすべきか、どのように行動すべきか、分からないでしょう。

自分たちのゴールが何なのかを確認するために、ロジックモデルが役に立ちます。



●ESD や SDGs を開封する (unpack)

包括的・抽象的
 内容をつかみづらい



UNPACK





ロジックモデルを作るのに、気を付けることはあるのかな？

「何をするか／どんな行動するか」を明確にすることです。そうすることで、目標達成に向けての論理的な道筋が明らかになります。

- 学校教育目標を ESD や SDGs の資質・能力ベースで見直す
- 目標から活動へ、論理的なつながりをもたせる
- 文言は具体的に。明日からできる活動まで落とし込む
(その際、アウトカム指標となるようにする)



● 「アウトカム指標」と「アウトプット指標」の違い

アウトカム指標：満足した、学んだ、考えるようになったなどの、インプット(活動)によって引き起こされた、**社会やひとの変化** **👉こっちを目指そう!**

アウトプット指標：何件増えた、何人参加したなどの、インプット(活動)に対する直接的な結果



ロジックモデルを作るのに、参考にするものや留意点はあるのかな？

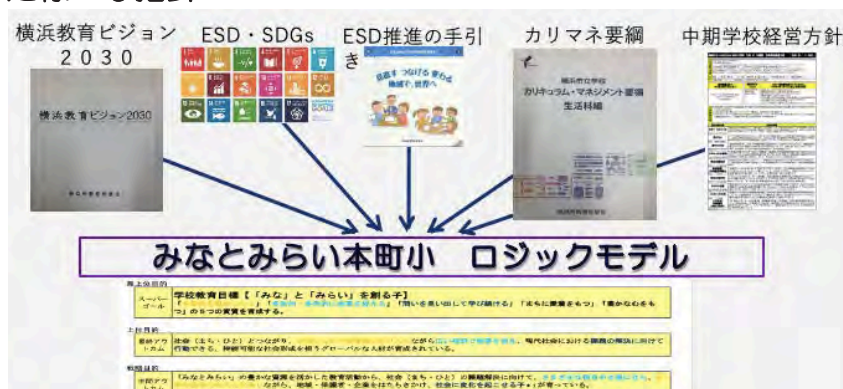
学校経営で目指すべき、様々な指針と関連づけて作成するとよいと思います。つまり、ロジックモデルに基づいた活動を進めることで関連のある指針も達成できるからです。

【キーワード①「創発」】それと同時に、既存の情報にとらわれすぎないことも大切です。自分たちがESDを通じて実現したい価値は何なのかを、自由に発想して言語化してみましょう。

【キーワード②「協働」】また、ロジックモデルを作成するときは、できるだけ多くの関係者とともに、ワークショップ形式で、わいわいと話し合うことをお勧めします。子どもたちにとって、ESDの課題が「自分ごと」であることが大切なのと同じように、私たち教員・大人にとってもESDの活動が一人ひとりの「自分ごと」であることがとても大切だからです。



● 参考にした様々な指針



(*みなとみらい本町小学校のESDロジックモデルの全体像は、上記の『報告書』および『研究のあゆみ』を参照)



ロジックモデルを作った後、何をすればいいのかな？

ロジックモデルに基づいた活動をしていくことです。そして、活動を改善するのに必要な情報を収集するために、活動の前後でアンケートを実施し、その活動の達成度合いや児童の変化を測ります。その際、アンケート項目は、ロジックモデルの中のアウトカムや指針の状況が分かるような文言にします。回答は、選択式^(*)と自由記述を取り入れるといいでしょう。

(*)選択肢は「とてもそう思う～全くそう思わない」など、5段階以上に設定しておく、のちの統計分析の可能性が広がります。



●児童用のアンケート調査票 年に2回実施。低学年用と中高学年用の2種類作成。

中・高学年アンケート	
年 組 名 前 ()	
学校生活のようすについて質問します。当てはまるものについて、丸をつけてください。問5と問9については、その理由を自由に書いてください。	

問1：自分でめあてや課題をつくり、自分から学習にのぞむことができましたか。 →0101 発達段階に合った課題を【自ら/主体的に】見い出している。 5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない	
問2：めあての達成や課題の解決に向かって、学習計画を立てて活動できましたか。 →0102 具体的な解決方法を試しながら、粘り強く追究している。 5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない	
問3：いろいろなことを試したり調べたりして、最後まであきらめずに学習に取り組みましたか。 →0102 具体的な解決方法を試しながら、粘り強く追究している。 ・先生に相談した ・お家の人に相談した ・友達に相談した ・本やパソコンで調べた ・地域の人や専門家に相談した ・まだ試していない方法で試した ・その他 ()	
問4：新しい課題や方法にも、チャレンジしましたが。 →0103 自分たちの考えや課題を更新しながら、発展的な課題解決学習を進めている。 5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない	
問5-①：課題を解決していこうとする学習を振り返って、どう思いましたか →直接 01 子どもたちが社会（まち・ひと）から課題を見い出し、解決に向かって試行錯誤しながら活動を進め、自分たちの成長を感じている。 →0103 自分たちの考えや課題を更新しながら、発展的な課題解決学習を進めている。 5 とても楽しかった 4 まあまあ楽しかった 3 楽しかった 2 楽しくなかった 1 あまり楽しくなかった	
問5-②：課題を解決していこうとする学習を振り返って、自分にどんな変化があったと思いますか。 <div style="border: 1px solid black; height: 50px; width: 100%;"></div>	
問6：友達の見解を受け入れたり、一緒に考えたりして、話し合いに取り組みましたが。 →0201 相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いの上に気付いている。 5 よくしている 4 だいたいしている 3 だまにしている 2 ほとんどしていない 1 全くしていない	
問7：家や地域の人に、自分たちの活動へ協力（参加）してもらえていますか。 →0203 地域・保護者と協働している。 5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない	
問8：自分たちの活動が、まちの人や社会の役に立っていると思えますか。 →0204 地域社会の課題を理解し、よりよい未来の在り方を考えている。 5 とてもそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそう思わない	
問9-①：友達や学年のちがう人と、かかわりあうことはできましたか。 →0202 年齢や考えが自分と異なる他者と協働している。 5 よくできた 4 だいたいできた 3 できた 2 あまりできなかった 1 できなかった	
問9-②：友達や学年のちがう人と一緒に活動することを、どう思いますか。 →直接 02 子どもたちが、多様な他者とコミュニケーションをはかり、活動の価値に気付いている。 5 とても楽しい 4 まあまあ楽しい 3 楽しい 2 あまり楽しくない 1 まったく楽しくない	
問9-③：どんなよさがあると思いますか。また、もっとしたいことはありますか。 <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div>	

●アンケート調査票と評価指標

アンケート調査票に掲載されている質問項目は、ロジックモデルの中に示されたアウトカムやアウトプットを測定するための「評価指標」です。指標にはいろいろな種類があって構いません。

- ・主観指標：5段階などの選択式で、回答者の主観的な意識を調べる。数値化することが可能。
 - ・自由記述：意見や感想などを自由に書いてもらう。キーワードを挙げてもらう方法もあり。
 - ・テストの点数など既存のデータ：ロジックモデルの目的に合う指標なら、既存の指標もOK。
 - ・その他、教員による観察や児童の発言・作品に基づく評価、ルーブリックを用いた評価など。
- ☆「多様な指標がある」こと自体が「多様な価値があり得る」というメッセージになります！



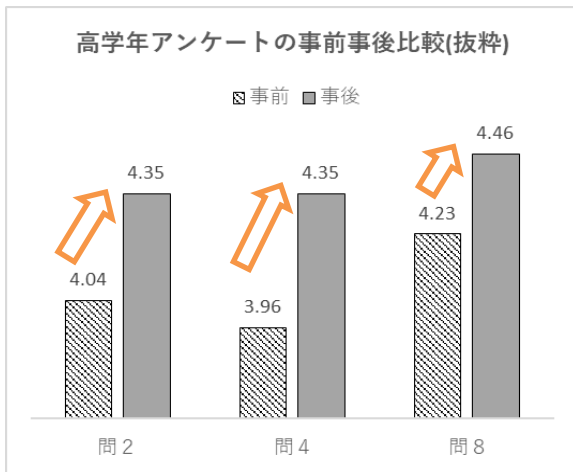
アンケートで集めたデータはどうやって分析すればいいのかな？

数値化できるデータは数値化して、グラフに視覚化したり、可能であれば統計的な分析を適用したりして、どんな変化が起こっているのか、「見える化」していきましょう。

自由記述などのテキストデータは、そこから主要なキーワードを読み取ったり、可能であれば、テキストマイニングなどの分析を適用したりして、変化を「見える化」してみましょう。



●数値データの分析



例えば統計的な分析（t検定）を適用すると…

問2「めあての達成や課題の解決に向かって、学習計画を立てて活動できましたか。」 統計的に有意な増加！（ $p<0.1$ ）

問4「新しい課題や方法にも、チャレンジしましたか。」 統計的に有意な増加！（ $p<0.01$ ）

問8「自分たちの活動が、まちの人や社会の役に立っていると
思いますか。」 統計的に有意な増加！（ $p<0.05$ ）

（*具体的な活動の内容については、『2019年度 研究の歩み～Create a future BOOK～』を参照）

●テキストデータの分析

■名詞

問5：事前_高学年	単語	問5：事後_高学年
45	いろいろ	55
33	協力	67
55	意見	45
75	解決	25
14	活動	86
33	課題	67
100	記入	0
100	目標	0
60	達成感	40
50	相談	50
50	地球温暖化	50
100	しよう	0
100	考える力	0
100	途中	0
100	大切さ	0

■動詞

問5：事前_高学年	単語	問5：事後_高学年
50	できる	50
39	考える	61
0	持つ	100
26	思う	74
19	増える	81
58	調べる	42
10	わかる	90
10	知る	90
0	心掛ける	100
0	受けとめる	100
0	話す	100
0	集まる	100
0	生み出せる	100
0	変える	100
0	持てる	100

■形容詞

問5：事前_高学年	単語	問5：事後_高学年
50	楽しい	50
66	いい	34
100	くわしい	0
57	強い	43
0	我慢強い	100
0	難しい	100
40	新しい	60
100	広い	0
100	つまみ	0
100	少ない	0
100	やすい	0
100	粘り強い	0
100	よい	0
---	---	---
---	---	---

問5②「課題を解決していこうとする学習を振り返って、自分にどんな変化があったと思いますか」

⇒「事後」の動詞語彙がとても豊かになっています。「わかる、知る、受け止める」等だけではなく、「生み出せる、変える」などの表現が出ている点に、児童自身に成長の実感があったのではないかと推測できます。

☆ 児童の「変化」を読み取る！ ……達成度だけを見るのではなく、何を改善すればよいのかを考える



評価の結果をどうやって次の改善に活かせばいいのかな？

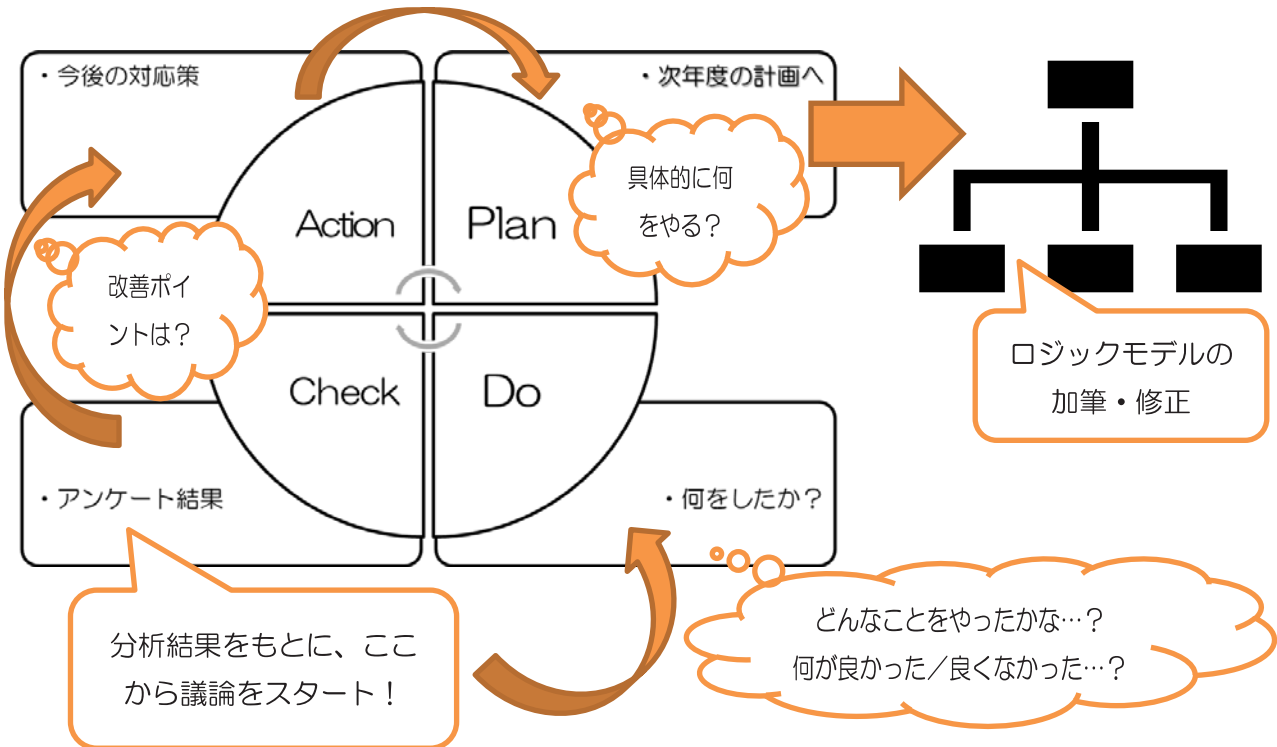
プログラム評価は、「ダメ出し」のための評価ではなく、「どうすればもっとよいプログラムになるか」を具体的に検討するための評価です。また、子どもたちの能力を直接的に測定することよりも、「よいプログラムを提供すれば、子どもたちも伸びるはず」という前提に立っているので、いわゆる学力テストのような評価ではありません。

アンケートの分析結果をもとに、以下のようなワークシートを用いて、来年度の計画を検討し、ロジックモデルを加筆・修正していきましょう。ロジックモデルに完成形はないのですから！



●改善アクション研修

「C」からPDCAサイクルを見直してみよう！



ロジックモデルにて、日常取り組んでいる教育活動を、ESD/SDGsの視点から可視化したことで、教職員が「何をするか／どんな活動をするか」を明確にもつことができました。ロジックモデルでESDの共有が進むと、教職員が子どもたちの活動を地域や世界の課題の「何に」「どのように」つながっているのかを価値付けていけると思います。

そして、私たちは学校だけでなく保護者や地域を巻き込んでロジックモデルで整理したビジョンを共有し、ESDを推進していきたいと思っています。



「評価(Evaluation)」という言葉の原義は「価値を引き出す(Extract-value)」こと。それぞれの学校でESDを通じて実現したい価値とはどのようなものでしょうか？ロジックモデルも教育活動も指標もアンケートも、こたえは一つではありません。「価値を引き出す評価」を通じて、それぞれのESDを実現してください！



第3章

ESDを通じた学習成果と、それらを育むための
効果的アプローチについて

ESD を通して身につけることが期待される資質・能力とは

北村友人

(東京大学大学院教育学研究科・准教授)

「持続可能な開発のための教育 (ESD)」とは、古くて新しい教育のアプローチである。社会にある問題を自ら発見し、なぜそうした問題が起こっているかを理解し、そこにどのような働きかけをすることで解決を導けるのかを、子どもたち自身が主体的に考える教授・学習のプロセスを、ESD では非常に重視している。こうした学習を実際に行うためには、座学で教科書を通した学びをしているだけでは不十分であり、自ら積極的に調べたり、他の子どもたち (さらには大人も含めて) と議論したり、そこでわかったことをさまざまな形で表現していく、という参加・体験型の学びを取り入れていくことが欠かせない。そのような学びのスタイルは、日本の学校でもさまざまな形で実践されてきたという意味では「古く」からある教育実践であると言える。しかしながら、そうした教育実践を行うにあたり、「持続可能な社会」のあり方を考え、それを妨げるような社会的課題に対して目を向けることを促すというアプローチは「新しい」ものである。

そうした教育を通して、どのような資質や能力を育むことが求められているのであろうか。それは、2020 年度から順次導入されていく新しい学習指導要領で示されている資質・能力と、多くの共通性をもっていることを指摘したい。新学習指導要領では、「何を知っているか、何ができるか (個別の知識・技能)」「知っていること・できることをどう使うか (思考力・判断力・表現力等)」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか (学びに向かう力、人間性等)」という資質・能力に関する 3 つの柱を打ち出している。そして、これらの資質・能力を育むうえで、「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことが不可欠であると強調している。このような資質・能力が、まさに ESD を通して育むことが目指されており、そのための学びのあり方 (=主体的・対話的で深い学び)こそが、ESD で実践されるべき学びでもある。

ESD にしても、新学習指導要領にしても、その根底には、これからの時代には体系化された知識やスキルを子どもたちに伝達し、それらを身につけさせるだけでは十分とは言えないという考え方がある。すなわち、急速に変化する時代の中では、学校で身につけた知識やスキルはすぐに古くなってしまうため、人生を通して学び続け、知識やスキルを自分でアップデートし続ける能力を身につけることが不可欠となる。それは、「学び方」を学ぶ、と語り換えることもできるだろう。

加えて、世の中には必ずしも一つの正解があるのではなく、複数の解が存在していたり、場合によっては「正解」など誰にもわからないといった状況もあり得る。そうしたときに、自らが「正しい」という判断をどのように下していくことができるのか。これからの学びには、そういった判断をできるような資質・能力を育むことが求められている。そのためには、

社会における倫理や正義、道徳などの価値観について理解を深め、そうした価値観にもとづきながら社会的により「公正」であると考えられる判断を下していく態度や姿勢が必要になってくる。繰り返しになるが、そうした判断を下す際に、必ずしも一つの「正解」があるわけではないことは、言うまでもない。

このように考えてくると、**ESD** を実践するというのは、とても大変なことに思えるかもしれない。しかし、最初に述べたように、**ESD** は古くて新しい教育のアプローチである。実は、学校教育の中で、これまでもこういった資質や能力を育むための取り組みが積み重ねられてきたはずである。ただし、そうした教育実践を積み重ねる中で、**ESD** には「持続可能性」という一本の大きな軸があることを強調したい。この世界が持続可能なものであるには、環境、経済、社会・文化という**3**つの領域を横断的に繋げながら考えていくことが必要であり、そこに上述の「公正」という価値観を柱としてもっていくことが求められている。そのようなことを意識して教育実践に取り組むという意味では、やはり「新しい」教育のアプローチと言えるのであろう。

ESD を推進することは、多くの先生方にとって、そして、多くの学校にとって、大きな挑戦かもしれない。しかし、先が見通せず、急速に変化していくこれからの時代を子どもたちが生き抜いていき、それぞれの能力を十分に発揮していくことを可能にするような資質・能力を育むためには、とても重要な取り組みであると考ええる。同じようなビジョンをもった新学習指導要領も導入されていく中で、横浜市教育委員会が**ESD** の意義を認め、その推進を図っていることは、まさに時宜に適った取り組みであると言える。

そうした横浜市の教育委員会ならびに先生方のご理解とご協力のもと、**2019**年**9**月に**ESD** 推進校で教壇に立つ先生方に対して質問紙調査を行う機会を得た。この調査では、**ESD** を通してどのような資質・能力を育むことが重要であり、そのためにはいかなる教育手法が効果的であると先生方が考えているかを尋ねた。（なお、本調査で得られたデータは未だ分析中であるが、現時点で明らかになった暫定的な結果について、小論の後に簡単に紹介する。）

先生方に回答していただいた調査結果をみると、多くの先生が**ESD** を実践するうえで他者と協働することの重要性を意識しており、そうした協働的な学びを通して社会や自然と自分自身がどのように繋がっているかを生徒たちが理解していくことを重視していることがわかった。また、協働的な学びを実践するためには、保護者・**PTA** などとの連携を強化したり、地域社会との繋がりを深めたりすることが欠かせないと考えている。そして、そのためには、学校の教育方針やビジョンを明確化し、それを学びのプロセスに参加するすべての人たち（当然、生徒たち自身も含めて）と共有することが必要であると捉えている。

それと同時に、**ESD** という新しい教育のアプローチを推進していくにあたり、先生方が伝統的な「評価」のイメージにとらわれてしまっている可能性があることを、今回の調査を通してみえてきた課題として挙げておきたい。すなわち、教え方や学び方を新しくすることは、その成果をどのように測るのかという面でも新しい見方や考え方をとり入れる

ことが欠かせない。さらに、先に述べたように **ESD** では価値観や態度・姿勢といったものが重視されているが、社会正義・公正・道徳といった要素を先生方はそれほど意識されていないことは、今後の課題として検討していく必要があると指摘しておきたい。

以上、ここで指摘したことを踏まえると、**ESD** の効果を視覚化していくためには、協働的な学びを通して何を目指しているのかを明確化するとともに、そうした学びを通してどのような資質・能力を育んでいることができているのかを、適切に「評価」していくことが必要である。

これからの時代に求められる学校教育を創造していくためには、新学習指導要領を踏まえつつ、**ESD** のさらなる実践・研究を積み重ね、学校教育の質の向上を「視覚的」にもわかりやすく示していくことが必要であることを指摘して、小論の結びとしたい。

ESD質問紙調査の暫定的な結果について

八木恵里子

(東京大学大学院教育学研究科・特任研究員)

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターは、国連大学の助成金による受託研究「持続可能な開発のための教育（ESD）の推進を通じた社会的レジリエンスの強化ーモニタリング・評価のための指標開発と改善メカニズムの構築ー」（2018年度～2020年度）を実施している。本研究プロジェクトは持続可能な社会（SDGs）の実現に向けて、日本を含むアジア地域の国々が**ESD/GCED**¹の取り組みの進捗と学習成果および社会的インパクトを把握し、子どもの豊かな学びを促進していくようなモニタリング評価指標の開発を目的としている。「持続可能な開発目標（SDGs）」の目標4.7については、**ESD**そのものが包括的な学習アプローチであるという特性も影響し、指標設定やデータ収集メカニズムを巡り、現在も国際的に議論がなされている状況にある。そこで本研究プロジェクトでは、学校レベルの**ESD/GCED**のモニタリング枠組みを提案し、実践的なモニタリグツールを開発・検証することを目指している。

研究の一環として、2019年9月に横浜市の**ESD**推進校を対象に「**ESD**を通じた学習成果と、それらを育むための効果的なアプローチ」に関する質問紙調査を実施した。質問紙は、1) **ESD**アプローチによる学習成果、2) 効果的なリソースやプロセス、3) **ESD**実践の評価や課題の項目が含まれ、主に教師の方々が**ESD**を通じた学習成果として何を重視し、そのためにどのような教材や教授法を用いることが効果的であると考えているか主観に基

¹ Global Citizenship Education(GCED)グローバルシティズンシップ教育

づいて回答していただく形式となっている。なお、本質問紙調査は九州大学大学院工学研究院の馬奈木俊介研究室との共同研究として、データの統計解析を実施している（有効回答数16校68名）。現在、さらなる分析作業を進めているが、これまでに明らかになったことを、ここで簡単に紹介する。

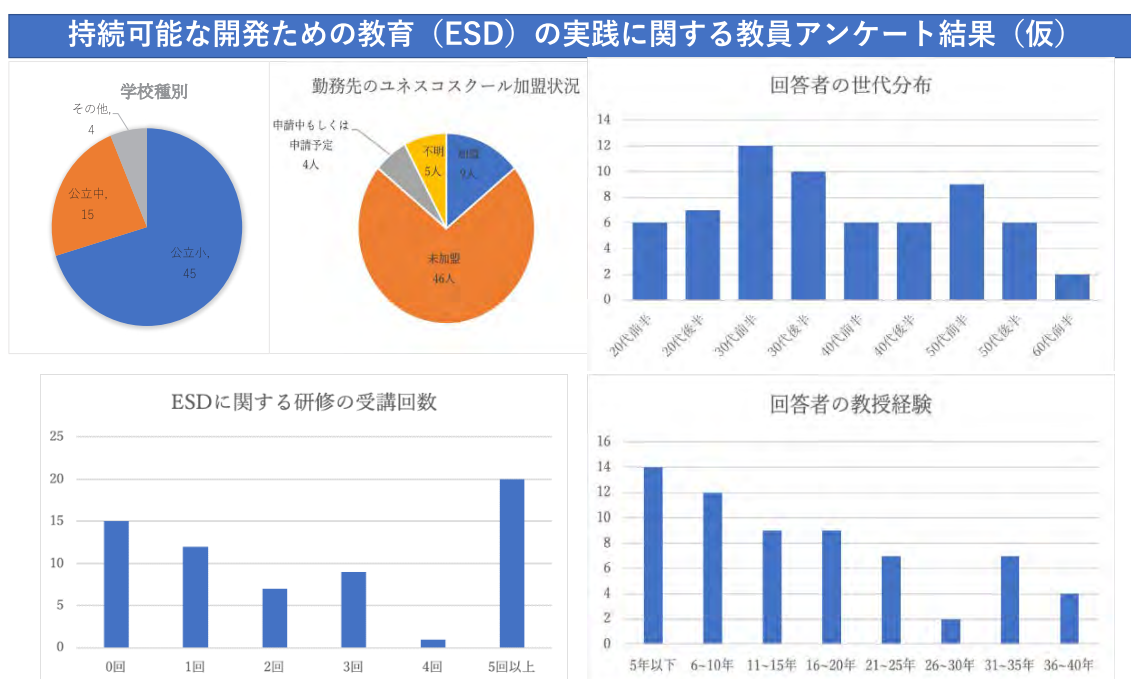


図1：回答者の属性

表1は、ESDの実践において教師が重視する学習成果の推計結果を示している。まず質問紙の冒頭で、これまでの教育実践でESDの学習成果が見られたかどうかを尋ねた。次に、教師がESD実践を通じた学習成果において重要と考えるものを3段階（重要でない・重要・とても重要）で回答する構成になっている。回帰分析の結果、学習成果が「ある」とした教師はESD教育の実践による学習成果・態度変容11項目の中で、「他者との協働（以下「協働」）」と「多様な人・もの・こと・社会・自然と自分とのつながり（以下「つながり」）」を重要と考える傾向が強いことが明らかになった。「協働」「つながり」「認識」といった、持続可能な社会づくりを実践・維持するための項目の重要度が高い一方で、これらの行動の土台となる「資源」への理解や「知識」の獲得に対する重要度が低い点が特徴としてあらわれている。さらに、社会正義・公正・道徳といった価値観を育む役割を担う「模範」の項目が他と比較して低い傾向にあり、これらの概念については日本のESD実践では馴染みが薄いことも推測される。

表1: ESDの実践において教師が重視する学習成果

	β	0から1までの範囲に 指標化	$\ln(p/1-p)=\beta$ の時 のp	オッズ比
1[全体]価値観の変容を学校全体で実現し、学校を変えていく行動を実践	-0.0877	0.108358818	0.478089042	0.916036
2[資源]資源の有限性を認識し、持続可能な消費行動	0.0164	0.214475025	0.504099908	1.016535
3[知識]各教科の基礎的・基本的な知識・技能の習得	0.000396	0.19816106	0.500099	1.000396
4[思考]批判的に思考し、ものごとを思慮深く判断する能力	0.128	0.328236493	0.531956381	1.136553
5[予測]未来像を予測して計画を立て、予期せぬ事態にも適切に対応できる力	-0.194	0	0.451651542	0.823658
6[コミュ]コミュニケーション能力	-0.0912	0.10479103	0.47721579	0.912835
7[協働]他者と協力する態度	0.787***	1	0.68718681	2.196796
8[つながり]多様な人・もの・こと・社会・自然と自分とのつながりを総合的に考え尊重し受け入れる態度(システム思考)	0.292*	0.495412844	0.572485695	1.339103
9[参加]学校や社会等の意思決定過程に自分から進んで計画・参加・行動する態度	-0.152	0.042813456	0.462072994	0.858988
10[模範]社会的正義や公正性を重んじ、道徳的行動を促す態度	0.0256	0.223853211	0.50639965	1.02593
11[認識]地域や社会における自らの役割を認識し、自分の行動を振り返り目標に向けてモチベーションを高く持つ能力	0.148	0.348623853	0.53693261	1.159513

(***は1%、**は5%、*は10%有意水準で有意を示す)

次に、重要度が高いとされた「協働」や「つながり」の学習成果発現に効果的な教育リソースとしては、「保護者、PTA、地域住民、民間などの校外リソースパーソン」、効果的な教育プロセス(教授法・学習方法)としては、「探求学習・課題解決型の学習」の有意性が統計的に示された。さらに、上記の教育プロセスを展開するうえで効果的であった手段・方法に関して、学習効果・態度変容での項目「協働」については「適切な進捗評価と今後の計画への活用」、「つながり」については「ESDに根差す学校方針ビジョンの策定、および児童生徒・教師・保護者へのビジョン周知」、「参加」については「教師の知識向上のための自己学習」の各々の係数の推定値が統計的に有意な水準で正であることがわかり、それぞれにおいて効果的である可能性が示された。

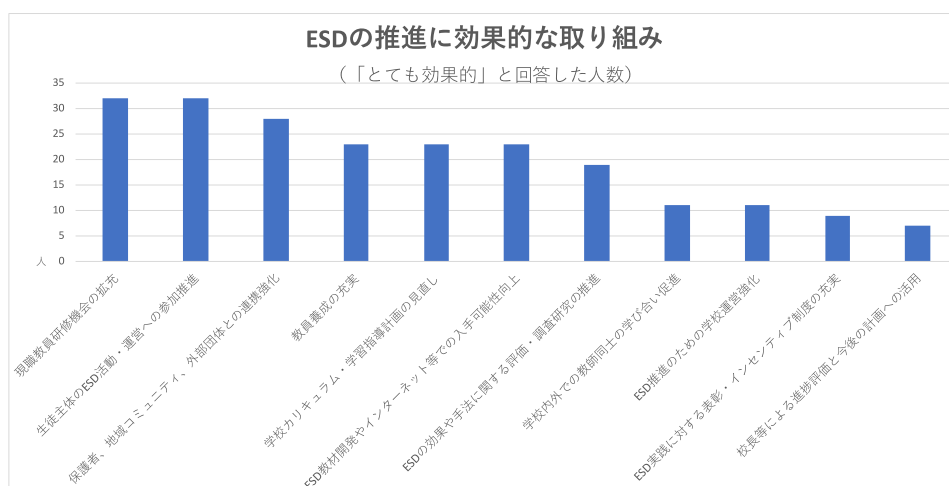
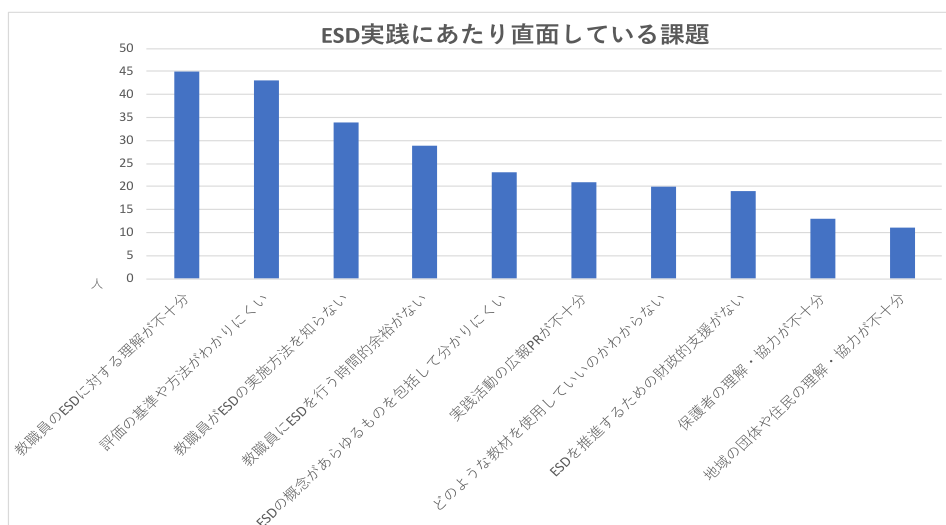


図2：ESD実践の課題と今後に向けた取り組みの提案

図2は、アンケート後半に記載されたESD実践で直面している課題や今後に向けた取り組みの提案についての結果を示している。ESDのさらなる理解促進のための教員研修や評価制度の充実、生徒の主体的な運営活動参加の促進、そして保護者や地域コミュニティなど多様なステークホルダーとの連携強化が期待されている。

第4章

本年度の横浜市E S D推進コンソーシアムの取組と
全国大会等への参加報告

横浜市のユネスコスクールと
ESD 推進校の発信・交流の場

横浜市 ESD 推進コンソーシアム 交流報告会

2020年1月25日(土)

9:30~16:45

JICA 横浜



第Ⅰ部 9:30~12:00 (受付 9:10~)

児童生徒活動成果報告・情報交換

(ユネスコスクール・ESD 推進校による)

第Ⅱ部 13:30~16:45 (受付 13:10~)

教職員・ESD 関係者による情報交換

ESD による教育(学習)効果の評価についてのシンポジウム・参加者の情報交換

会場: JICA 横浜

神奈川県横浜市中区
新港 2-3-1



JR 線 桜木町/関内駅 徒歩 15 分
みなとみらい線 馬車道駅 徒歩 8 分

主催 横浜市教育委員会

お問合せ 小中学校企画課
045-671-3266

E-mail: ky-esd@city.yokohama.jp

下の QR コード・URL からアクセスして申し込みをしてください

申込 URL <https://www.e-shinsei.city.yokohama.lg.jp/yokohama/uketsuke/dform.do?id=1576214799148>

*ESD…持続可能な開発のための教育

スマートフォン版
73



横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会

日時：2020年1月25日（土）9時30分～12時 13時30分～16時45分

会場：JICA横浜

I 午前の部

15校の参加があり、今年度からよこはま子どもピースメッセンジャーも発表をした。参加数は児童生徒約150名、教職員約50名、保護者約50名、他地域・ESD推進関係者約30名 総勢約280名の参加者があった。

1 ESDの取組のポスターセッション



<児童生徒によるESDの取組を伝えるポスターセッションの様子>

2 ワークショップ～日本の抱えているこれからの解決すべき課題とは～

「未来の授業 私たちのSDGs探究BOOK」*に掲載されている、「日本が抱えているこれから解決すべき課題たち」の中から児童生徒と大人のグループに分かれて、解決策を議論した。

【課題】

必要な食べ物を日本人がどんどん捨てている？ 今の日本人は近所の人と話さない

日本はたくさん雨が降るのに、将来は水不足？ 日本の電気やガスはほとんどが外国産？

日本ほど災害が起こるのは、世界で珍しい？ 日本は世界の中でもどんどん暑くなっていく国？



<児童生徒によるワークショップの様子>

*「未来の授業 私たちのSDGs探究BOOK」監修 佐藤 真久

【午前の部講評】 東洋大学 教授 米原あき

今日のワークに参加をして、すっきり課題が解決できることはほとんどなく、むしろもやもやして分からないことが増えたのではないのでしょうか。学校で学習することには解答があるかも知れませんが、世の中にある課題の多くには答えがありません。そんなとき、このもやもや感から目をそらさないことがとても大切です。答えが簡単に見つからない社会課題の解決に向けて、コレクティブ・インパクト (Collective impact) という考え方が大切です。種類の違う様々な力が集まると、単体では解決できない課題に対する答えを生み出すことができる、という考え方です。

また、ワークの中の「今の日本人は近所の人と話さない？」という高齢者の社会課題について、子どもチームは「(高齢者と)一緒におでかけして防犯グッズを一緒にそろえる」という案を出し、大人チームは、「高齢者を詐欺・犯罪から地域から守る方法として地域での防犯パトロールする」という案を出しました。答えのない課題について考える際には、必ずしも大人チームの案の方が良いとは限りません。皆さんも自信をもってアイデアを出していきましょう。

参加した児童生徒の感想の一部

・調べて答えを書いて発表するよりも、みんなで考え合い、答えを出し合う方が意味があることが分かりました。また防御の難しい自然災害にどう立ち向かうか考えることで、災害への意識を向けることができるんだということも分かりました。(中学校1年生)

・私たちが考えることで、そのことについての興味がわきました。他の人と自分の考えが違う時があり、「なるほど」と思いました。他の人にもこのことを伝えていきたいです。(小学校6年生)

・世界では今たくさんの深刻な問題発生していると知りました。この問題の解決案も別の視点から見ると身近にできる色々なことがあると分かりとても驚きました。また日本で行っていることを、世界へ発信していくこともとても大切であると考えました。(小学校5年生)

・小学生の意見や発想を聞き、新しい考えにもつなげることができました。多種多様な人が多く関われば、SDGsの達成に近づくのかなと思います。(高校1年生)

<考察>

課題解決の際に、意見が違うことが対立や解決の障壁となることが多いが、このワークを通して、社会課題を身近に感じ、意見交換を通して「意見が違うことが面白い。」「違う意見があることを知ることができた。」という児童生徒の感想が多く見られた。また自分たちに何かできるかもしれないと考えることができるワークショップとなった。

II 午後の部

推進校の教職員40名、他地域・ESD推進関係者35名の参加があった。

1 「ユネスコスクール全国大会」(2019. 11. 30広島県福山市開催)の参加報告

横浜市立羽沢小学校 教諭 小林 秀平 (内容はP. 88参照)

2 講演 「評価」概念の再考 ～ESDの視点から～

東洋大学 教授 米原 あき

ESDは活動が多様であるが、その評価はペーパーテスト的なものにはなじまない。ESDは何をゴールにしたらよいか分かりづらく、ESDを測る指標がないことも関係している。

そもそも評価とは価値を引き出すこと(=Extract-Value)である。その価値には、内在的な価値(=本質)・外在的な価値(=値打ち)・社会や外部にもたらす価値(=意義)の3つがあり、そのバランスが重要である。MDGsの教育目標は量的だったので比較的視覚化しやすかったが、外在的な価値の評価に偏っていた。一方、SDGsのゴール4.7は理念的であるために、評価指標を定義することが困難であると言われている。それに加えて、「学校で行われているESDの一つひとつの取組は充実しているが、学校全体の取組としてなんだかバラバラである」とか、「ESDの範囲が広すぎて、

長期にわたる方向性が見えない」また、「熱意をもって一生懸命にやっているが、果たしてこれでもいいのであろうか」などの学校現場の困難がある。そこで、ESDを含むゴール4.7は、各国の事情に応じて”翻訳”をして使用する必要があるとされている。つまりは、ESDをunpack*する必要があるということだ。

アインシュタインは、教育とは事実を学習することではなく、「思考するマインド」を鍛えることだと言っている。では「マインド」は体のどこにあるか——頭？胸？否、腹ではないだろうか。腹落ちした知は、消化されて体の一部になる。一度自転車に乗れるようになると、乗れなくなろうと思ってもできなくなるのと同じように、一生のものの財産になる。そのような学び方、思考するマインドをもってESDを実践する必要がある。

*unpacking…開封すること。

3 パネルディスカッション

(登壇者) みなとみらい本町小学校 教諭 高原 洋介 三保小学校 主幹教諭 新海 秀美

市ケ尾中学校 主幹教諭 畠中 美佳 東高等学校 副校長 鈴木 浩

東洋大学 教授 米原 あき 星槎大学 非常勤講師 和泉 良司 横浜市教育委員会 主任指導主事 岡本 覚

<各パネラーからの意見>

- ロジックモデルをもとに、評価指標をおこし、10月と1月に2回、児童アンケート調査を実施した。本校では、生活科・総合的な学習の時間を通して地域やまちを材に取り組んでいる。その結果、子どもたちは地域コミュニティへの働きかけや結びつきを強く意識するようになってきた。
- アンケートやウェビングなどによって変容を視覚化することができたが、アンケートはとる時期やタイミングによって変化する可能性があるので、子どもの姿でしか評価することはできない。知識・技能と構成概念の関係性や単元、毎時間の評価規準と能力・態度との関係性を明らかにしていきたい。能力・態度については、全学年ですべての能力・態度を育成するというよりも、低・中・高学年と分けて、重点化していく必要がある。
- 今年度の取り組んでいる、「ESD推進による変容の視覚化」というテーマは言葉の難しさがある。また、アンケートなどで変容をみることもできるかもしれないが、中学生ぐらいになると回答をする際に、教師の意図に付度して書く可能性がある。
- ESDは教科書もなく、学習指導要領にも内容が規定されないからこそ、やりやすいが、高校では教科の枠組みを超えるのが難しい。生徒の振り返りの中で、語彙5000字について、分析をしたみたことを「SD」という単語や「～になった」という変容を感じるような文言が多く見られた。



<パネルディスカッションの様子>



<米原教授の講演>

4 GCED 及び ESDに関する調査報告

東京大学大学院 准教授 北村 友人 (内容はP.65~70参照)

5 グループワーク

講演とパネルディスカッションを受け、「実践を『見直す、つなげる』・変容の視覚化(評価)に向けて」と題してワークショップを行った。ESD実践の評価について「成果」を互いに評価し、「課題」の解決策を多角的に捉えて検討するため、同じテーマについてグループを変えて話し合った。

活動は4つに分けて行った。活動1では、ESD実践の評価について「成果(青)」と「課題(赤)」を付せんに書き出して分類、整理を行った。活動2では、別のテーブルに移動し、残った人の説明を受けて「成果」と「課題」について話し合い、「賛同」意見などを書き入れ、課題の「解決策(黄)」を付せんに書き出した。活動3では、さらに別のテーブルに移り、もう一度「活動2」を繰り返した。そして活動4では、初めのグループに戻り、活動2と3で多角的に捉えられ、積み重ねられた「意見」や「解決策」を基にまとめを行った。

参加者からは、「様々な取組をしている学校の様子が分かり、エネルギーをもらった」「自校の取組の振り返りにつなげることができた」「違った角度からの成果、悩みを聞いて勉強になった」「解決に向けたヒントをたくさん聞くことができた」「自由に考えるのではなく、評価の見える化にテーマを絞ったことで、議論が深まった」といった意見が寄せられた。じっくり話し合うワークでは得られない成果があったと考えている。



<参加者によるグループワークの様子>

【午後の部講評】東京大学大学院 准教授 北村 友人

ESDは古くて新しい学びである。ESDの評価とは○・×の評価ではなく、子どもの社会性、バランス感覚を見ていくものである。

SDGsは17の個々のゴールにとらわれすぎず、新しい課題を発見し、解決策を考えるきっかけ。不完全なものである。例えば、文化に関する目標がないなど、完璧なものではない。その国、その社会のSDGsを考える必要がある。

17個のゴールで終わりではなく、無限に目標がつけられるが、究極の目的は、持続可能な世界とは「みんなが平和に生きていける世界」をつくっていくことが必要である。

ESDを進める際に子どもの学びが楽しかったという経験上にある「フォアキャスト」と同時に、どういう世界であるべきか、何をすべきかという、「バックキャスト」の両方を組み合わせることが大切である。ESDは、教科横断的な学びを求めるものであるが、中高で難しいという声を聴くが、それでよい。生徒が教科横断できているかどうか、先生がそのサポートすることが大切

第1回 ESD 推進校研修会・情報交換会

1 日時 2019年9月10日(火) 15時より

2 場所 横浜情報文化センター7F 大会議室

3 参加校

羽沢小・幸ヶ谷小・永田台小・日枝小・港南台第三小・南本宿小・太尾小・三保小・新治小・恩田小
荏田西小・いずみ野小・大門小・横浜サイエンスフロンティア附属中・西柴中・市ヶ尾中・西本郷中
中和田中・東高

4 内容

①教育委員会事務局より連絡

②講演(グループでの協議・情報交換を含む)

「ESDによる変容の視覚化(評価)に向けて
～ESDの構成概念を踏まえた推進と評価について～」

講師 星槎大学非常勤講師 和泉 良司

<概要>

ESDを推進している学校の取組について、ESDと関連付けることなく、これまで行われてきた「総合的な学習の時間」の取組になってしまっている。

ESDの構成概念について触れられていないことが多い。総合的な学習の時間の学習指導要領解説に知識及び技能に関して、概念的な理解へとつながる「多様性」「相互性」「有限性」などが例示されている。これは国立教育政策研究所が示したESD構成概念に通じるものであり、それに十分対応できていない。などの課題が示された。今後は、ESD推進をしていく上で、構成概念を軸に整理していくと良い。また、配布された資料(P.80以降に一部掲載)をもとに具体的な実践について説明があった。

③ESDの実践に関するアンケート調査について

大妻女子大学 文学部准教授 興津 妙子

東京大学大学院教育学研究科 特任研究員 八木 恵理子

ESDを推進するにあたりどのようなインプットやプロセスが重要かつ効果的かということを経験者の主観に基づいて把握することを目的に市内ESD推進校担当者を対象にアンケート調査を行うことについての説明があった。



<全体研修の様子>



<グループに分かれて協議をする様子>

第2回 ESD推進校研修会・情報交換会

1 日時 2019年10月25日（金） 15時30分より

2 場所 横浜市教育委員会事務局 花咲研修室 205

3 参加校

羽沢小・幸ヶ谷小・永田台小・日枝小・港南台第三小・南本宿小・北綱島小・太尾小・新治小・
恩田小・荏田西小・いずみ野小・横浜サイエンスフロンティア附属中・市ヶ尾中・中和田中・東高

4 内容

①教育委員会事務局より連絡

②ESD推進校担当者情報交換

ESDの変容の視覚化（評価）をすすめるにあたって～学校教育目標、育成したい資質・能力*
（能力）と実践・視覚化を統合的に捉えるために

<概要>

学校教育目標とそれをより具体化した、または学校教育目標の実現のために育成したい資質・能力、
（特にESDと関連するもの）を明らかにすることによって、育成したい児童生徒の姿が明らかにな
る。またより抽象度が高い学校教育目標について、教職員の共通理解が図られる。

次に、様々な教育活動（推進校では特にESDを意識した取組）が学校では行われているが、その取
組が、学校として目指す資質・能力育成に対してどのような意味をもつか。つまりは、児童生徒の変容
によってどのような意味をもち、その変容を教師がどのように把握できるか（＝評価）、またその変容を
良さ（＝ESD推進の価値）を共有できるかが、今年度の本市のESD推進校に依頼している研究内容
である。そのためにも、ESDの実践と学校教育を統合的に捉えるために、推進校に「ESD推進担当情報
交換資料」の作成を依頼し、それを基に情報交換を行った。

*ここでは、資質・能力とは能力・態度（国立教育政策研究所作成ESDで育成したい能力・態度）とをほぼ同意語で使用
している。



<教育委員会事務局からの説明>



<協議をしている様子>

ESDの構成概念を踏まえた推進と評価 ～ESDによる変容の視覚化について～

1 ESDとは

ESDは、Education for Sustainable Developmentの頭文字をとったもので、日本語では「持続可能な開発のための教育」と訳されるが、その意味は「持続可能な社会づくりの担い手の育成」である。

2002年我が国より「国連持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」が世界に提唱された。その後2014年に名古屋市でESDユネスコ世界会議が開催され、2015年以降のESDの取組みを推進していくため「ESDに関するグローバル・アクションプログラム」が発表され世界中で継続して取り組まれている。

2 新学習指導要領全体の基盤となる理念であるESD

中教審答申(2016年12月)において「持続可能な開発のための教育(ESD)は次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」とされ、改訂され学習指導要領の前文及び総則において「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられており、各教科等において関連する内容が示されている。

3 ESDの目指す学び

ESDは、「人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、もって持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動」としてる。

また「ESDは、地球上で起きている様々な問題が、遠い世界で起きていることではなく、自分の生活に関係していることを意識付けることに力点をおくものである。地球規模の持続可能性に関わる問題は、地域社会の問題にもつながっている。だからこそ、身近なところから行動を開始し、学びを実生活や社会の変容へとつなげることがESDの本質である」としている。

※ ESDでは「持続可能な社会づくり」を捉える要素として「構成概念(例)」とESDの視点に立った学習指導で重視する「能力・態度(例)」が示されており授業設計の要となる。

- ・ 人を取り巻く環境に関する概念 I 多様性 II 相互性 III 有限性
- ・ 人の意思や行動に関する概念 IV 公平性 V 連携性 VI 責任性
- ・ ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度
 - ① 《批判》 批判的に考える力 ② 《未来》 未来像を予測して計画を立てる力
 - ③ 《多面》 多面的、総合的に考える力 ④ 《伝達》 コミュニケーションを行う力
 - ⑤ 《協力》 他者と協力する態度 ⑥ 《関連》 つながりを重視する態度
 - ⑦ 《参加》 進んで参加する態度

参考 「ESD推進の手引き」日本ユネスコ委員会 2018年5月改訂

国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究」最終報告書 H24.3

「総合的な学習の時間」の目標と各学校が定める内容

～ ESD との関連を通して～

※ 新指導要領では全ての教科等の目標と内容が三つの柱で再整理された。

育成すべき資質・能力の三つの柱

- ①「知識及び技能」の習得（知識・技能）
- ②「思考力、判断力、表現力等」の育成（思考・判断・表現）
- ③「学びに向かう力、人間性等」の涵養(主体的に学習に取り組む態度)

(総合的な学習の時間)

1 目標の構成*1

第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。→①
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。→②
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。→③

2 各学校が定める目標及び内容

- 1 目標 各学校においては、第1の目標を踏まえ、各学校の総合的な学習の時間の目標を定める。
- 2 内容 各学校においては、第1の目標を踏まえ、各学校の総合的な学習時間の内容を定める。

各学校が定める内容とは。「何を学ぶか(学習内容)」それを通して「何ができるようになるか(育成をすることを目指す資質・能力)」、「どのように学ぶか(学習方法)」

～何を学ぶか(学習内容)～

3 目標を実現するにふさわしい探究課題※

(1) 現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題

現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題とは、社会の変化に伴って切実に意識されるようになってきた現代社会の諸課題のことである。そのいずれもが、持続可能な社会の実現に関わる課題であり、現代社会に生きる全ての人々が、これらの課題を自分のこととして考え、よりよい解決に向けて行動することが望まれている。

- ① 国際理解：地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観
- ② 情報：情報化の進展とそれに伴う日常生活や社会の変化
- ③ 環境：身近な自然環境とそこに起きている環境問題
- ④ 福祉：身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々
- ⑤ 健康：毎日の健康な生活とストレスのある社会
- ⑥ 資源エネルギー：自分たちの消費生活と資源やエネルギーの問題
- ⑦ 安全：安全・安心な町づくりへの地域の取組と支援する人々
- ⑧ 食：食をめぐる問題とそれに関わる地域の農業や生産者
- ⑨ 科学技術：科学技術の進歩と自分たちの暮らしの変化 など

(2) 地域や学校の特色に応じた課題

- ⑩ 町づくり：町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織
- ⑪ 伝統文化：地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々
- ⑫ 地域経済：商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会
- ⑬ 防災：防災のための安全な町づくりとその取組 など

(3) 児童の興味・関心に基づく課題

- ⑭ キャリア：実社会で働く人々の姿と自己の将来
- ⑮ ものづくり：ものづくりの面白さや工夫と生活の発展
- ⑯ 生命：生命現象の神秘や不思議さと、そのすばらしさ など

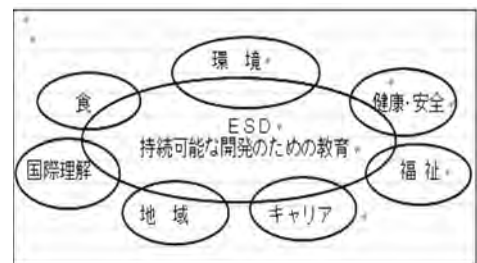


図1 ESDのとらえ方の例

※探究課題：旧解説編(H20.8)では「内容としての課題」、浜版では「内容系列」。一般的に言えば「学習内容」に当たる。

～「何ができるようになるか（育成をすることを旨とする資質・能力）」～

4 探究課題の解決を通して育成を旨とする具体的な資質・能力

(1) 知識及び技能

探究的な学習の過程において、それぞれの課題についての事実的知識や技能が獲得される。この「知識及び技能」は、各学校が設定する内容に応じて異なる。このため、学習指導要領においては、習得すべき知識や技能については示していない。一方、事実的知識は探究の過程が繰り返され、連続していく中で、何度も活用され発揮されていくことで、構造化され生きて働く概念的な知識へと高まっていく。総合的な学習の時間では、各教科等の枠を超えて、知識や技能の統合がなされていくことにより、概念的な知識については教科や分野などを越えてより一般化された概念的なものを学ぶことができる。例えば、

- ・ それぞれには特徴があり、多種多様に存在している(多様性)
- ・ 互いに関わりながらよさを生かしている(相互性)
- ・ 物事には終わりがあり、限りがある(有限性)

などである。探究の過程により、どのような概念的な知識が獲得されるかということについては、何を探究課題として設定するか等により異なる。例えば、「身近な自然と、そこに起きている環境問題」を探究課題として設定した場合は、

- I 多様性「生物は、色、形、大きさなどに違いがあり、生育の環境が異なること」
- II 相互性「身近な自然において、生物はその周辺の環境と関わって生きていること」
- III 有限性「自然環境は、様々な要因で常に変化する可能性があり、一定ではないこと」

などが考えられる。この例では、直接的に学習で関わる対象は「身近な自然」であるが、それを探究的に学習することを通して獲得される概念は、身近な自然だけに当てはまるものではなく、例えば広く持続可能な社会づくりに関わる様々なテーマについて考える際にも使うことができる概念的な知識ともなりうるのである。

<参考>ESD:持続可能な社会づくりの構成概念(例)では具体的に以下の3点が加えられる。*2

- IV 公平性(地域や世代を渡って公平・公正・平等であること)
- V 連携性(多様な主体が順応・調和し、互いに連携・協力すること)
- VI 責任制(将来像に対する責任あるビジョンを持ち、それに向かって変容・変革する)

各学校が目標や内容を設定するに当たっては、どのような概念的な知識が形成されるか、どのように概念的な知識を明示していくかなどについても検討していくことが重要である。

技能についても、探究的な学習の過程が繰り返され、連続していく中で、何度も活用され発揮されていくことで、自在に活用できる技能として身に付いていく。各学校においては、探究的な学習の過程に必要な技能の例を明示していくことなども考えられる。

(2) 思考力、判断力、表現力等

課題の解決に向けて行われる横断的・総合的な学習や探究的な学習において、

①課題の設定 → ②情報の収集 → ③整理・分析 → ④まとめ・表現の探究的な学習の過程が繰り返され、連続することによって実現される。この過程では、「探究的な見方・考え方」を働かせながら、それぞれの過程で期待される資質・能力が育成される。この資質・能力については、これまで各学校で設定する「育てようとする資質や能力及び態度」の視点として「学習方法に関すること」としていたことに対応している。

(3) 学びに向かう力、人間性等

「自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方の視点を踏まえること。」と示した。自分自身に関することとしては、主体性や自己理解、社会参画などに関わる心情や態度、他者や社会との関わりに関することとしては、協働性、他者理解、社会貢献などに関わる心情や態度が考えられる。

～「どのように学ぶか」学習のあり方～

教科横断的な「考えるための技法」について探究的な過程の中で学び活用する。この意義は「情報の整理・分析の過程で思考力、判断力、表現力等を育てる」、「協同的な学習を充実させる」、「考えるための技法を意識的に使えるようにする」の三点である。以下に考えるための技法例を示す(便宜的に①～⑩とした)

①順序付ける

②比較する

(注) ②～⑥ : ESDで重視する能力・態度*2

③分類する

④関連付ける : ⑥《関連》つながりを尊重する態度

⑤多面的に見る・多角的に見る : ③《多面》多面的、総合的に考える力

⑥理由付ける

⑦見通す(結果を予想する) : ②《未来》未来像を予測して計画を立てる力

⑧具体化する

⑨抽象化する

⑩構造化する

*1 指導要領解説 総合的な学習の時間編 H29.6 文科 *2 学校における ESD に関する研究 H.24.3 国研

2 アンケートを活用した取り組み

学習を通して身に付けさせたいESDの構成概念及び能力・態度に関するアンケートを実施し、児童の変容を見取る取り組みを行った。

次のアンケートは、平成28年度の第5学年の児童に実施したアンケート結果である。

1 教科・単元名

国語科「筆者の考えをとらえて、自分の考えを友達と交流しよう」

教材名 「見立てる」野口 廣 「生き物は円柱形」本川 達雄

2 身に付けさせたいESDの構成概念及び能力・態度

【構成概念 I 多様性】

教材文「生き物は円柱形」の中で筆者は、多様な生き物の中から共通性を見いだすことの面白さを読者に投げかけている。チョウの羽や木の葉についての例を読み取り、多様な生き物の中にも共通性があることについて考えることを通して、生き物の多様性について改めて考えられるようにしたい。

【能力・態度 ①批判的に考える力 ③多面的、総合的に考える力】(アンケート方)

本単元では、筆者が自分の考えを伝えるために文章構成や表現を工夫していることに気付き、その考えを要約する力を身に付けさせたい。さらに、自分の経験や知識などをもとに筆者の考えに対する自分なりの考えをもつことで、批判的に物事を捉える視点を身に付けさせたい。筆者の考えに共感する児童も、筆者の考えのどのようなところに共感したのかを考えることで、情報を鵜呑みにするのではなく、読み取ったことについて自分なりに考えるきっかけにしたい。

そして、自分の考えを友達と交流する中で、自分の考えを広げたり深めたりすることを通して、多面的な見方をする力を高めたい。

3 アンケート調査方法

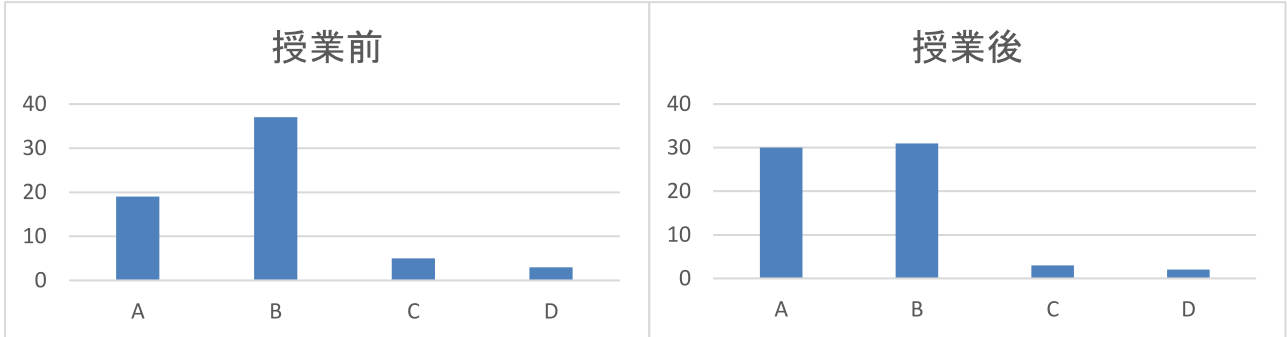
次の3点について「A とてもそう思う」「B そう思う」「C あまりそう思わない」「D そう思わない」の4つから、児童が自分の意識に近いものを選択する方法とし、学習前と学習後の2回実施した。

- | |
|--|
| <p>① ものごとを比べるとき、共通点や違いに目を向けていますか。</p> <p>② 人の考えをそのまま受け取らず、よく検討して取り入れていますか。</p> <p>③ ものごとを考えるとき、一つの考え方・見方だけでなく、他の考え方や見方があるかもしれないと考えていますか。</p> |
|--|

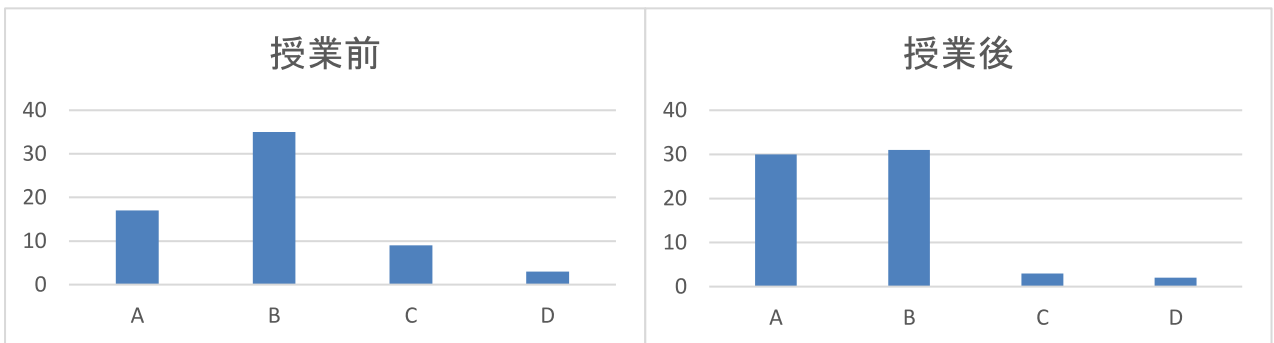
4 アンケート結果 (N=66 数値は人数を表す)

「A とてもそう思う」「B そう思う」「C あまりそう思わない」「D そう思わない」

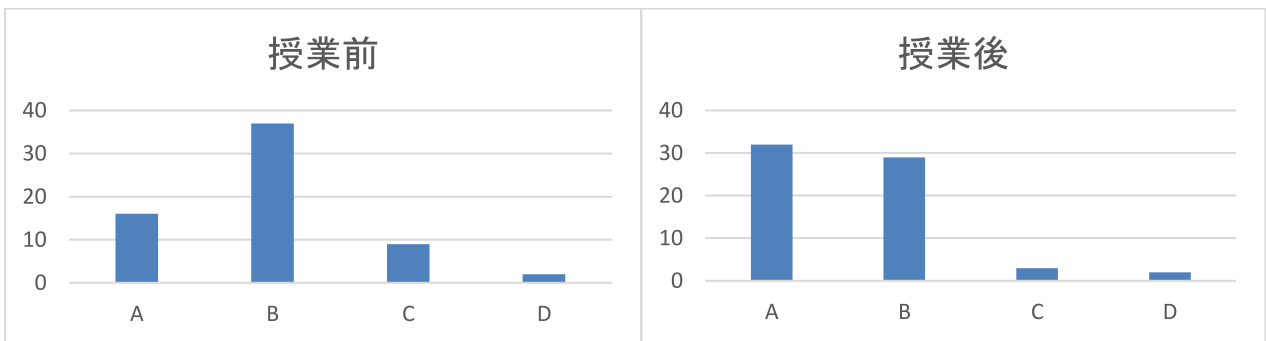
① ものごとを比べるとき、共通点や違いに目を向けていますか。



② 人の考えをそのまま受け取らず、よく検討して取り入れていますか。



③ ものごとを考えると、一つの考え方・見方だけでなく、他の考え方や見方があるかもしれないと考えていますか。



5 考察

3点ともに、学習前に比べて、「A とてもそう思う」「B そう思う」を選ぶ児童が増えている。学習を通して、共通点や違いに目を向ける意識や、批判的に考えたり多面的、総合的に考えたりする能力・態度を育てることに結びついていると分析できる。

アンケート調査は質問項目や実施時期などによって結果も大きく異なる。児童の変容を見取るためのよりよいアンケート調査の方法を検討しながら、今後も研究を深めていきたい。

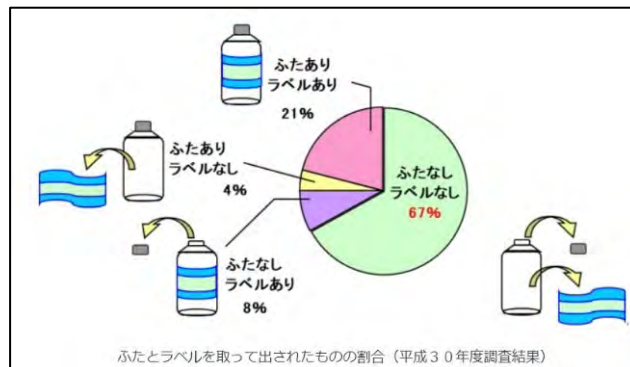
横浜市E S D推進協力者としての取組

出前授業：ペットボトルのリサイクルを通じて社会の課題について考える

(総合的な学習の時間と事業者との連携による児童の変容)

横浜市資源リサイクル事業協同組合企画室長 戸川 孝則

横浜市ではペットボトルを家庭から出す場合、キャップとラベルを外してから出すというルールなのですが、約3割(年間約1億4千万本)が外されていません。ペットボトルのリサイクルには、品質ガイドラインが定められていて、これ以上の悪化はリサイクルに支障をきたす恐れがでてきました。



市場小学校4年2組の子どもたちは公益社団法人横浜市資源循環公社の3R(リデュース、リユース、リサイクル)出前授業で、ペットボトルリサイクルの現状と課題を知り、総合的な学習の時間を活用し課題の解決に取り組みました。

3Rの授業の後、ペットボトルからポリエステル繊維を作る実験の出前授業(2回目)を行い、目の前でペットボトルが生まれ変わる体験をした子どもたちから、「このままじゃいけない。何とかしなくちゃ。」という意見が数多く出てきました。その後、4年2組クラス全体でペットボトルリサイクル課題解決に取り組むこととなりました。



市場小の町の中を調査したところ、自動販売機では、キャップとラベルを外さないでも捨てられることに気づきます。「どうして自販機のリサイクルボックスではキャップとラベルが付いたままになっているの!？」

この疑問解決のため、全国清涼飲料連合会に連絡し、直接、お話を聞きました。しかし様々な事情から、子どもたちの思う明快な回答が得られませんでした。その後、子どもたちは自らの力で活動を開始します。

一つ目は「誰もがキャップとラベルを分けたくなる未来のリサイクルボックスの創造」です。清涼飲料自販機協議会が行っていた「清涼飲料自販機アイデアコンテスト」にクラス全員で応募して2作品が入賞をしました。

二つ目は「ペットボトルの分別100%を市場小の周りから横浜市全体に広げる」です。11月に開催された「いちばフェスティバル」では、今まで学んだ「3R」、「ペットボトル分別問題」だけではなく、この取組が世界につながっていることを知り「海洋プラスチック問題」や、「SDGsに取り組む重要性」についても来校された市民の皆様へ向けてブース発表と寸劇で情報発信をしました。

市場小学校4年2組では現在、ペットボトルを原料にして作ったポリエステルの布地を使い、マイバッグを作成しています。このマイバッグを地域の皆様とシェアする仕組みを作り、市場小から横浜を、そして世界を変えることに取り組んでいます。持続可能な未来を創る子どもたちの取組は、これからもまだまだ続いていくことでしょう。



【担任教師から見た児童の変容】 横浜市立市場小学校 主幹教諭 山本 功次郎

普段の授業とは異なる外部講師との出会いや豊かな体験から始まる学習活動は、課題解決学習の導入として大変有効であり、そこで生まれた材への思いや切実感は、その後の活動の原動力であり続けた。本活動を通して児童は、環境や資源に対する意識の高まりのみならず、社会に対して行動を起こせることを知ったように思う。「自分たちが行動すれば社会は変わるかもしれない」このような社会参画意識の芽生えは、持続可能な未来を創る子どもたちの育成に欠かせない要素であると感じた。

「未来ロード～環境絵日記卒業生のそれから～」

(環境絵日記と卒業生との30分)

2019年12月8日、環境絵日記の20周年を記念して、過去に環境絵日記へ参加していただいた、卒業生(中学生、高校生、大学生、社会人の4名)とのクロストークを横浜港大さん橋国際船旅客ターミナルで開催しました。

環境絵日記に参加した後での生活の中の変化をお聞きしたところ、卒業生から、大学生になり環境系の授業を選択し、環境関連のイベントにスタッフとして参加している話や、「現在は小学校の先生として横浜市内で勤務している。環境絵日記に参加して『環境について考えるきっかけをどうすればみんなに与えられるか』と考えた経験も、小学校の先生になろうと思った理由の一つ。」など、環境絵日記への参加が様々な行動変容を生んでいる話を聞くことが出来ました。

また、こんなメッセージもいただきました。

・若い世代が世界を見るようになると視野が広がる。戻ってきたいと思う町に横浜がなってほしい。(高校生)

・子どもは大人の影響を受けるが、環境に関しては子どもが大人に影響を与える時代になっている。(大学生)

私たち大人はこの言葉をどう受け止めるべきでしょうか。登壇者が口々に発信していた、「みんなで協力して」どう実現させるのかが、持続可能な社会づくりの担い手を育むことに繋がると感じました。



「社会課題の本質を探す力を育む」と「企業の社会的使命への意識の醸成」（環境絵日記の2つの効果）

2000年から始まった環境絵日記。20回目の今年は、横浜市内の174の小学校から15,314作品が集まりました。ここ数年、子どもたちの作品に気候変動（気候危機）を取り上げた作品が多いのは、子どもたちの危機感の表れと言えるのではないのでしょうか。

今年の応募の中に「六年間の環境絵日記の成果」という作品がありました。そこには『低学年には「環境」の意味はわからないが調べることから始めた。中学年の頃は、環境絵日記に何を書こうかと環境のニュースに注意するようになった。そして6年生では、環境問題の解決は自分の生活を見直し変えていくことから始まると気づいた』と作者の6年間の変化が描かれていました。

環境絵日記には子どもたちが社会の一員として社会の課題に興味を持ち、課題の本質を探す力を育む効果があるのではないのでしょうか。

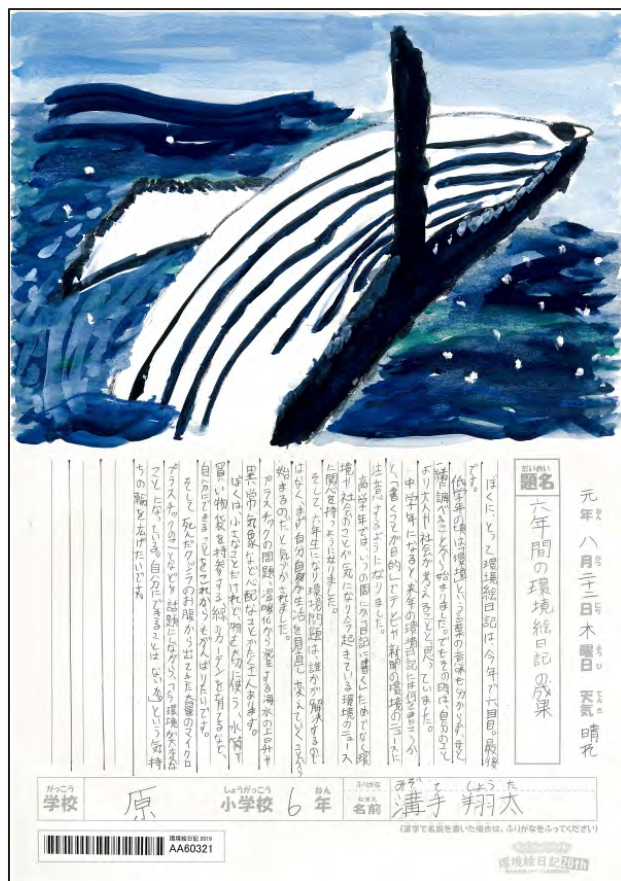
昨今、SDGsを経営に取り入れる企業が増えてきました。そしてその企業の多くが、社員一人一人の社会課題の解決への参加意識の醸成が、SDGsを実現するための重要なポイントになると考えています。環境絵日記を20年間取り組んだ結果、子どもたちだけではなく、周囲の人々にも影響を与える事例がありました。

環境絵日記の地域企業賞を授与している会社の中には、社員全員で作品の選考を行っている企業があります。その社長さん曰く、社員の皆さんが作品を選ぶ際に考える「どの作品を我が社は選ぶべきか」という思考が、「我が社はどんな社会課題を解決する企業なのか」という問いに繋がり、「企業の社会的使命」への意識が、会社全体で向上したというのです。また、「ミストロンで快適な夏」という作品の作者は、作品を見たドローンを開発している企業から、ドローンの可能性についてヒアリングのオファーを受けるという事例もありました。

環境絵日記には子どもたちの考える社会課題の解決策が「未来の地球のあるべき姿」として描かれています。そしてそのバックキャスト思考こそ、人類がSDGsを実現するためには欠かせない考え方だと言われています。

子どもたちのアイデアを「世の中の仕組み」の再構築（トランスフォーム）に役立てたい

今後、環境絵日記の子どもたちのアイデアが、社会課題の解決に活用される時が来るのかもしれない。



1 参加した分科会の概要

参加分科会

【ワークショップ】

「ESDの視点で教員の働き方改革を実現する

—組織改善を視点としたホールスクールアプローチ」②

横浜市立日枝小学校長の住田先生がファシリテーターを務めるワークショップでした。学校の持続可能性を考えると切り口から、先生方の働き方を自分自身で問いかけ、自分自身で行動変容を起こしていこうという内容のワークショップでした。

2 ESDの資質・能力につながると感じたこと

今回の分科会で、一番考えさせられたのは「日々の働き方の中で『自己決定』をどれくらいしているか」ということでした。

分科会の中では、自分が考えている悩みを伝え合う場面がありました。他県の先生方（中には、私立中等教育学校の校長先生もいらっしゃいました）と悩みを共有していく中で、やはり日々の業務に追われている現状が様々な形で、どこでもあるのだなと感じました。ただ、その中で、私は「それぞれの仕事を個々がどのような思いで行っているか」ということが大切ではないかという思いをもちました。確かに、業務の精選は必要不可欠なことで、仕事の絶対量自体が少しでも軽減されることが働き方改革の一つの方向性であるとは思いますが、しかし、日々の業務においても自分で仕事のやり方を選んだり、仕事の順序を選んだり、仕事の軽重（どの仕事にも軽いものなどはありませんが…）を自分で決めたりすることで、自分の仕事に対するモチベーションが変わっていくのではないかと思います。いわゆる「やらされ感」があることが大きな負担となっているように感じました。

そのために大切なことは、自分の考えなどをアウトプットすることだと思いました。自分の感じていることや、自分の大切にしていることなどを互いが理解し合い、尊重し合える環境を整えることが大切であり、共感的に互いのことを思うことができる関係作りが大切だと思いました。そして、アウトプットすることで、自分の中でもその思いが確かなものになると感じました。分科会の中で「自分のやりがいと感じた時を紙に書いたり、伝えたりすることで少しでも前向きに仕事ができるのではないか」という意見を述べた方がいました。この意見に私は感銘を受けました。やはり、思いを伝えたり、表現したりする中で、人間関係も形成され、互いを気遣い、よい働き方にもつながるのかなと感じました。

そして、このアウトプットするということは、子どもの身に付ける資質・能力ともつながると考えています。今の子どもたちが社会に出るころは、今より多様化した社会であると考えられ、子どもたちはその多様な他者と人間関係を形成し、互いを尊重し合う能力が求められます。自分の言葉で語れる子どもを育てることは、持続可能な社会の創り手を育てることにつながっていると感じています。

ワークショップの結びで、住田校長「教職員の Happy が子どもの笑顔になる」という中で、自己決定の重要性を伝えていました。また、これからの時代は「正解がない問いと共に生きる時代」ともおっしゃっていました。その時代の中では、対話を続け、学習者が意思決定を粘り強く続けていくことが大切だと感じました。よく、授業の中で、「分からなくても言ってごらん。」とか、「間違えてもいいんだよ。伝えることが大切だよ。」と自分自身よく言っていますが、これからの時代は、本当にそういった状況でも他者と手を取り合い、課題解決に向けて取り組み続ける子を育てていかなければいけないと強く感じました。まずは、自分自身から、たくさんの仲間に声をかけ、自分から伝えていくことを大切に頑張っていこうと感じました。

ユネスコスクール全国大会参加報告

横浜市立永田台小学校

教諭 竹川 元太郎

【分科会の概要】

分科会名：第5分科会 持続可能なESDのための教員の資質・能力の育成

ESDの実践の紹介が2例

1 例目：学校全体を巻き込んだ中学校でのESD実践

2 例目：NPO 法人が主導して行ったESDの実践例

【ESDの資質・能力に関して】

どちらの実践も、どのように取り組んだのかという事例の紹介であった。

中学校の実践では、担任を受け持たないESD推進委員長という立場の職員が、学校全体の研究をどのように進めたのかという内容であった。

生徒が学習を横断的に取り組めるように、総合的な学習の時間を「リベラルアーツ」という教科を限定しない科目にしたこと。ESD推進委員長と学級担任がいつでも相談できる人的環境を整えたこと。大きくこの2点が大きな成果であったと捉える。

NPO法人の実践では、小学校でESDの考えを取り入れ、育成したい子ども像を共有することにより、幼保小中の15年間を見通して、学校経営、地域経営が実現したという提案であった。

NPOがつなぎ役となり、地域の教職員が集まって話す場を設定していた。様々な子どもの様子を語り合うことで、互いの理解が深まり、学校間での連携も生まれたということであった。この15年間を見通した学校経営は、理想的である。

横浜市では、幼保小連携、小中連携（ブロック連携）がそれぞれで進んでいる。特に、新学習指導要領における、9年間を見越した子ども像についてである。充実した話し合いを通して、どの学校においても共通の理解が図られていると言える。15年間を見通した、幼保小中連携を進めるために、まずは、今以上に各連携の充実を図ることを大切にしていきたい。

ESDを推進している各学校としても、横浜市としてもリーダー教員の育成が必要であると考え。現状は、専門教諭を校内で位置付けるだけの人的余裕はないが、校内の研究主任もしくはそれと同等の立場の教員がその役割を担うことで、研究を推進することができると言える。

本校では、ESD for SDGsの視点を大切に引き続き研究を続けていく。この視点をもって重点研（本校では、共同研）の核として扱っていくことがリーダー教員の育成だけでなく、教職員全体の資質・能力の育成につなげていくことができる。

重点研の中で扱っていくためには、学習材や地域人材を確保し、具体的な実践に繋げていく。実践を通して各教職員の資質・能力の育成にどのようにつなげていくのか、育成の成果や課題をどのようにして把握していくかが課題となる。

ユネスコスクール全国大会参加報告

横浜市立市ケ尾中学校

主幹教諭 畠中美佳

【分科会の概要】

第8分科会 平和のための学び ESD for SDGs

第8分科会では、小中学校の各校種から三つの実践報告がなされた。

岐阜市立島小学校からは、地元のユネスコ協会とも連携しながら「枝豆バザー」や「カンボジアとの交流」について報告があった。地元の特産品である「枝豆」を題材として用い、栽培から販売までを体験させ、地元地域との協働を実践していた。

大牟田市立宮原中学校からは、学区にある世界遺産「宮原坑」「炭鉱専用鉄道敷跡」を英語で紹介・発信する取組について報告があった。この取組をとおして、自分たちの生まれ育った地域を再認識させることで、地域への愛着心や誇りをもたせることができ、持続可能なまちづくりへの一助となっているように感じた。大牟田市は市内のすべての小学校、中学校、特別支援学校（全28校）がユネスコスクールに認定され、各校がそれぞれ工夫をこらしSDGs達成に向けて取り組んでいる。また、大牟田市は本年度「SDGs未来都市」にも認定され、子どもたちを含めた市民全体で取組を始めた様子が伝わってきた。

長野県立中野西高等学校からは、校務分掌に「ユネスコ委員会」という部署を位置づけ、教科横断的な取組ができるよう検討し実践していると報告があった。SDGsの17の目標の中から、高校生が取り組めるものを選び、それぞれの活動と結びつけて達成をめざす様子がよくわかる内容であった。1年間の教育活動をESDの視点で振り返り、SDGsと結びつけ具体化してあり大変興味深かった。ユネスコスクールとしてさまざまな活動に取り組む中で、生徒たちにESD活動の普及と総括を行う「ユネスコウィーク」の設定も参考になった。

今回、3つの学校からの実践を聞き、どの学校も地域を巻き込みながらESD活動に取り組んでいる姿が印象的であった。市ケ尾中学校も地域との協働を取り入れながらさまざまな活動をすすめている。20年前から続けている、キャリア教育を主眼に置いた「わくわく交流会」では、地域で暮らす方を講師に招き、20を超える講座を開設している。

また、今年度で3年目を迎えた、まちづくりに主眼を置いた「市ケ尾ユースプロジェクト」の取組にも、地域で活躍する大人の方や高校生と共に、活動をすすめている。これらの活動をとおして、地域で自分にできることはないかと、「地域の中の自分」を見つめることができつつあるように感じる。

3年前からは、生徒会を中心に「海洋プラスチック問題」に取り組んできた。WWFとの学習会や生徒のリーダー組織である中央委員会での話し合いを重ね、その内容を全校生徒に発信し、全校生徒で課題を共有しながらすすめてきた。「今自分たちが取るべき行動」や「中学生である自分ができること」について考えることができる取組となった。今後は、この取組を地域へと広げていく活動に取り組んでいきたいと考えている。

「誰も置き去りにしない」というSDGsの理念は、地域との協働や環境問題を解決するうえでは、欠かせない考え方である。今回の3校の実践報告を参考に、これまで取り組んできた教育活動をESDの視点で見直し続け、「持続可能な社会を創る担い手」を育成するために力を尽くしていきたい。

ユネスコスクール全国大会参加報告

横浜市立東高等学校
副校長 鈴木 浩

参加分科会 第10分科会ユネスコスクールが行う海外連携

私は、第10分科会「ユネスコスクールが行う海外連携—海外の事例から地域の課題を学ぶ」に参加しました。岡山市役所 ESD 推進課の内藤元久氏と岡山県立矢掛高校の高木潤教諭による報告のあと、グループディスカッションを行うという内容でした。

岡山市は市を挙げて ESD に取り組んでおり (SDGs でなく ESD)、この中心となっている市役所の内藤氏が、キーパーソンとして非常に有効に機能していることがよく分かりました。

報告内容は、平成26年のユネスコスクール世界大会・高校生フォーラムが岡山市で開催されたことから、その成果を継続するために、まず、ネットワークづくりがはじまり、毎年、「岡山県ユネスコスクール高等学校実践交流会」が開催されていることでした。国際交流という点では、岡山市が、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとしてブルガリアとの交流が始まったことから、その活動を活用してユネスコスクールの国際交流を展開しているということが主なものでした。

この報告及びその後のグループディスカッションから学んだことを挙げてみます。

- 岡山市が中心となって ESD を推進しており、その中心に内藤氏がおられるということ。この力が非常に大きい。
- 岡山市の施策でありながら、市外の高等学校や私立の高等学校も区別なくネットワークに入れ込んで展開しているということ。(市教委単位ではない)
- 岡山市では、もともと公民館の活動が活発で、社会教育と学校教育をうまくつないでいること。
- 海外との連携をするときに、国連大学や大使館と連携をとるとよいというアドバイス。
- 海外との連携や、NPO 等さまざまな団体との事務連絡等、煩瑣な業務は市役所が請け負い、学校は実践を中心に、できる範囲で進めているということ。

このように、内藤氏の動きが非常に柔軟で、いろいろなところをつなぎ、しかも市外の高校も受け入れた事業でも市が財政的な支援をしています。縦割りになっていないという感じがしました。

そして、ヒントになることとしては、やはり行政の方が中心にいて、公民館とつないでいるということです。それと、岡山市には「条例」があるそうです(岡山市持続可能な開発のための教育の推進に関する条例)。さらに ESD 推進課という課がある。これらのことにより、学校が非常に動きやすくなっていること、「教育」が「学校教育」に限定されずに「社会教育」と結びついていることにことなどに感心させられました。

横浜市は SDGs 未来都市ですから、こうした岡山の取組を、ぜひ参考にしていきたいと考えます。ただし、国際交流という視点では、あまり学ぶことはなかったと思います。横浜市は自分のフィールドに多くの国際的なイベントは多文化共生の基盤を持っていますし、世界的なイベントもたくさんあるので、そういうメリットを十分に生かして、ESD を推進できたらと思いました。

最後に、グループディスカッションで、どのグループからも出された意見として、財政的な支援の問題があります。特に、海外と交流するには、さまざまな経費がかかります。このハードルが極めて高いと思いました。それと、小中高特別支援などの校種を超えて、それぞれの利害も超えて、さらに幼保、大学、社会教育諸団体・施設、企業、NPO などが連携しないと、これから先の展開は難しいし、そのキーパーソンが極めて重要だと考えました。

ユネスコスクール全国大会参加報告

横浜市立永田台小学校
教諭 菊池 沙季

【分科会の概要】

分科会名：SDGs の教材開発をどのように進めるかー児童生徒の行動変容を中心にー

SDGs 達成のための教育の役割として **Transformation (変容)** が1つの重要なキーワードとして挙げられている。そこで、本分科会では、この問いに向き合うユネスコスクール教員2名（横浜市立永田台小学校教諭 飯干 望、福山市立福山中・高等学校教諭 上山晋平）の事例報告を通して、児童生徒の変容を促すために、学校教員がSDGsに関わる書籍や教材をどのような視点で選択し、活用しているのか知ることができた。また、分科会参加者同士の対話を通して、SDGsをどのように学校現場で展開をしていくのか、自身の問いをもちながら、対話をすることで明日への一歩を踏み出す手がかりとなった。

【ESDの資質・能力に関して】

○飯干教諭の発表報告を聞いて

飯干教諭は、日々の学校生活に「SDGs レンズをかけてみる」という視点を大切にしていた。それは、本校でもみじアプローチとして、ESDを推進していったのと同様にSDGsに取り組んでいるということである。SDGsありきの学習活動を展開するのではなく、日々の学習、学校生活、学校運営がSDGsの視点を通すことで、「誰一人取り残さない」という大事なテーマとともに、学校全体でSDGsに取り組むことにつながっていく。一方で、「ESDの質を高める」ということは本校の課題でもあると感じている。本校が求める「ESDの質とは何か」これは、対話を通して、言葉にしていく必要がある。そうすることで、子どもたちが身に付ける資質・能力が明確になる。また、それを明確にすることで今あるESDの取組も一層豊かなものになると考える。

○上山教諭の発表報告を聞いて

上山教諭は、ESDの推進を構造化することでESDを柱にした学校運営を実現させた。3つのプロジェクト化をすることで、学校の特色を出し、担当教諭を割り振り、教職員みんなに関わることができると感じた。また、福山中高で育てたい6つの資質・能力を評価するために、管理職、教育研究部、各主任と何度も熟考したことが発表から垣間見えた。学校全体をルーブリック評価することで、ESDによる変容（成果）と課題が明らかになっていた。学校独自の評価を作成することは、労力はかかるが、一定の成果も見られることが分かった。

○参加者との対話を通して・・・

約40分間、各都道府県の小学校教員と対話することができた。この時間が長く取れたことが、大変よかったと思う。どの学校もSDGsを学校全体でどのように推進していくのか、ということ悩んでいた。しかし、飯干教諭と上山教諭が話していた中で、無理なく推進していくこと、今ある活動をSDGsの視点でつないでいくことを大切にするすることで、学校活動を見直すことができたようだった。「つないだその先をどうしていくか」新たな問いも生まれた。

ユネスコスクール全国大会参加報告

横浜市立日枝小学校
主幹教諭 高木 広希

「環境問題を生徒が『ジブンゴト』とする取組」をテーマにした第7分科会に参加した。

この分科会に参加して、「環境」をテーマに学習を進める中での一番の課題は「対岸の火事からの脱却」であるという言葉が印象に残った。

対岸の火事として挙げられたのは、時間的・空間的・人間的の3つであった。

SDGsでは「2030年（10年後）」、報告をした青陵中学校では「2050年」という時代を目指して目標を設定している。しかし、大人にとってもなかなか見通しがもてない未来の状況に対して、子どもたちが「ジブンゴト」としてその未来の状況を考え、すぐに実践をしようとする態度を育てることが課題として挙げられていた。

「正常性バイアス」という言葉も取り上げられていた。他の国で起こっていることや、他の地域で起こっていることに対して人はどうしても「他人事」として考えてしまう傾向がある。人として、精神の安定を図るために備わっている力であるが、その結果「環境問題」についてはどうしても「他人事」になってしまう。まずは、教える立場にある教師側、大人側から意識を変えて、持続可能な世界をつくるために、自分にできることは何かということ「ジブンゴト」として考え、実践しようとする意識改革が必要であると考えた。

また、パネルディスカッションに登壇した中学生、高校生の発表を聞いて「自分の思いを他者に伝える力」が、今後、本校が研究している生活科、総合的な学習の時間で大切にしていきたい資質・能力の核になると感じた。そして、その力こそが、ESDの資質・能力の核になると考えた。

本校では、学校教育目標「生き生き日枝っ子」に向けて、主体的に探究する子どもの姿を目指して研究を進めている。

- ①地域やまちの中で自分たちが見つけた課題に対して、自分の思いをもつこと。
- ②自分の思いを実現するために、様々な問題の解決方法を考えること。
- ③自分たちで考えた解決方法をもとに、実際の問題を解決すること。
- ④自分たちの思いを、地域やまちの人に発信すること。

の4つの過程を繰り返しながら活動を進めていく中で、自己有用感を高め、「自分が好き」と言える子どもを育てることを期待している。

活動の中で常に必要な資質・能力となっているのは、まさに「自分の思いを他者に伝える力」である。同じ価値観をもった仲間自分の思いを伝える場面ばかりではなく、価値観の違う仲間自分の思いを伝えなければならない場面もある。また、地域やまちの人に向けても、自信をもって「自分の思い」を発信していく場面がある。

本校の児童は、他校からの参観者やまちの人から、「『自分の思いを他者に伝える力』がとても優れている。」と誉めてもらえることが多い。より一層、どの児童にも、確実にこの資質・能力を育てていきたい。

UNESCO ESD Global Conference (2019 ESD 教師教育世界大会) 参加報告

小中学校企画課
指導主事 渡辺 徹

参加日：2019年11月22・23日

開催場所：岡山大学50周年記念館・教育学部

ESDを推進するにあたり、各国各地域共通の課題は、各国各地域で様々な生活環境・学校現場の人材や意識、文化などの実態が異なり、指導内容や指導方法を一般化することが難しいということである。つまり、ESDは必要だと思いが、何をどうしたらよいかかわからないということである。

各国各地域での実践内容は非常に興味深いが、扱った指導内容や効果的であった指導方法は、その地域の実態に即したものであり、汎用性は低い。つまり、ESDを推進するためには、各国各地域の生活環境・学校現場の人材や意識、文化などの実態を把握し、それを基に見出した課題を世界的な課題とも関連付けながら指導していくことが求められている。そのためには、持続可能な社会の創り手の育成という視点で指導していくことが前提となり、従来の指導内容ありきの授業や講義型の指導方法を見直し、今までのように各教科等の指導を並列的に行うのではなく、教科横断的に指導し必要な資質・能力を育成していくといった視点や意識の転換が必要になる。

また、このような教育活動は、学校だけで進めていくのではなく、学校と行政と民間の連携・協力体制を整え、それぞれが効果的に機能していけるようにしなければならない。横浜市のように行政である教育委員会がESDの連携・協力体制を整える主体となっていることは珍しく、これからの横浜市のESD推進の取組は注目されることが考えられる。

【1日目 アジア地域でのESD/GCEDについてのディスカッション】

日本・中国・モンゴルでのESD/GCEDの実態や課題を出し合い、それらの解決策を話し合った。また、別グループと実態や課題、解決策の交流をし、相手のグループの課題に対する解決策を話し合い提案した。最終的には、相手のグループの解決策も踏まえて政策提言を考え、全グループが発表した。

本グループで出た課題は、言語の壁による各国各地域のESD/GCEDについての理解の差や推進者の育成の難しさであった。また、学校と行政と民間の連携・協力体制がうまく機能していないといった課題も挙げられた。

【2日目 ESDを推進するための地域拠点についての実践報告】

みなとみらい本町小学校のホールスクールアプローチによるESDの推進と、その取組の背景にあるロジックモデルによるプログラム評価について、みなとみらい本町小学校の教員と東洋大学の米原先生から実践報告を聞いた。まず、学校教育目標から育成したい資質・能力を設定し、それらを育成するための具体的な活動というように、目的と手段の関係を明確にしてカリキュラムを作成する。そして、活動を通して子どもの変容を見取り、資質・能力が育成されたかを評価し、カリキュラムを改善していくサイクルを、学校と行政と民間が連携・協力し機能させていた。課題としては、公立学校は教職員の異動があるため、ホールスクールアプローチやロジックモデルによるプログラム評価についての理解や意識の差が生まれることが予想され、カリキュラムマネジメントが今後も機能していくかということが挙げられた。

これからも横浜市教育委員会が学校と民間の連携・協力体制を整える主体となり、各学校の実態に即した方法でのESDの推進に寄与し、SDGs達成の担い手の育成をより一層進めていきたい。



2019 ESD Teacher Education World Congress
**ロジックモデルを用いた
プログラム評価の実践**
 PRACTICE OF PROGRAM EVALUATION
 BY USING LOGIC MODEL

横浜国立大学みなとみらい本町小学校
 MINATO MIRAI HONCHO ELEMENTARY SCHOOL

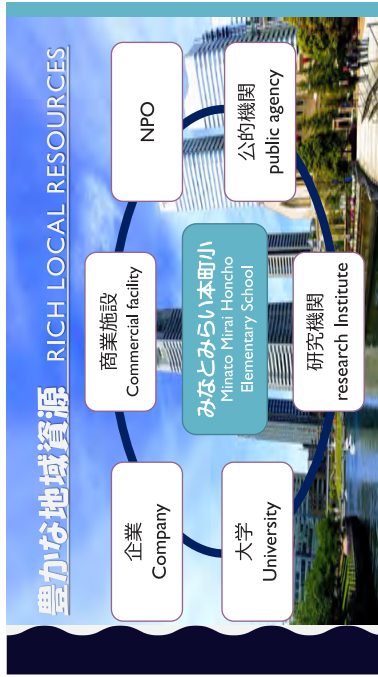



みなとみらい本町小学校の紹介
 INTRODUCTION OF MINATO MIRAI HONCHO
 ELEMENTARY SCHOOL

学校基本情報 SCHOOL BASIC INFORMATION

- 開校：2018年4月
Opening: April 2018
- 学級数：15学級
Number of classes: 15 classes
- 児童数：316名
Number of children: 316
- 所在地：横浜市西区高島1-2-3
Location: 1-2-3 Takashima, Nishi-ku, Yokohama

港湾部の新しいまちづくり
 “みなとみらい”計画
 NEW TOWN PLANNING FOR “MINATO MIRAI PLAN”

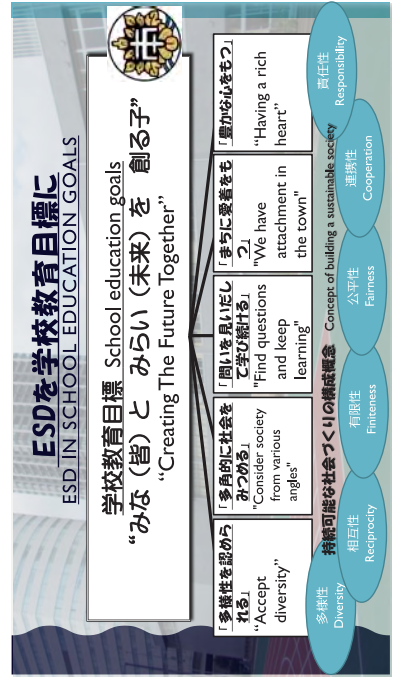
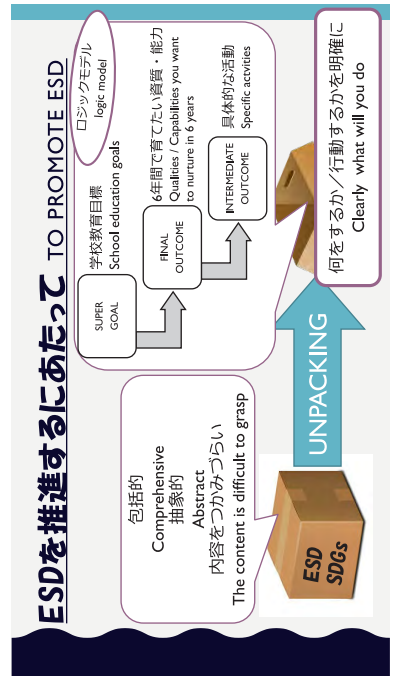



みなとみらい地区 MINATO MIRAI DISTRICT

開校宣言
 横浜の経済賑わいの中心で
 あり水と緑と歴史に囲まれた
 潤いある都市づくりの
 基盤を築き活かし持続可能な
 社会の担手を育む小学校として
 発展することを期待し
 小学校の開校を宣言します
 平成三十年四月二日
 横浜市教育委員

みなとみらい
 Minato Mirai
 Honcho Elementary
 School

Elementary school nurturing
 leaders of a sustainable society





ESD / SDGsを学校経営で可視化する
 VISUALIZING ESD / SDGS
 IN SCHOOL MANAGEMENT

ESD / SDGSを学校経営で可視化する VISUALIZE ESD / SDGS IN SCHOOL MANAGEMENT

学校教育目標 School education goals
“みな(皆)とみらい(未来)を創る子”
“Creating The Future Together”

ESDを軸とした「スクールのマネジメント」
“School management” based on ESD

持続可能な社会の担い手を育てるための
「カリキュラムマネジメント」
“Curriculum management” to nurture the leaders of a sustainable society

ESDを軸とした「スクールマネジメント」 “School management” based on ESD

環境、経済、社会、文化の各側面から学術的かつ総合的に取り組む
Minato Mirai Honcho Elementary School tackles academically and comprehensively from environmental, economic, social, and cultural aspects.

子どもたちの発達段階に合わせ、地域の課題と調音付けて取り組む
Minato Mirai Honcho Elementary School works in association with local issues according to the developmental stage of children.

持続可能な社会の担い手を育てるための「カリキュラムマネジメント」 “Curriculum management” to nurture the leaders of a sustainable society

ロジックモデルを用いたプログラム評価
Program evaluation using logic model

豊かな外部リソースを活用した教育活動
Educational activities utilizing abundant local resources

主体的に判断して社会に参画しよ
つとめる姿
Participate in society through independent opinion

自分たちの生活をよりよくするために行う姿
Act to improve their lives

教員横断的な学習（教科ベースから能力ベースへ）で進捗する
課題解決型の学習
Problem-solving learning promoted through cross-subject learning (from subject-based to ability-based)

ESD / SDGSをロジックモデルで可視化する VISUALIZATING ESD / SDGS WITH LOGIC MODEL

ロジックモデルづくり CREATING A LOGIC MODEL

Educational Goal: To nurture the children who can create the sustainable future in cooperation
Illustrate: Fine contentment. To respect diversity, to understand things from multiple perspectives; to find out a question by oneself and keep studying about it; to care of their time and to work on a task.

みなとみらい本町小学校 ロジックモデル（マクロモデル）作成中

マクロモデルからミクロモデルへ From macro model to micro model

ロジックモデルづくり CREATING A LOGIC MODEL

Educational Goal: To nurture the children who can create the sustainable future in cooperation
Illustrate: Fine contentment. To respect diversity, to understand things from multiple perspectives; to find out a question by oneself and keep studying about it; to care of their time and to work on a task.

ESDで育成したい資質・能力に関連付けて作成した
学校教育目標の具現化
Promote the implementation of school education goals created in association with the qualities and abilities to be nurtured by ESD.

ロジックモデルづくり CREATING A LOGIC MODEL

Educational Goal: To nurture the children who can create the sustainable future in cooperation
Illustrate: Fine contentment. To respect diversity, to understand things from multiple perspectives; to find out a question by oneself and keep studying about it; to care of their time and to work on a task.

Outcome: To grow our abilities into the global-minded persons who can contribute to the sustainable society — who can take care of their time, who can understand social issues with respects on different cultures and values; and who can take action for solution of social issues.

Means: By making use of local resources in Minato Mirai, our education supports children become the change agents, who can cooperate with others; to respect diversity, to understand things from multiple perspectives in order to find solutions of the social/global issues; is a good cooperation to parents, local people, and business; and to cooperate for them.

Process: Children enjoy communication with others who have different cultures and values and recognize the significance of such communication. Parents, children enjoy communication with others who have different cultures and values; and recognize the significance of such communication. Parents, children enjoy communication with others who have different cultures and values; and recognize the significance of such communication.

Process: Children enjoy communication with others who have different cultures and values; and recognize the significance of such communication. Parents, children enjoy communication with others who have different cultures and values; and recognize the significance of such communication.

Process: Children enjoy communication with others who have different cultures and values; and recognize the significance of such communication. Parents, children enjoy communication with others who have different cultures and values; and recognize the significance of such communication.

Process: Children enjoy communication with others who have different cultures and values; and recognize the significance of such communication. Parents, children enjoy communication with others who have different cultures and values; and recognize the significance of such communication.

どの程度まで具体的な活動を明記するか TO WHAT EXTENT SHOULD WE DESCRIBE SPECIFIC ACTIVITIES?

直接アウトカム：
希望段階に合った課題を【自ら/主体的に】見出ししている。
Children themselves find issues that are relevant to their developmental stage.

活動：
子どもは、身近なまちや生活を見つめ直す中で、まちの課題解決に向けて願いや思いをもつために、またたくんで（ ）を（ ）する。
While reviewing familiar towns and lifestyles, children make () in the towns to have their wishes and desires to solve the problems in the towns.

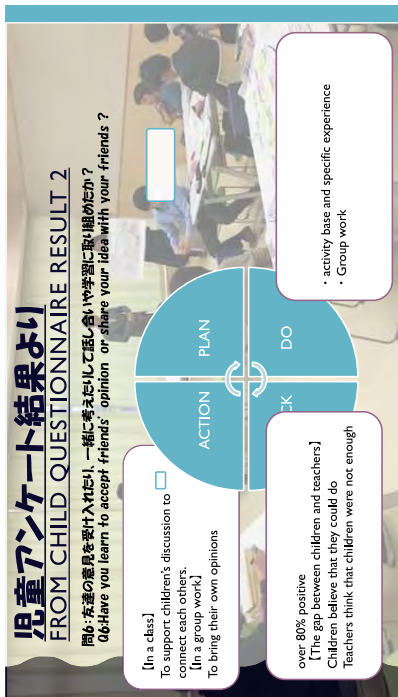
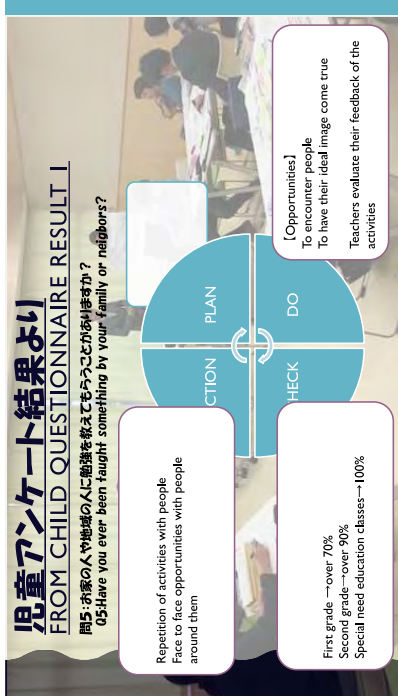
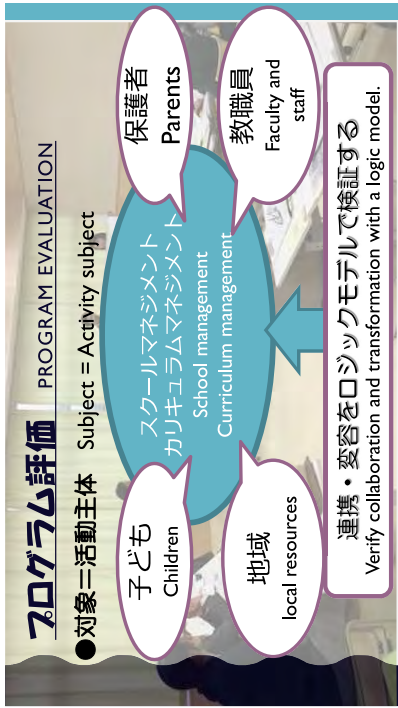
6年間のロジックモデルでは、具体的な活動を書きにくい
With a 6-year logic model, it is difficult to write specific activities.

どの程度まで具体的な活動を明記するか TO WHAT EXTENT SHOULD WE DESCRIBE SPECIFIC ACTIVITIES?

●一般的なロジックモデル
General logic model
直接アウトカム → 手段・活動
Direct outcome → Means / Activities.

●みなとみらい本町小ロジックモデル
Minato Mirai Honcho Elementary School Logic Model
直接アウトカム → 方針
Direct outcome → Guidelines

指針として作成し、活動は学年で位置づける
Created as a guideline, activities should be positioned in grades.



まとめ SUMMARY 1

We were able to share the direction which we should aim for among the teachers, by visualizing the abstract and comprehensive theory of ESD.

We found out clearly what we should do in our daily educational activities by embodying actions with logic model.

The local resources and parents figured out what is the expectations from the school, to show and explain the actions with logic model.

まとめ SUMMARY 2

Keep updating the logic model for making more active.

Keep monitoring and evaluating.

Cooperate more with parents and local resources.

まとめ SUMMARY 3

The new school can create school educational goal from zero

Ability based by cooperating with local resources

ESD training for teachers (university or training)



横浜市立みなとみらい本町小学校
発表者 副校長 松比良 聡夫
教諭 高原 洋介
教諭 堀江 加奈子

本年度の E S D 推進校

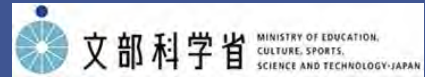
横浜市立永田台小学校
横浜市立幸ヶ谷小学校
横浜市立市ヶ尾中学校
横浜市立東高等学校
横浜市立三保小学校
横浜市立北綱島小学校
横浜市立羽沢小学校
横浜市立日枝小学校
横浜市立恩田小学校
横浜市立港南台第三小学校
横浜市立太尾小学校
横浜市立荏田西小学校
横浜市立中和田中学校
横浜市立南本宿小学校
横浜市立みなとみらい本町小学校
横浜市立新治小学校
横浜市立大門小学校
横浜市立いずみ野小学校
横浜市立西本郷中学校
横浜市立西柴中学校
横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校

(2019年度指定 21校)

本報告書の執筆・作成協力者（E S D 推進校以外）

東京都市大学 環境学部	教授 佐藤 真久
東洋大学社会学部社会学科 大学院社会学研究科	教授 米原 あき
東京大学大学院教育学研究科	准教授 北村 友人
東京大学大学院教育学研究科	特任研究員 八木 恵理子
星槎大学	非常勤講師 和泉 良司
横浜市資源リサイクル事業協同組合	企画室長 戸川 孝則

(2020年1月31日現在)



本事業は文部科学省SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業として行われています。

編集・発行 横浜市教育委員会事務局小中学校企画課
〒231-0017
横浜市中区港町1-1 横浜市ESD推進コンソーシアム
mail: ky-esd@city.yokohama.jp 2020年2月

